

千葉県袖ヶ浦市

寒 沢 遺 跡 (7)

寒 沢 遺 跡 (8)

— 神納地区宅地造成に伴う埋蔵文化財調査 —

2 0 1 4

東日本建設株式会社
袖ヶ浦市教育委員会
株式会社地域文化財研究所

千葉県袖ヶ浦市

寒 沢 遺 跡 (7)

寒 沢 遺 跡 (8)

—神納地区宅地造成に伴う埋蔵文化財調査—

2 0 1 4

東日本建設株式会社
袖ヶ浦市教育委員会
株式会社地域文化財研究所

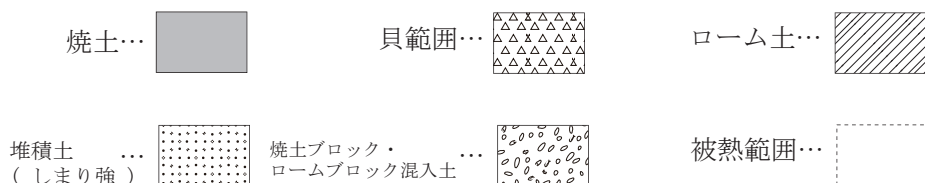
例 言

1. 本書は、神納地区宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書に収録した遺跡は、袖ヶ浦市神納字寒沢 4182 番 4 ほかに所在する寒沢遺跡（千葉県遺跡分布地図No. 29、調査コードは SG061）である。調査にあたっては、事業対象地の確認調査を第 7 次調査、本調査を第 8 次調査として実施した。
3. 発掘調査は、東日本建設株式会社から委託を受け、第 7 次調査は袖ヶ浦市教育委員会が、第 8 次調査は株式会社地域文化財研究所が袖ヶ浦市教育委員会の指導のもとに行った。
4. 発掘調査及び整理事業・報告書作成は株式会社地域文化財研究所 調査研究員 高野浩之が行った。執筆分担は以下のとおりである。
I（1） 袖ヶ浦市教育委員会生涯学習課
I（2～6）・II・III（1～8）・IV 高野浩之（株式会社地域文化財研究所調査研究員）
III（9） 田中大介（袖ヶ浦市教育委員会生涯学習課）
5. 発掘調査は、第 7 次調査を平成 24 年 12 月 12 日から同年 12 月 20 日まで、本調査の第 8 次調査を平成 25 年 2 月 7 日から同年 5 月 17 日まで行った。整理事業及び報告書作成業務は第 7 次・8 次ともに平成 25 年 5 月 20 日から同年 12 月 27 日まで行った。
6. 出土した縄文土器については、齋藤弘道氏にご教示いただいた。
7. 今回の調査に伴う記録図書類や写真類、出土遺物は袖ヶ浦市教育委員会で保管している。
8. 本書を刊行するにあたり、下記の諸氏・諸機関からご指導・ご協力をいただいた。記して感謝を表する。
（順不同・敬称略）

遠藤一平 遠藤元明 豊島満弥 齋藤弘道 東日本建設株式会社 株式会社都重機建設

凡 例

1. 測量基準点は世界測地系を用いた。方位は座標北を表している。
2. 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第 1・2 図 国土地理院発行 25,000 分の 1 地形図「木更津」「奈良輪」
第 3・8 図 袖ヶ浦市発行 2,500 分の 1 地形図 No. 13
3. 図の縮尺は遺構・遺物ともに各図に明記し、標高値の単位は cm までとした。
4. 遺構一覧表の深さは、確認面からのものである。
5. 土器実測図の断面に付したドット（■）は胎土に繊維を含むことを表している。
6. 本書で使用した遺構の略記号は下記のとおりである。なお、遺構図中にある「K」は攪乱を表す。
FP：炉穴 SK：土坑・陥穴
7. 本書で使用したスクリーントーンは下記のとおりである。



目 次

序文

例言・凡例

I. 序章

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過	1
3. 遺跡の立地と周辺の遺跡	2
4. 調査の沿革	5
5. 調査の方法	5
(1) 確認調査	5
(2) 本調査	5
(3) 整理作業及び報告書作成	6
6. 基本層序	6

II. 寒沢遺跡第7次調査

1. 調査の概要	7
2. 調査の結果	8
3. 出土遺物	8

III. 寒沢遺跡第8次調査

1. 調査の概要	9
2. 調査の結果	9
3. 遺構・遺物の概要	11
4. 炉穴	12
(1) 第1炉穴群	12
(2) 第2炉穴群	13
(3) 第3炉穴群	14
(4) 第4炉穴群	16
(5) 第5炉穴群	20
(6) 第6炉穴群	24
(7) 第7炉穴群	32
(8) 第8炉穴群	34
(9) 第9炉穴群	35
(10) 第10炉穴群	37
(11) 第11炉穴群	41
(12) 第12炉穴群	41
(13) 第13炉穴群	42
(14) 第14炉穴群	44
(15) 第15炉穴群	45
(16) 重複の炉穴・単独の炉穴	46
5. 土坑	54
6. 陥穴	55
7. 遺物包含層	57
(1) 遺物包含層の概要	57
(2) 遺物包含層の出土土器	57
8. 出土した石器・礫	62
(1) 遺構出土の石器	62
(2) 遺物包含層・遺構外出土の石器	62
(3) 遺構内・遺物包含層出土の礫	64
9. 炉穴出土貝類の分析	65
(1) 分析の方法	65
(2) 分析の結果	65

IV. 総括

挿図目次

第 1 図	寒沢遺跡の位置と周辺遺跡 (1)	2	第 35 図	第 8 炉穴群出土遺物	35
第 2 図	寒沢遺跡の位置と周辺遺跡	3	第 36 図	第 9 炉穴群実測図 (1)	36
第 3 図	寒沢遺跡調査区域図及びグリッド区割図 ..	4	第 37 図	第 9 炉穴群実測図 (2)	37
第 4 図	小グリッド区割図	5	第 38 図	第 9 炉穴群出土遺物	38
第 5 図	寒沢遺跡 (8) 基本層序	6	第 39 図	第 10 炉穴群実測図	39
第 6 図	寒沢遺跡 (7) トレンチ配置図	7	第 40 図	第 10 炉穴群出土遺物	39
第 7 図	寒沢遺跡 (7) 出土遺物	8	第 41 図	第 11 炉穴群実測図	40
第 8 図	寒沢遺跡 (8) 調査区位置図	9	第 42 図	第 11 炉穴群出土遺物	40
第 9 図	寒沢遺跡 (8) 遺構全体図	10	第 43 図	第 12 炉穴群実測図 (1)	41
第 10 図	第 1 炉穴群実測図	12	第 44 図	第 12 炉穴群実測図 (2)	42
第 11 図	第 1 炉穴群出土遺物	13	第 45 図	第 12 炉穴群出土遺物	42
第 12 図	第 2 炉穴群実測図	14	第 46 図	第 13 炉穴群実測図	43
第 13 図	第 2 炉穴群出土遺物	14	第 47 図	第 13 炉穴群出土遺物	43
第 14 図	第 3 炉穴群実測図	15	第 48 図	第 14 炉穴群実測図	44
第 15 図	第 3 炉穴群出土遺物	16	第 49 図	第 14 炉穴群出土遺物	45
第 16 図	第 4 炉穴群実測図 (1)	17	第 50 図	第 15 炉穴群実測図	46
第 17 図	第 4 炉穴群実測図 (2)	18	第 51 図	第 15 炉穴群出土遺物	46
第 18 図	第 4 炉穴群出土遺物	19	第 52 図	重複炉穴・単独炉穴実測図 (1)	47
第 19 図	第 5 炉穴群実測図 (1)	20	第 53 図	重複炉穴・単独炉穴実測図 (2)	49
第 20 図	第 5 炉穴群実測図 (2)	21	第 54 図	重複炉穴・単独炉穴実測図 (3)	50
第 21 図	第 5 炉穴群出土遺物 (1)	22	第 55 図	重複炉穴・単独炉穴実測図 (4)	51
第 22 図	第 5 炉穴群出土遺物 (2)	23	第 56 図	重複炉穴・単独炉穴出土遺物 (1)	52
第 23 図	第 5 炉穴群出土遺物 (3)	24	第 57 図	重複炉穴・単独炉穴出土遺物 (2)	53
第 24 図	第 6 炉穴群実測図 (1)	25	第 58 図	土坑実測図	55
第 25 図	第 6 炉穴群実測図 (2)	26	第 59 図	土坑出土遺物	55
第 26 図	第 6 炉穴群実測図 (3)	27	第 60 図	陥穴実測図	56
第 27 図	第 6 炉穴群実測図 (4)	28	第 61 図	陥穴出土遺物	56
第 28 図	第 6 炉穴群出土遺物 (1)	29	第 62 図	遺物包含層・遺物出土状況図 (土器) ..	58
第 29 図	第 6 炉穴群出土遺物 (2)	30	第 63 図	遺物包含層出土遺物 (1)	59
第 30 図	第 6 炉穴群出土遺物 (3)	31	第 64 図	遺物包含層出土遺物 (2)	61
第 31 図	第 7 炉穴群実測図 (1)	33	第 65 図	出土石器	63
第 32 図	第 7 炉穴群実測図 (2)	34	第 66 図	遺構別貝類組成 (個体数割合)	67
第 33 図	第 7 炉穴群出土遺物	34	第 67 図	遺構全体貝類組成 (個体別割合)	67
第 34 図	第 8 炉穴群実測図	35			

表目次

表1 寒沢遺跡(7) 出土遺物一覧……………8	表6 寒沢遺跡(8) 遺構一覧表1 (炉穴) ……70
表2 寒沢遺跡(8) 出土礫一覧表……………64	表7 寒沢遺跡(8) 遺構一覧表2 (土坑) ……74
表3 寒沢遺跡(8) 出土貝類種名一覧表……………66	表8 寒沢遺跡(8) 出土土器内訳表1 (炉穴) ……74
表4 寒沢遺跡(8) 遺構別貝類出土数……………67	表9 寒沢遺跡(8) 出土土器内訳表2 (土坑) ……77
表5 寒沢遺跡(8) 貝類計測表……………68	表10 寒沢遺跡(8) 出土石器内訳表……………77

写真図版目次

写真図版1

1. 第1炉穴群北側全景 2. 第1炉穴群南側全景 3. 第2炉穴群全景 4. FP019 火床部土層断面
5. 第3炉穴群全景 6. FP022 遺物出土状況 7. 第4炉穴群全景 8. FP055 貝塊・遺物出土状況

写真図版2

1. 第5炉穴群全景 2. FP090 貝塊断面 3. 第6炉穴群全景1 4. 第6炉穴群全景2
5. FP112・116・117 全景 6. FP112～117・173 土層断面 7. FP112～117・173 東面土層・貝塊出土状況
8. FP138・153 火床部土層断面

写真図版3

1. FP161 貝塊出土状況 2. FP162 貝塊・遺物出土状況 3. 第7炉穴群全景 4. 第8炉穴群全景
5. 第9炉穴群西側全景 6. 第9炉穴群東側全景 7. 第10炉穴群全景 8. FP219・210 遺物出土状況

写真図版4

1. 第11炉穴群全景 2. 第12炉穴群全景 3. 第13炉穴群全景 4. 第14炉穴群全景
5. FP241 貝塊断面 6. 第15炉穴群全景 7. FP001・002、SK004 全景 8. FP012・013 全景

写真図版5

1. FP012 遺物出土状況 2. FP013 遺物出土状況 3. FP036 全景 4. FP068 遺物出土状況
5. FP231～233 全景 6. SK002 全景 7. SK005 全景 8. SK010 全景

写真図版6

出土土器(1) 第1～第4炉穴群

写真図版7

出土土器(2) 第5～第6炉穴群

写真図版8

出土土器(3) 第6～第7炉穴群

写真図版9

出土土器(4) 第7～第11炉穴群

写真図版10

出土土器(5) 第12～第15炉穴群、重複炉穴・単体炉穴

写真図版11

出土土器(6) 土坑、陥穴、遺物包含層

写真図版12

出土土器(7) 出土石器

I．序章

1．調査に至る経緯

平成 24 年 9 月 17 日に東日本建設株式会社（以下、事業者という。）が約 9,000 ㎡の宅地造成を計画していることから、袖ヶ浦市神納字寒沢 4182-2 他における周知の埋蔵文化財包蔵地の有無について問い合わせがあった。

問い合わせ地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である寒沢遺跡内にあたることを回答した。

問い合わせを受けて、平成 24 年 11 月 5 日に試掘調査を実施した。その結果、事業予定地の北側で縄文時代の炉穴や土坑を確認するとともに、縄文土器が多数出土したことから、縄文時代の遺構や遺物包含層が存在することが明らかとなった。なお、事業地の北東側は過去に削平されていたことから、その範囲については遺構も削られているものと判断された。

試掘調査後に事業者と協議を行った結果、記録保存の措置を講ずるとの結論に達したことから、試掘結果を踏まえて事業対象地約 9,000 ㎡のうち北東側と南側を除く北側 3,930 ㎡を調査対象範囲とした。

調査にあたっては、まず袖ヶ浦市教育委員会により調査対象地 3,930 ㎡のうち 380 ㎡の確認調査を実施した。

そして、平成 24 年 12 月 26 日付け袖教生第 2588 号にて確認調査の結果を事業者へ通知した。その結果を受けて遺構の展開が予想される 2,700 ㎡の本調査を実施することとなった。本調査を実施するにあたっては、事業者と報告書刊行までの業務委託契約を締結した株式会社地域文化財研究所が実施することに至った。

（袖ヶ浦市教育委員会生涯学習課）

2．調査の経過

（1）第 7 次調査（確認調査）

確認調査は、平成 24 年 12 月 12 日から 12 月 20 日にかけて、事業地面積 3,930 ㎡を対象に行った。

調査開始日 12 日にトレンチ設定を実施し、設定後に各トレンチの表土除去を行った。表土除去が終了したトレンチには随時作業員を投入し、遺構確認の精査に入った。14 日からは遺構確認作業と併行して記録作業を開始し、19 日までに予定していた 36 箇所のト

レンチ調査を終了した。20 日には遺構の性格や深さ等を把握するため、サブトレンチを用いた調査を行い、確認調査を終了した。

（2）第 8 次調査（本調査）

本調査は、確認調査の結果から 2,700 ㎡の調査区を設定し、平成 25 年 2 月 7 日から 5 月 17 日にかけて行った。

表土除去は 2 月 7 日から開始し、21 日まで行った。事業計画との兼ね合いから、作業は南側より着手している。ある程度表土除去が進んだ状況を見て、12 日より作業員を投入し、13 日から遺構の掘り下げを開始した。20 日からは遺構の掘り下げと併行して実測作業を開始し、調査の進捗に併せて随時作業を進めた。3 月下旬には、作業も調査区北側の地点に移行している。遺物包含層の掘り下げを 25 日から開始、翌 4 月まで継続し、10 日まで行っている。11 日には、遺構の掘り下げとともに、遺物包含層直下の遺構確認に入った。4 日から行っていた G 8 グリッドの遺構群の掘り下げは、遺構の広がり予想を上回り、18 日まで作業を要した。5 月 12 日には遺構の掘り下げをほぼ終了した。13・14 日にかけて調査区全体を清掃し、写真撮影を行った。15 日から 17 日にかけて主に実測を行い、17 日に発掘調査の全工程を終了した。

（3）整理作業

整理作業は、平成 25 年 5 月 20 日から 12 月 13 日にかけて行った。

5 月 20 日より遺物の水洗い作業を開始し、28 日までに終えた。その後注記作業を 6 月 19 日から 6 月 26 日まで行った。遺物の接合作業は 8 月 5 日より開始し 8 月 30 日までに終えている。9 月に入って遺物の実測作業を開始し、9 月 9 日からは拓本作業にもに入った。遺物の実測は 10 月 2 日まで、拓本作業は同月 11 日まで継続した。遺構図の作成は、遺物の実測・拓本作業と併行した。10 月 17 日から 10 月 29 日までは遺構及び遺物の一覧表を作成、データ化した。10 月 30 日から原稿執筆と編集作業に着手し、12 月 13 日に終了した。

12 月 15 日以降に校正を行い、翌年 1 月 10 日に印刷所へ入稿して本書の刊行に至る。

3. 遺跡の立地と周辺の遺跡

寒沢遺跡の所在する袖ヶ浦市は、千葉県中西部の東京湾沿岸に面し、市域の地形は下総台地が養老川によって開析された袖ヶ浦台地と、小櫃川によって形成された平野部に分かれている。台地部には境川、蔵波川、久保田川、浜宿川、笠上川といった小河川が侵食し、樹枝状になった開析谷が複雑に入り組んでいる。

寒沢遺跡でも、北側の蔵波川と南側の境川に挟まれた標高 35 m の台地上にあり、蔵波川から派生した開析谷は本遺跡のすぐ北側まで迫ってきている。

この袖ヶ浦台地には数多くの遺跡が周知され、寒沢

遺跡の周辺も例外ではない。旧石器時代では石器ブロック 3 箇所を検出した百々目木 B 遺跡をはじめ、奈良・平安時代の拠点集落となる雷塚遺跡など、各時代の遺跡が見受けられる。ここでは、今回の調査に関連する縄文時代早期の遺跡を中心に見てゆく。

袖ヶ浦市内における縄文時代の調査報告の中で、早期の遺構を検出している割合は高い。遺構は検出されていないが、遺物が出土したなどの痕跡のある遺跡を含めるとかなりの数にのぼる。そしてその多くは小河川を臨む台地上に分布している。

遺構では、撚糸文期の竪穴住居跡が検出された打越



第 1 図 寒沢遺跡の位置と周辺遺跡 (1) (1:25, 000)

岱遺跡などの事例を挙げられるが、大体は炉穴を検出する例が多い。東側 1.5km に所在する中六遺跡は炉穴 200 基以上が存在した袖ヶ浦市内の代表的な遺跡である。子母口式から茅山式までの条痕文土器が炉穴内からも出土し、炉穴の稼動時期を想定する上で貴重な資料を提供している。この中六遺跡の北東側には、美生遺跡、堂庭山 B 遺跡、子者清水遺跡、正源戸 B 遺跡が蔵波川に沿って展開し、いずれも子母口式から茅山式期が主体となっている。さらに久保田川を挟んだ対岸には子母口式期の炉穴を多数確認した八重門田遺跡、条痕文土器を主体とし、鶺鴒島台式期の竪穴住居跡も

検出された豆作台遺跡、早期の陥穴が検出された上大城遺跡などが展開している。

寒沢遺跡と同じ台地上に目を転じると、百々目木 C 遺跡、清水頭遺跡、雷塚遺跡が境川沿いに連なり、条痕文土器を主体とした遺構群の存在が確認されている。寒沢遺跡に隣接する雷塚遺跡では、縄文早期の検出例はわずかであったが、その西方約 500 m 地点の東京湾に面した台地縁辺部に立地する大窪遺跡では、確認調査により炉穴群の存在が明らかになっている。



第 2 図 寒沢遺跡の位置と周辺遺跡 (2) (1:25,000)



第3図 寒沢遺跡調査区域図及びグリッド区割り図 (1:3,000)

4. 調査の沿革

寒沢遺跡では過去6次にわたる発掘調査が行われている。これまでの成果では道路跡が主体となり、現在の道路（市道0105号飯富・蔵波線）が奈良時代の官道から近世の津田し道として利用され、現在に至るものと考えられている。

各次の調査概要は以下のとおりである。

第1次調査：昭和61年、町道（当時）0105号飯富・蔵波線の道路改良工事に伴う4,000㎡の本調査が実施された。近世以前の溝3条と道路6条が確認された。

第2次調査：平成6年、老人保健施設建設に伴う935㎡の確認調査が実施された。奈良・平安時代の道路4条と近世の道路1条が確認された。

第3次調査：平成7年、老人保健施設建設に伴う3,612㎡を対象とする確認調査が実施された。土坑1基と道路4条が確認された。

第4次調査：平成8年、個人による埋め立て事業に伴う2,400㎡を対象とする確認調査が実施された。縄文時代の陥穴1基、溝1条と道路9条が確認された。

第5次調査：平成18年、宅地造成に伴い130㎡の本調査が実施された。土坑1基、道路5条が確認された。

第6次調査：平成19年、宅地造成に伴う3,240㎡を対象とした確認調査が実施された。土坑2基、溝1条、ピット1基が確認された。土坑1基は縄文時代前期後半のものと考えられる。

5. 調査の方法

（1）確認調査

対象地内に世界測地系IX系に基づいた基準点測量により、遺跡全体を包括した20m方眼のグリッドを設定した。トレンチはこの座標軸方向に従って2×5mのトレンチを設定している。

トレンチ掘削はバックホウによって表土を掘り下げた。事前に実施されている試掘調査の結果結果をもとに、縄文時代の遺物包含層が遺存している可能性のある地点においては遺物包含層まで、削平によって遺物包含層が遺存していない場所はソフトローム層までである。その後のトレンチ精査は人力によって行った。

（2）本調査

グリッドは、確認調査で用いた方眼のグリッドを援用し、20m四方の大グリッドを設定した。さらに大

グリッドを2×2mの小グリッドに区分けし、北西隅から00・01・02……、北東隅09、南西隅を90、南東隅を99というように100区に分割し、遺物取り上げなどの基準にした。

表土除去はバックホウを用い、遺物包含層が遺存する地点はⅡc層直上、遺存しない地点はⅢa層まで掘り下げた。遺構が調査区外にかかる場合は全体が検出される部分まで拡張した。縄文時代の遺物包含層は人力による層下げを進めていたが、竹の根の繁殖が激しく、小規模な攪乱も散在することから、E7・F7グリッド部分は小型のバックホウ（0.1）を導入し、小グリッドごとに対処した。

遺構図の作成は、20分の1を基本とし、基本堆積土層図及び出土遺物微細図等については適宜状況に応じた縮尺を用いた。

写真撮影は、主体に中型カメラを用い、白黒6×7判フィルムを使用した。補助として小型カメラを用い、35mm判白黒及びカラーリバーサルフィルムを使用した。さらにデジタルカメラ（1,000万画素）も用いて、撮影記録をデータ化した。

遺構名は、遺構の性格に応じた略号（凡例参照）を用い、略号後に3桁の番号を付した。

遺構から出土した遺物は、地点ごとに取り上げたものは、遺構名の後に4桁の番号を付している。一括して取り上げたものは、出土した位置や状況を「1」番から連番で台帳に記載し、遺物の出土状況を把握できるようにした。出土遺物への注記方法について、確認調査では、遺跡コード（調査次）ートレンチ名（例：SG061(7)－1T）、本調査では、遺跡コード（調査次）－遺構名－遺物番号又は一括取り上げ番号（例：SG061(8)－FP001－0001又は1）と記した。

		2m								
2m	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
	10									
	20									
	30									
	40									
	50					55				
	60									
	70									
	80									
	90									99

S=1:200

第4図 小グリッド区割り図

(3) 整理作業及び報告書作成

遺物の水洗いは、全ての遺物に対して行い、注記作業は、注記マシンを使用し、注記不可能な細片を除き、可能な限り行った。土器修復には、補強材としてバイサム（赤褐色）を用いた。

土器及び石器の実測は全て手測り実測を行った。

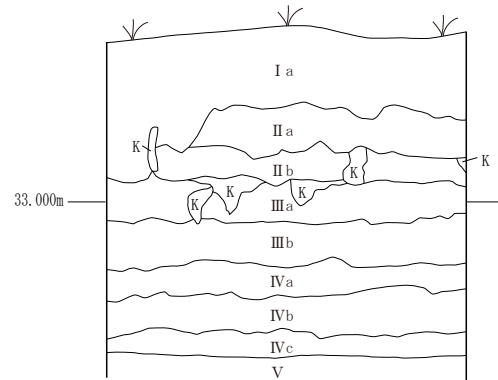
遺物の集計は、中六遺跡(11)・(12)の調査報告書に倣った。土器は破片数と重量計測を全て行い、礫は遺構・グリッドごとに完形礫と破損礫を仕分けし、さらに完形礫はSSからLLまでの大きさに分類した。

報告書作成については、遺構図は修正後にデジタルトレース、遺物図は実測後にトレース・拓本によって版下を作成し、最終的にDTP編集を行っている。

6. 基本層序

基本層序はF6-02グリッド地点の調査区北壁で観察した。観察にあたっては当遺跡第5次調査の基本層序と比較検討しながら分層を行っている。

本次調査の基本層序は、大きく4層に分けた。Ⅰ層は現表土で、竹の根が密生し、直下の層を大きく侵食している部分もあった。Ⅱ層は表土層直下の旧表土Ⅱa層と縄文時代早期を主体とした遺物包含層Ⅱb層に分けられ、縄文時代前期以降の掘り込みはⅡa層上面が確認面となる。Ⅱb層中の遺物は上層中からの出土が多く、縄文時代前期以降の遺物も認められることから、Ⅱa層下部からⅡb層上部が縄文時代層・前期の遺物包含層と理解される。第5次調査のⅡc層に相当するものとみられる。Ⅲ層はソフトローム層で状態の差異から2層に分けた。上部のⅢa層上面が、縄文時代早期の遺構確認面となる。下部のⅢb層は上層より粘性があった。Ⅳ層以下はハードローム層になり、状態と色調の違いからさらに3層に分けた。最上部のⅣa層はやや締りが弱く、ソフトロームからハードロームへの漸移的な層になる。Ⅳb層以下は締りが強くなり、赤色・黒色のスコリアが目立つようになる。Ⅳb層は締りが強い割には精査の際にブロック状に崩れるが、Ⅳc層になると締りの強度が増し、緻密な感触である。Ⅴ層は色調が暗くなり、黒色帯の上層部と考えられる。



第5図 寒沢遺跡(8) 基本層序

基本層序土層説明

- Ⅰ層・黒色土 竹の根が密生し土質が脆い状態。締りは全体に弱く粘性もない。
- Ⅱa層・黒褐色土 旧表土。ローム粒を極微量含む。締りあり、粘性弱。
- Ⅱb層・暗褐色土 ローム粒微量、テフラを斑状に含む。締りあり、粘性弱。
- Ⅲa層・褐色土 ソフトローム層。締りあり。粘性ややあり。
- Ⅲb層・褐色土 ソフトローム層。締りがあり、Ⅲa層より粘性が強い。
- Ⅳa層・褐色土 Ⅲb層より弱め。粘性あり。ソフトロームからハードロームの漸移的な層。
- Ⅳb層・黄褐色土 ハードローム層。赤色スコリア微量含む。締り強、粘性弱
- Ⅳc層・黄褐色土 ハードローム層。赤色スコリアを少量含む。締りが強く、粘性もややあり。
- Ⅴ層・褐色土 赤色・黒色スコリアを少量含む。締り強く、粘性もややあり。Ⅳ層に比べ色調が暗い。

【参考文献】

- 袖ヶ浦町・財団法人君津郡市文化財センター『寒沢遺跡』『寒沢遺跡・向萩原遺跡・向山野遺跡』1991
- 袖ヶ浦市教育委員会『寒沢遺跡(2)』『千葉県袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書』1995
- 袖ヶ浦市教育委員会『寒沢遺跡(3)』『千葉県袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書』1996
- 袖ヶ浦市教育委員会『寒沢遺跡(4)』『平成8年度袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書』1997
- 東日本建設株式会社・袖ヶ浦市『寒沢遺跡(5)』2007
- 袖ヶ浦市教育委員会『寒沢遺跡(6)』『平成19年度袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書』2008
- 袖ヶ浦市教育委員会『大窪遺跡』『平成9年度袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書』1998
- 袖ヶ浦市教育委員会『清水頭遺跡第2次調査』『平成23年度袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書』2012
- 袖ヶ浦市・財団法人君津郡市文化財センター『百々目木B・C・清水頭・清水沢遺跡』1998
- 清水建設株式会社・財団法人君津郡市文化財センター『雷塚遺跡』1999
- スエヒロ建設株式会社・袖ヶ浦市教育委員会『中六遺跡第11・12次発掘調査報告書』2011

Ⅱ．寒沢遺跡第7次調査

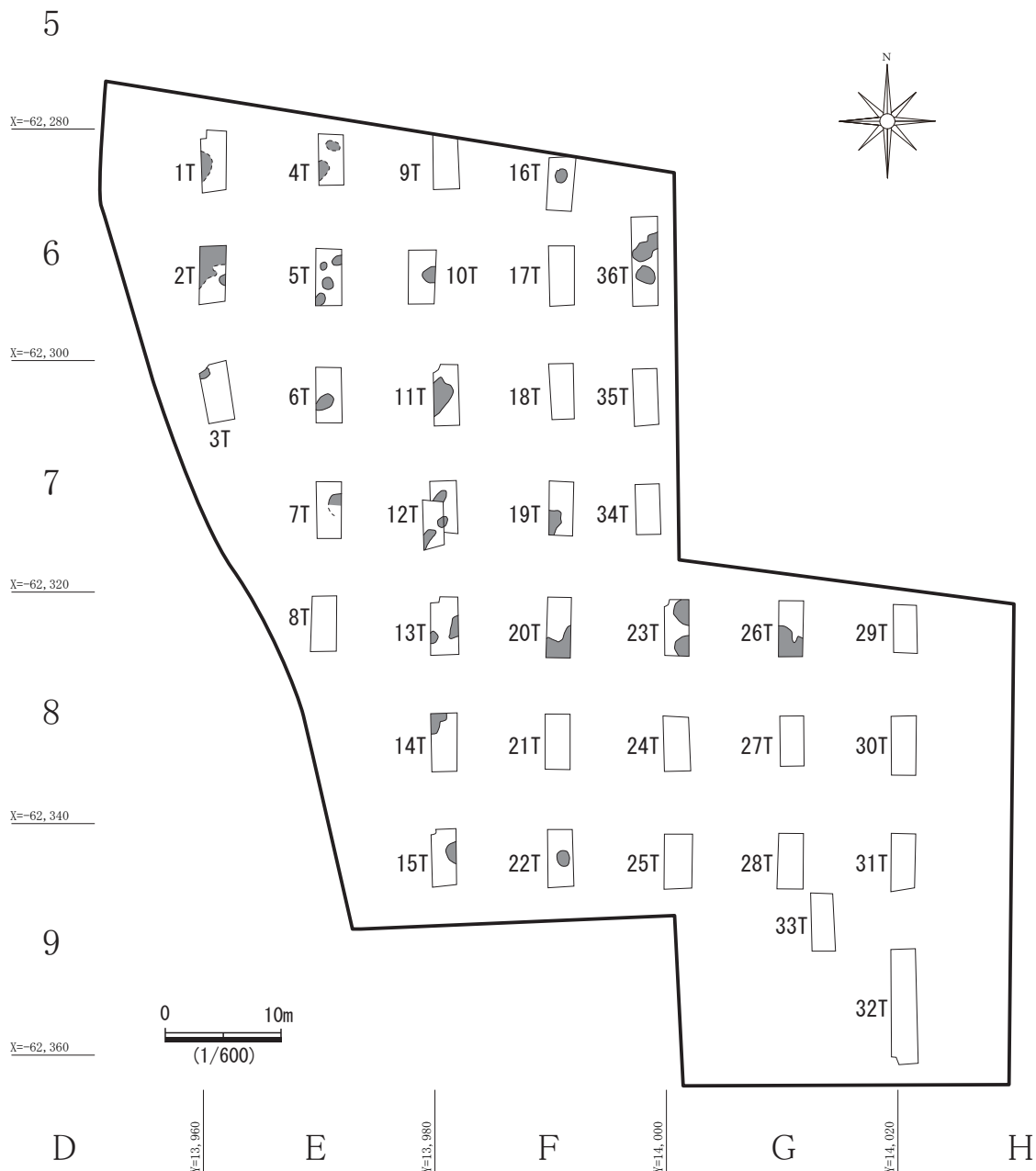
1．調査の概要

寒沢遺跡第7次調査(以下寒沢遺跡(7)と呼称する)は、同遺跡第8次調査の確認調査である。事前に行われた試掘調査により、遺物包含層と炉穴等の存在する可能性が高いと判断された。本次調査では、宅地造成部分の調査対象面積 3,930 m²に対し、南北方向に2×5 mを基本としたトレンチを36箇所設定した。トレンチの総面積は380 m²で調査対象面積の約10%であ

る。

調査地の現況はほぼ平坦な地形であるが、ほぼ中央に段があって地形を改変している可能性があった。段の北側は竹林で、南側は更地になっていたが、南側は以前畑地として利用されていたらしい。

確認調査の結果から、2,700 m²が本調査の対象になった。



第6図 寒沢遺跡(7) トレンチ配置図

2. 調査の結果

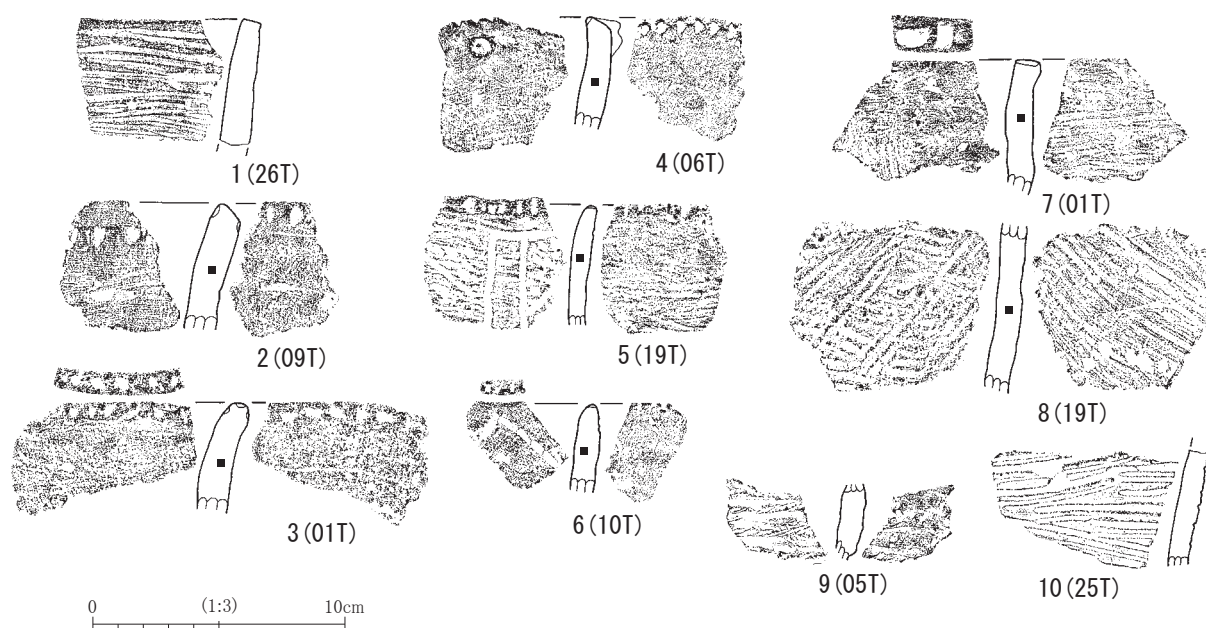
遺構は、36箇所の特レンチの内17箇所を確認し、炉穴又は炉穴と考えられる落ち込みが15基、土坑又は遺物を伴う落ち込みが12基と遺物包含層1箇所であった。遺構の確認できた地点は、主に調査対象地の中央から西側寄りで認められる傾向にあった。また遺物包含層は北側に遺存し、南側は削平や攪乱の影響で確認できなかった。

遺構の深さは20～40cm程度と予想されたが、深さ80cmを超える陥穴も確認した。遺物包含層の厚さは5～15cm程度で、北側ほど層が厚かった。

3Trでは攪乱を受けて遺物包含層は遺存しなかったが、明らかな焼土を確認し炉穴が谷の縁辺まで所在することがわかった。10Trは試掘時に廃棄遺物が出土した地点に被ったため西側にずらして設定した。12Trでは一部拡張を行い、厚さ30cm程の焼土の堆積を確認した。15Trの落ち込みは深く、陥穴状の落ち込みと判断した。

表1 寒沢遺跡(7)出土遺物一覧

	縄文土器	石器・礫		縄文土器	石器・礫		縄文土器	石器・礫		縄文土器	石器・礫
1T	7	4	10T	12	5	19T	13	18	28T	-	-
2T	15	4	11T	3	5	20T	9	11	29T	5	-
3T	-	-	12T	5	8	21T	6	7	30T	1	1
4T	8	14	13T	3	2	22T	8	4	31T	1	-
5T	22	7	14T	1	2	23T	28	12	32T	3	58
6T	21	14	15T	7	4	24T	2	1	33T	3	11
7T	5	6	16T	17	8	25T	1	1	34T	6	9
8T	-	-	17T	1	6	26T	10	3	35T	7	6
9T	19	2	18T	-	1	27T	5	3	36T	35	16



第7図 寒沢遺跡(7)出土遺物

3. 出土遺物

遺物は、全特レンチから縄文土器297点、石器6点、礫256点が出土した。

出土した土器は、縄文時代早期後半の胎土に繊維を含む貝殻条痕文系の土器が主体であるが、撚糸文系や沈線文系の土器も見受けられ、早期全般の遺構の存在が考えられた。また縄文時代前期の土器片も認められた。石器は石皿、磨石が出土している。

1は細い沈線をやや乱雑に施したもので口唇部が若干外削ぎ状になり、田戸下層式と考えられる。2～4は口唇部の内・外端部に刻みを有する口縁部片で、わずかに繊維が含まれる。4は赤褐色の色調で胎土も良く、突起が施される。いずれも田戸上層式に比定される。5～8は条痕文系の土器で胎土に繊維を多く含む。5は幾何上沈線内に刺突を充填させる鵜ガ島台式である。9は地文RL縄文に刻みを有した浮線文を施している。10は平行沈線を密に施したもので9・10ともに縄文前期の諸磯b式に比定されるものである。

Ⅲ．寒沢遺跡第8次調査

1．調査の概要

寒沢遺跡第8次調査（以下寒沢遺跡（8）と呼称する。）は、寒沢遺跡（7）の確認調査に基づいて実施された本調査である。本調査の対象となったのは、確認調査対象面積 3,930 m²のうち、南東側を除いた東側の一部と西側全体の 2,700 m²である。調査区東側に突出した G8・G9 グリッド部分では、遺構の広がり予想以上であったため、拡張して調査を行った。

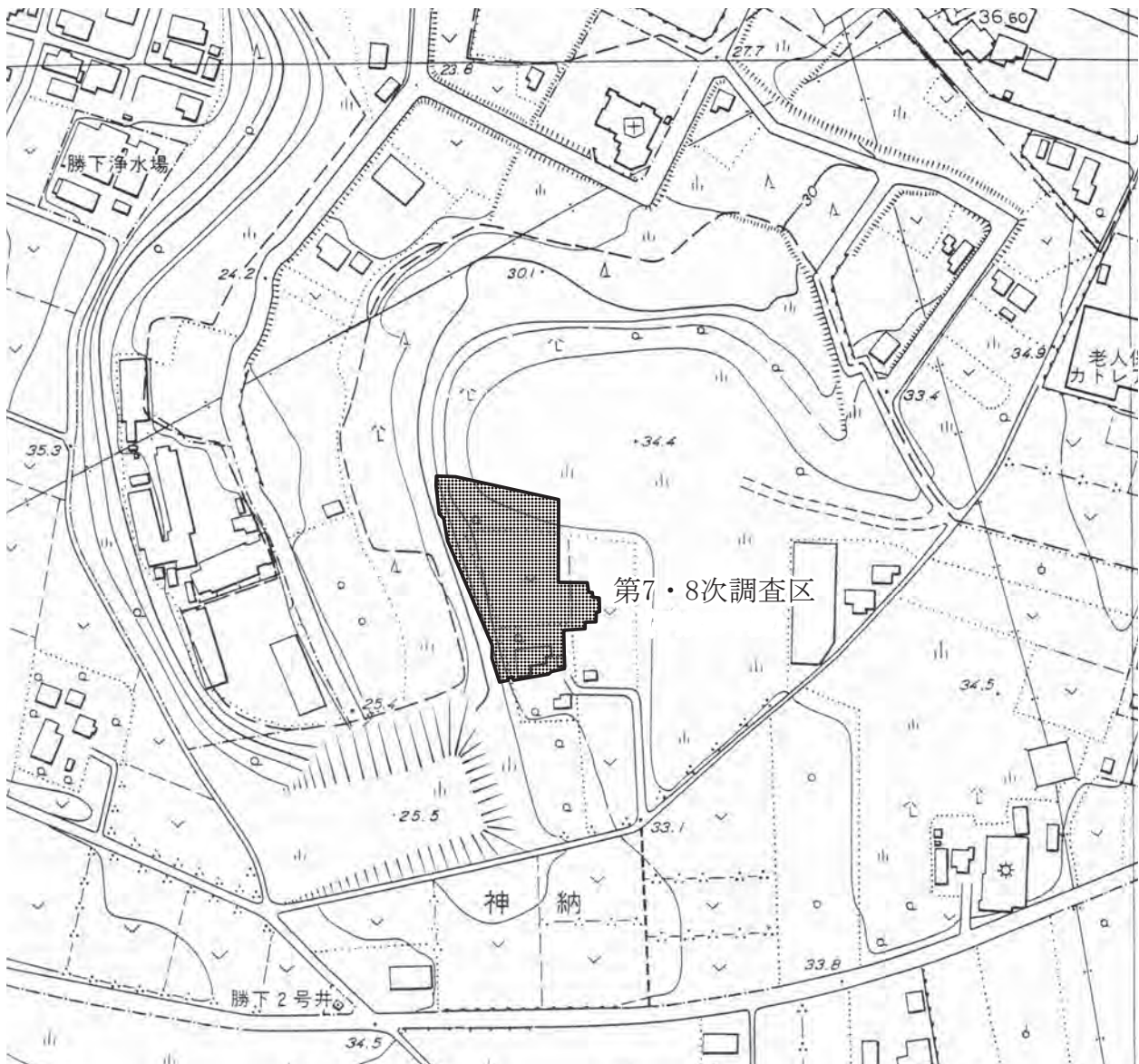
寒沢遺跡（8）は、寒沢遺跡として指定された範囲の北西端に位置している。調査区の北西側では谷の入り組みが激しい場所で、調査区の西側にも深い谷が侵入している。現況は平坦地になるが、宅地や畑地として

利用するために削平されたとみられる。

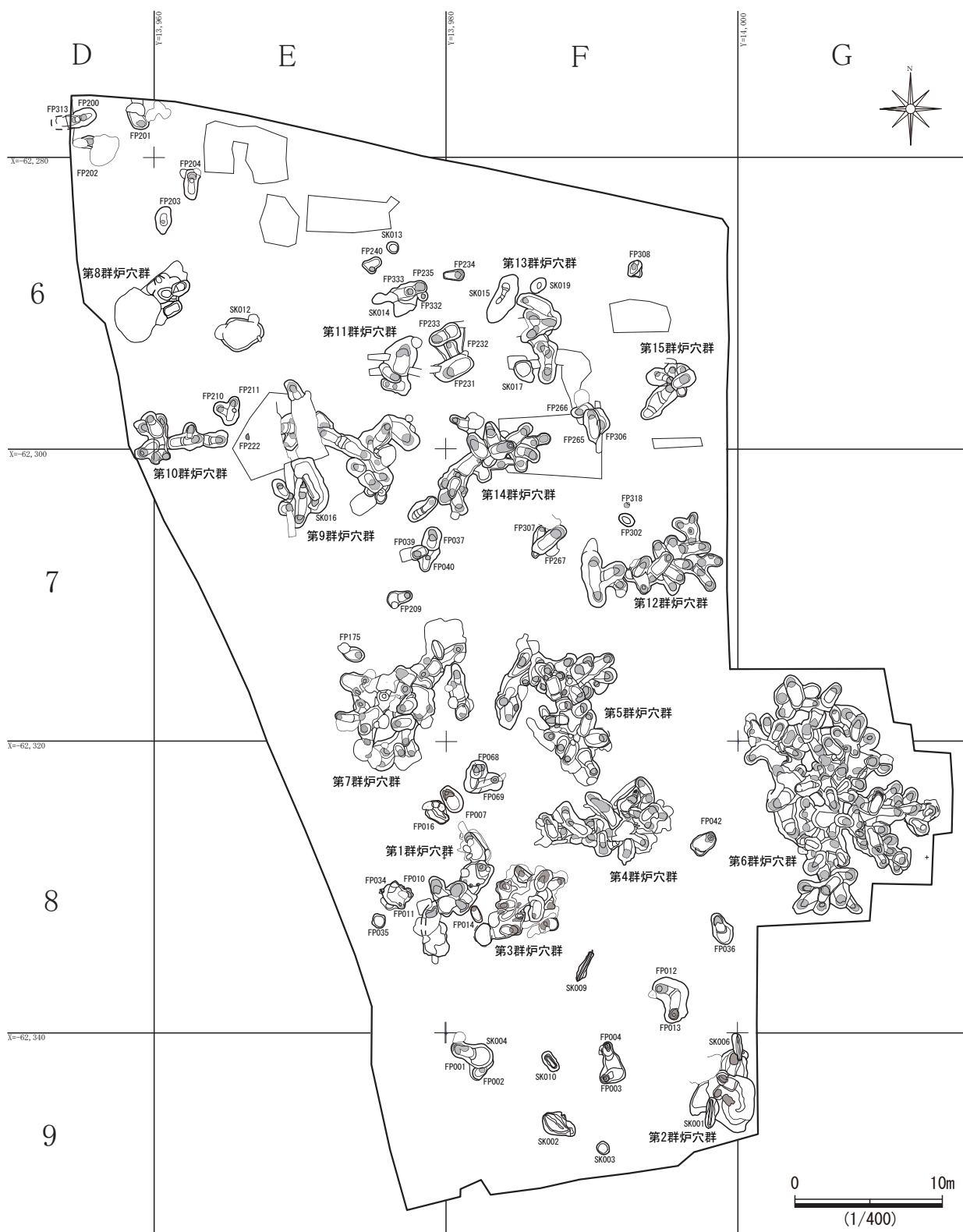
2．調査の結果

確認した遺構は、縄文時代早期の炉穴 334 基、土坑 17 基、縄文時代前期の陥穴 6 基、調査区北半分にわたる縄文時代早期から前期の遺物包含層 1 箇所であった。

炉穴は火床部をもって 1 基と数えた。1 基の中に複数の火床を持つ可能性も考えられたが、1 基ごとに造り替えを行って重複したものと判断した。また 4 基以上の重複を炉穴群として括り、15 箇所を炉穴群として扱い、それぞれ第 1 炉穴群から第 15 炉穴群と呼称した。



第8図 寒沢遺跡（8）調査区位置図（1:2,500）



第1炉穴群 7基 (FP005・006・008・009・015・038・043) 第2炉穴群 4基 (FP017～019・041)
 第3炉穴群 14基 (FP020～033) 第4炉穴群 21基 (FP044～064) 第5炉穴群 31基 (FP070～100)
 第6炉穴群 87基 (FP101～174・319～331) 第7炉穴群 24基 (FP176～199) 第8炉穴群 4基 (FP205～208)
 第9炉穴群 22基 (FP212・223～225・236～239・262・268～273・303・311・312・314～317)
 第10炉穴群 9基 (FP213～221) 第11炉穴群 4基 (FP226～229) 第12炉穴群 24基 (FP242～261・304・305・310・334)
 第13炉穴群 7基 (FP263・264・274～277・309) 第14炉穴群 17基 (FP241・278～293) 第15炉穴群 8基 (FP294～301)

第9図 寒沢遺跡(8)遺構全体図

3. 遺構・遺物の概要

寒沢遺跡(8)の調査において、確認された遺構の時代は縄文時代のみであった。遺構の種別としては、335基を確認した縄文時代早期の炉穴が圧倒的に多く、遺構総数の約94%を占める。

炉穴総数全体の85%が炉穴群に属する。群として扱わなかった炉穴は、3基以内の重複が13箇所・32基で炉穴総数の9%、重複のない単独が19基で炉穴総数の6%であった。

炉穴の平面形態は楕円形・長楕円形のものが多く、瓢箪形や隅丸方形もわずかに見受けられる。規模は、炉穴によって差もあるが、明確に計測された中では、長軸の最小がFP299の0.74m、最大がFP013の2.94mであった。1.5mを超える炉穴は82基あり、その内2mを超えるのは27基を数える。最も深いものはFP153の1.08mであった。ちなみに1.5mより小さい規模の炉穴は28基にとどまり、寒沢遺跡(8)で確認された炉穴が規模の大ききものを主体とすることが理解される。規模の大きい炉穴は調査区南寄りの第1炉穴群から第7炉穴群に集中していた。

燃焼部となる火床は、炉穴ごとで規模に差がある。火床の大小は、炉穴自体の全体の規模に比例するようである。FP001・017・051・108・112などは深さを有し、赤化して硬化する範囲が広い。その中には壁面にまで及ぶものもある。一方で、FP201～203、240など小規模な浅い炉穴では、赤化範囲が小さめで、被熱が弱いため硬化していない火床が多い。FP295などのように赤化した範囲を伴わないが、ローム面が明らかに被熱しているものも見受けられた。

足場は、火床に向けて角度を持ち、スロープ状になったものと、ほとんど角度を持たない平坦なものに分けられる。スロープ状になった足場は、長くて深いものに多い。その中には段を有した足場もあり、足掛けに利用した可能性もある。FP001に重複するSK004などもこの類ではないかと考えられる。平坦なものは浅い遺構に多く見受けられた。

炉穴内の覆土は、上層部では黒褐色土・暗褐色土、下層部では暗褐色土・暗赤褐色土が主体となり、全体に赤みを帯びる。下層部では粒が5～20mm大の焼土ブロックや被熱したと見られる硬質のロームブロックが多量に含まれている場合が多い。FP017・153など

では、深い炉穴を使用した後、人為的に埋め戻して新しい炉穴を構築した状況が確認された。

主軸方位は、足場を基点にして燃焼部の方位を測っているが、あらゆる方角に向けて構築され、規則性は見出せない。しかし、第6炉穴群や第12炉穴群のように、一定方向に向かって炉穴を連続させている傾向が捉えられる。

炉穴から出土した遺物は、縄文時代早期後半の条痕文系の時期が主体である。時期が判別できるのは鵜ガ島台式・茅山下層式期が認められ、貝殻条痕文が施されている土器は、ほぼこの時期に帰属すると考えられる。無文土器でも繊維が含まれているものはこの範疇であろう。鵜ガ島台式の前段階に位置づけられる野島式期の土器はわずかに出土するが、それより前段階の子母口式は認められなかった。稲荷台式を主体とする撚糸文系と、田戸下層式を主体とする沈線文系の出土も見られるが、いずれも上層部からの出土で、量的にも条痕文系土器には及ばず、遺構には伴わないと判断される。無文土器で繊維が含まれていない土器もこの範疇に入ると思われる。

土坑は17基(SK003～005・007・008・011～013・015・017～024)のうち、単独で確認されているSK003・005・012～018の9基を除いては全て炉穴群の中に含まれる。形態は円形または楕円形で、規模も大小あり、SK005のように袋状のものもあった。遺物は縄文時代早期の遺物が主体で出土しており、いずれも当該時期の土坑と考えられる。

陥穴は6基で、縄文時代前期の所産である。SK001・002・006・009・010・011)。いずれも平面形態は長楕円形の溝型が主体で、ほぼ同時期に利用されたと考えられる。SK001・006は第1炉穴群を切り込み、SK016も第9炉穴群を切り込んで確認されていることから、炉穴群の時期よりは新しいと判断され、SK002の下層部から縄文時代前期の遺物が出土していることでも、当該時期の陥穴として判断できる。

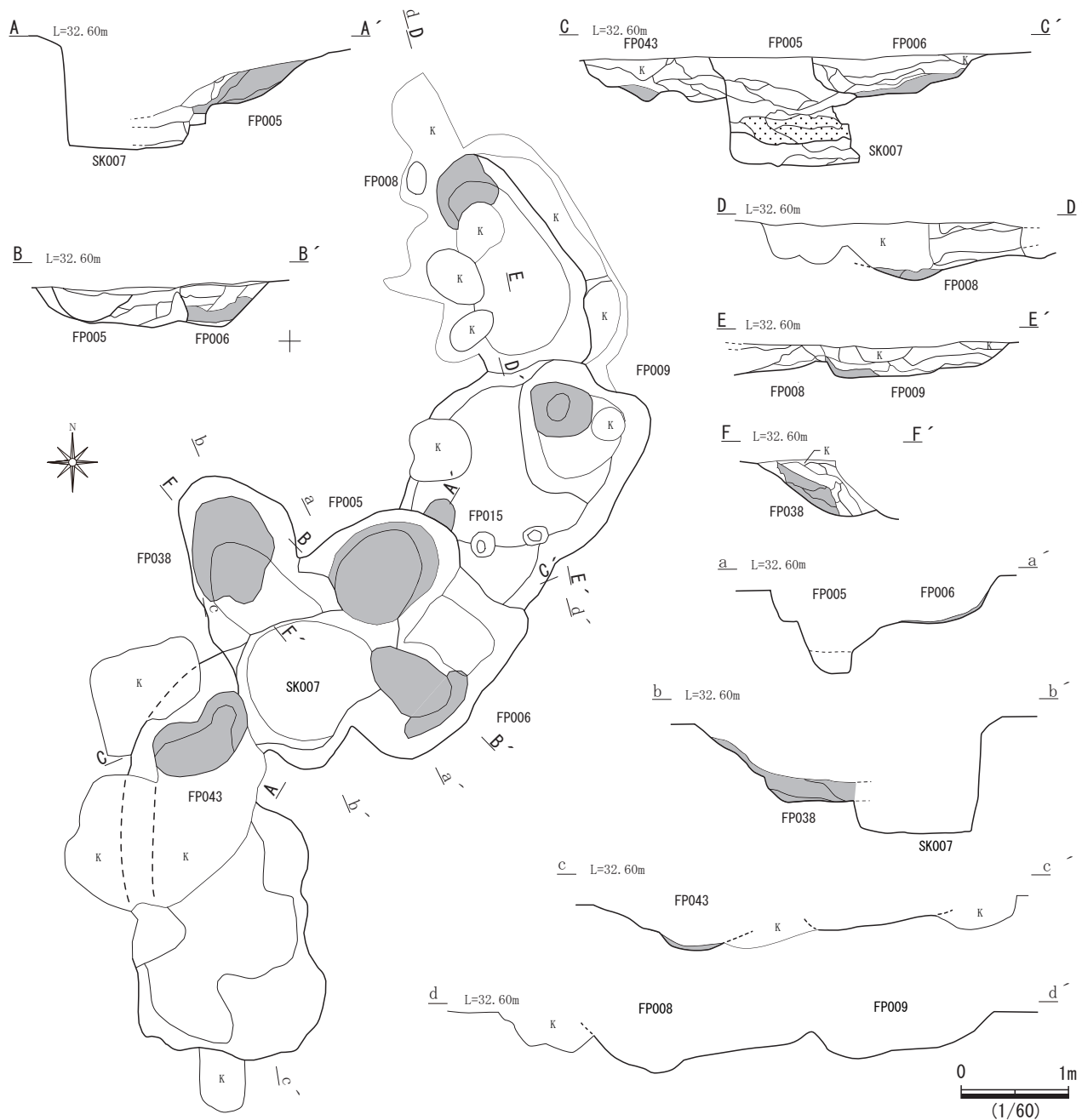
その他に縄文時代早・前期の遺物包含層が1箇所あり、調査区の北側E8・F8グリッド以北に遺存する。層厚は5～15cm程度で、北側ほど層が厚さを増すという寒沢遺跡(7)の報告が裏付けられた。遺物は、包含層の上面で主に出土している。

4. 炉穴

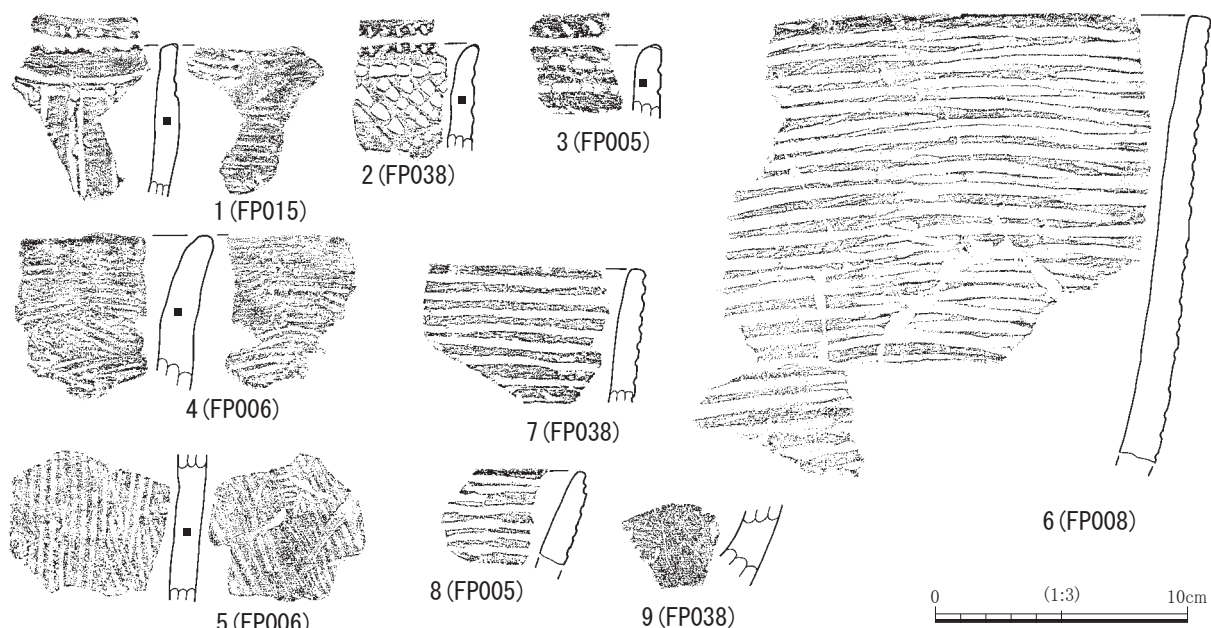
(1) 第1炉穴群

第1炉穴群は、FP005・006・008・009・015・038・043の7基の炉穴が重複したもので、南北に長い弓形状の形態になっている。全体の規模は、長軸が8.72 m、短軸は最も広い場所で3.33 mである。位置は西側谷部寄りのE8・F8グリッドにまたがった地点にあたる。炉穴群の北側は、FP008・009が直線状に連なっている。一方南側では、極端に深いSK007を中心にして

FP005・006・038・043が取り囲むように確認されている。FP005・038はともに焼土が厚く堆積し、構造的に類似する炉穴で、足場の部分がSK007に重なっている。明瞭な切り合いが認められないことから、一連のものと考えられる。SK007は、極端に深く掘り込まれた方形の土坑である。土坑内部は東側の壁面を奥に削り込んだ特異な形態で、覆土中には、焼土ブロックと被熱したロームブロックが多量に含まれた層が厚く堆積していた。FP005・038の焼土の厚さから考え



第10図 第1炉穴群遺構実測図



第 11 図 第 1 号炉穴群出土遺物

ると、長期間の使用によって炉穴の不要となった焼土部分をかき出して土坑内へ廃棄したものではないかと考えられる。FP006 は、覆土を切り込んで浅い炉穴であった。FP043 は非常に規模が大きい炉穴になるが、火床と足場との間に大きな攪乱があるため、複数の炉穴が連なっていた可能性もある。

出土遺物は、各炉穴とも条痕文系土器が主体で出土していることから、当該時期の炉穴群と考えられる。条痕文期の中でも茅山下層式で占められている。沈線文系土器は大きめの破片が出土してはいるが、破片数としては少ない。沈線文系の範疇に入る繊維を含まない無文土器も目立っている。1 は鶺鴒ガ島台式の口縁部片である。口唇部外端に刻みを持ち、沈線区画文に竹管文状の刺突が施される。2・3 は刺突列を充填させた口縁部片で、茅山下層式に比定される。2 は FP038 焼土中からの出土である。4・5 は内外面ともに条痕文が施された土器で、5 の口縁部は、条痕文系土器には珍しい赤彩が施されている。6～9 は沈線文系の田戸下層式に比定され、いずれも炉穴の上層部からの出土である。6・7 は凹線文を密に横走させ、口唇部が角頭状になる。8 は同じ文様でも口唇部が先細りになっている。9 は尖底部付近の破片と考えられる。

(2) 第 2 炉穴群

第 2 炉穴群は、FP017～018・041 の 4 基が重複し、南北に長い形態と考えられるが、風倒木痕とも重なりって竪穴状に広がっている。全体の規模は長軸

5・66 m、短軸 4.37 m である。南北両側では縄文時代前期の陥穴 SK001・006 に切り込まれている。位置は調査区南東端の F9 グリッドの北東端から G9 グリッドにまたがった地点に立地している。遺構が広がることから、東側の一部を拡張している。

FP017・018 は、いずれも深い箱状の掘り込みで、火床を設ける際に壁奥側を鋭角に掘り込んでいる。FP018 は FP017 より深く掘り込まれていたが、足場が人為的に埋め戻され、FP017 とほぼ同じ高さに整地されていた。土層から新しい火床が設けられたものとみられ、FP017 と同時に使用していた可能性がある。FP019 は風倒木痕の影響により明瞭な掘り込みが確認できなかった。FP041 は FP017～019 より浅い炉穴で、火床の赤化部分はあまり硬化せず、底面下端は丸みを持ち、群内の他の炉穴とは構造に違いが認められた。

出土遺物は、条痕文系土器が最も多く出土していることから、当該時期の炉穴群と考えられる。しかし沈線文系土器の割合も高く、縄文時代前・中期の土器も認められる。特に前期の遺物が目立ち、陥穴と重複していることが関係するためであろう。1 は細隆線での区画文内に細沈線を充填させた鶺鴒ガ島台式で、段部上面の文様帯である。条痕文系土器は胴部破片が多く、この 1 点のみ図示した。2 は田戸下層式の口縁部で、口唇部を角頭状に面取りし、凹線文を横走させる。3 の口縁部は地文にまばらな捺糸文が施文され、半載竹管で文様を描出している。4 にも捺糸文が施される。

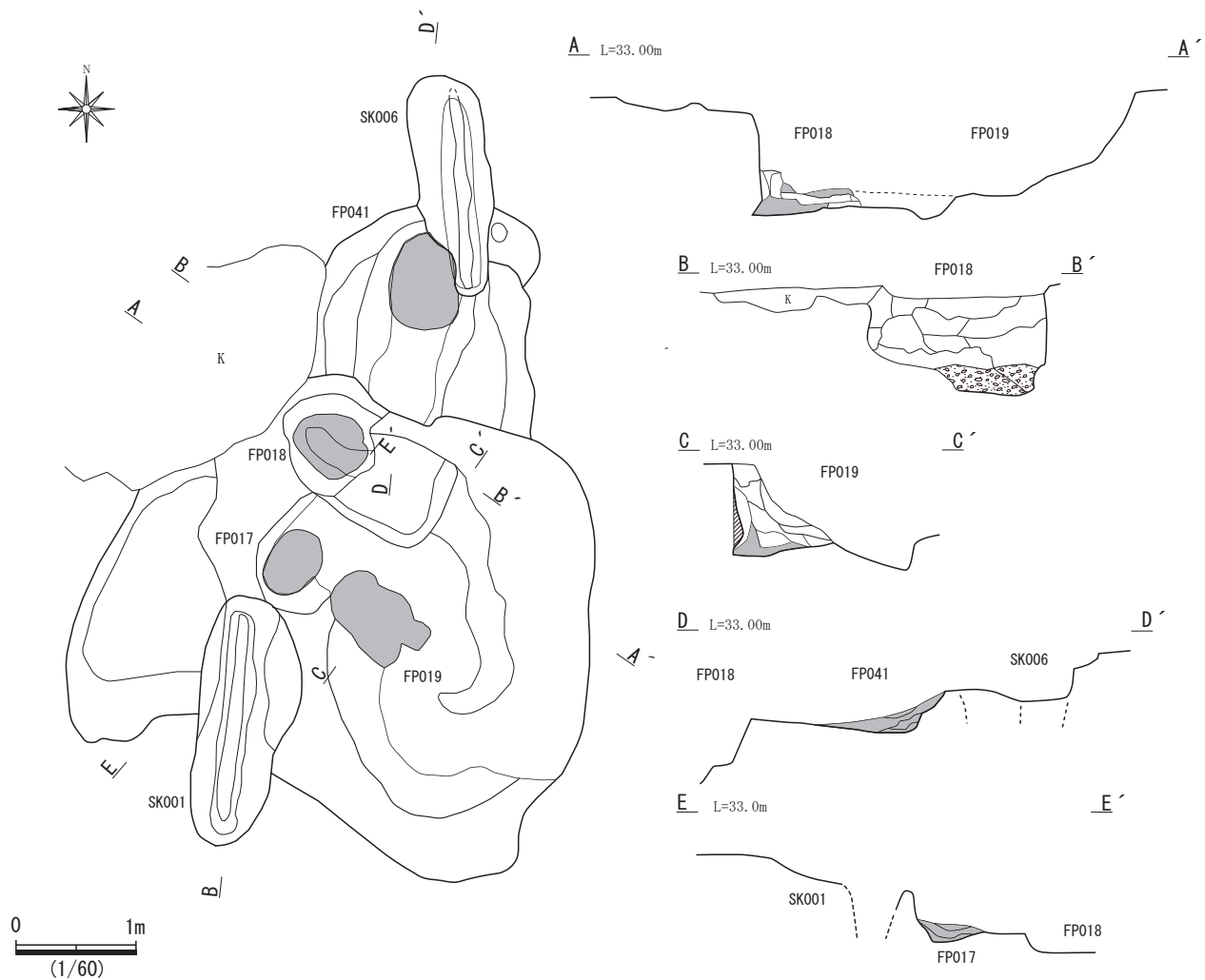
3・4は縄文時代前期後半の浮島Ⅰ式に比定される。
5は断面蒲鉾状の隆帯両脇に爪形文を施し、縄文時代
中期阿玉台Ⅲ式と考えられる。

(3) 第3炉穴群

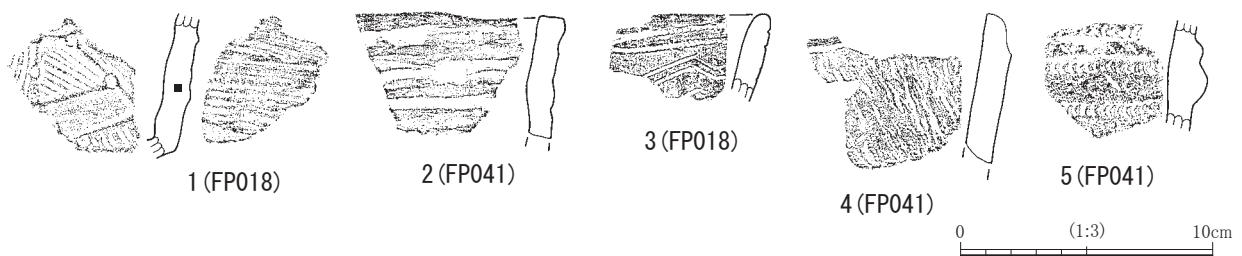
第3炉穴群は、FP020～033の14基が重複したもので、北東から南西に広がっている。全体の規模は、長軸6.62m、幅5.93mである。南西側でSK005に接しているが、関連性はうすいものと考えられる。位置は調査区南側のF8グリッド内やや西寄りに立地する。炉穴群は竪穴状に広がった状態で確認され、各炉穴が

壁面に向かって掘り込まれている。群の中では南側に火床を持つFP022が最も深く、焼土も厚く堆積していた。このFP022の足場側に楕円形を基調としたFP026～029・032・033が北東から西側にかけて扇状に掘り込まれている。その他の炉穴はFP022を囲むように確認されている。

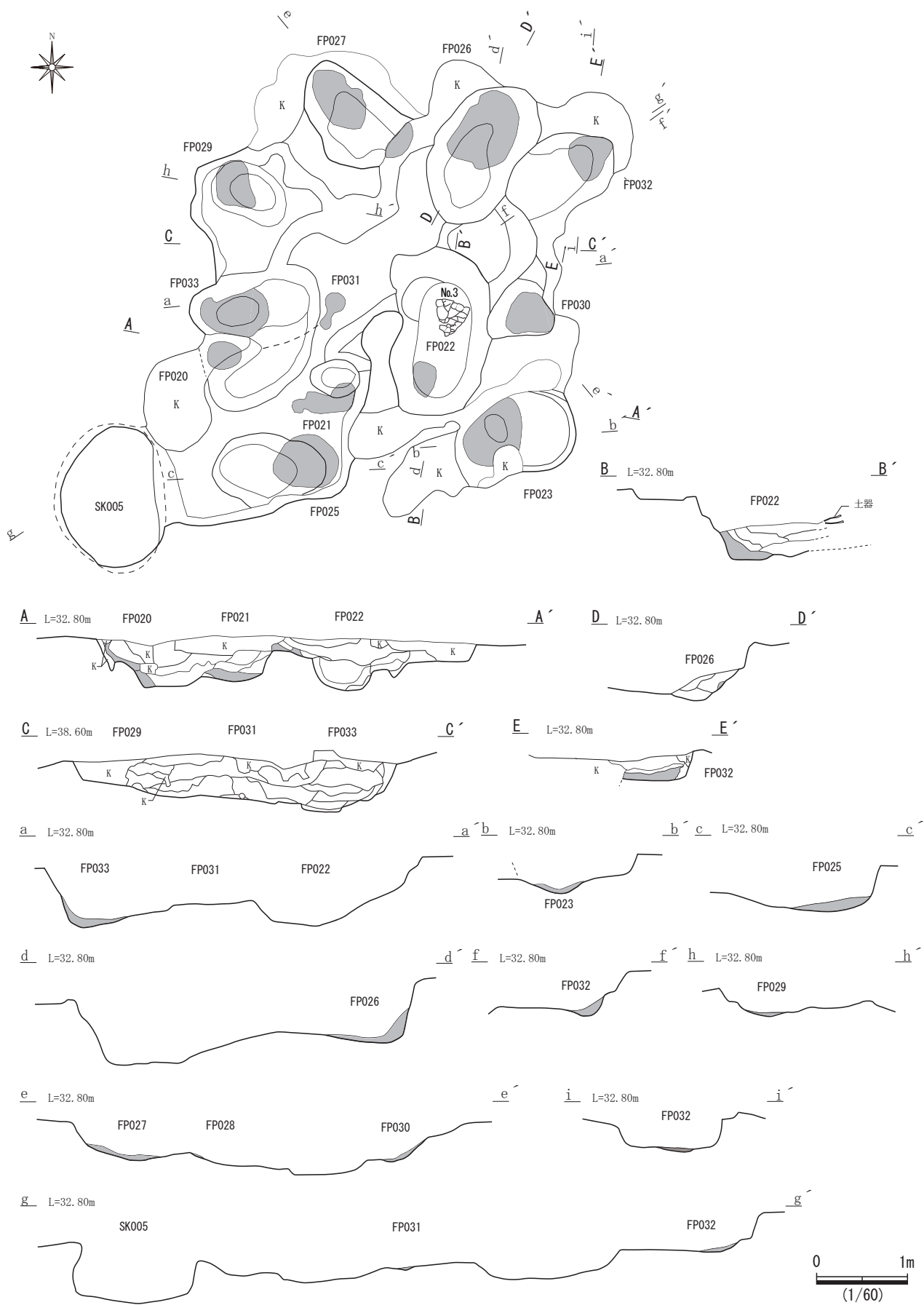
出土遺物は、条痕文系土器が主体で出土しており、当該時期の炉穴群と考えられる。また、量的には少ないながらも、撚糸文系土器や沈線文系土器の出土も認められた。



第12図 第2炉穴群実測図



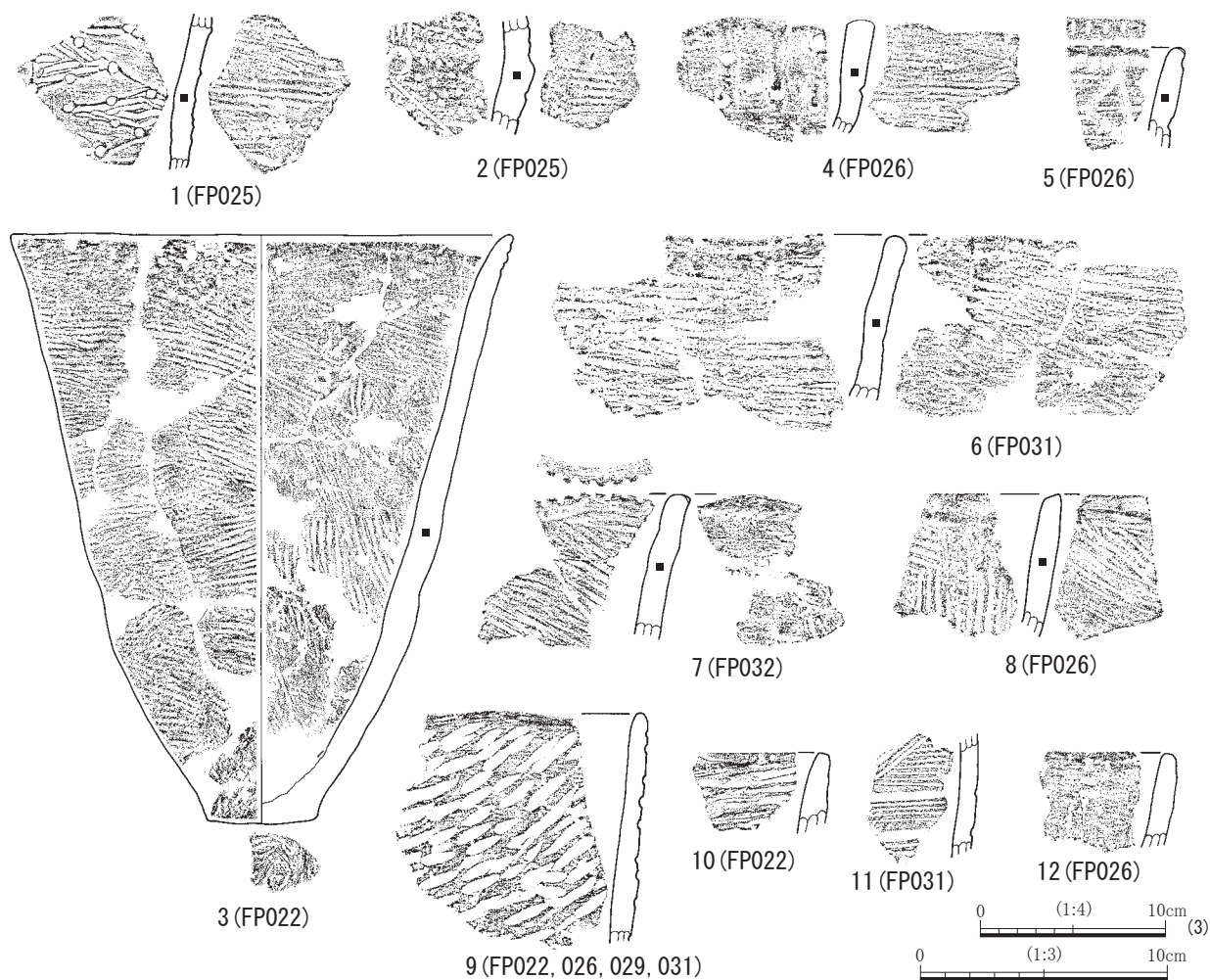
第13図 第2炉穴群出土遺物



第 14 图 第 3 炉穴群实测图

1は細隆線文区画内に細沈線が充填され、2は沈線文区画内に刺突文が充填されている。鶺鴒ガ島台式であるが、2は茅山下層式まで下るかもしれない。3はFP022の足場側、底面から35cm上に投棄されていたもので、全体に条痕文が施された深鉢である。口縁部直下に刺突文が部分的に充填されているみで非常に脆く、茅山下層式でも新しい時期のものとみられる。4の口縁部でも刺突がまばらに施されたものである。5～8も茅山下層式に比定される口縁部である。5の口縁部は口唇部に刻みを持ち、幾何状に押引文が施され

ている。7は口唇部の外端に刻みを持ち、8は口唇部が内削ぎ状である。4～7も茅山下層式に比定される。9～12は沈線文系の土器である。9は短い沈線を全体に充填させたもので、図示したのは口縁部の一部であるが、同個体の破片がFP022・026・029・031の上層面から出土している。10・11は太めの沈線と細めの沈線を融合させたものである。12は無文の口縁部で外面に削り調整が認められる。いずれも田戸下層式の範疇に収まるものと考えられる。



第15図 第3炉穴群出土遺物

(4) 第4炉穴群

第4炉穴群は、FP044～064の21基が重複したもので、東西に広がって確認されている。全体の規模は、長軸8.43m、短軸は最も広い場所になる東側で5.16m、西側で2.81mとなる。位置はF8グリッド内のやや北寄りに立地する。

この炉穴群の中には、規模が大きい深い炉穴と、規模がやや小さくなる炉穴に分けられる。前者の炉穴に

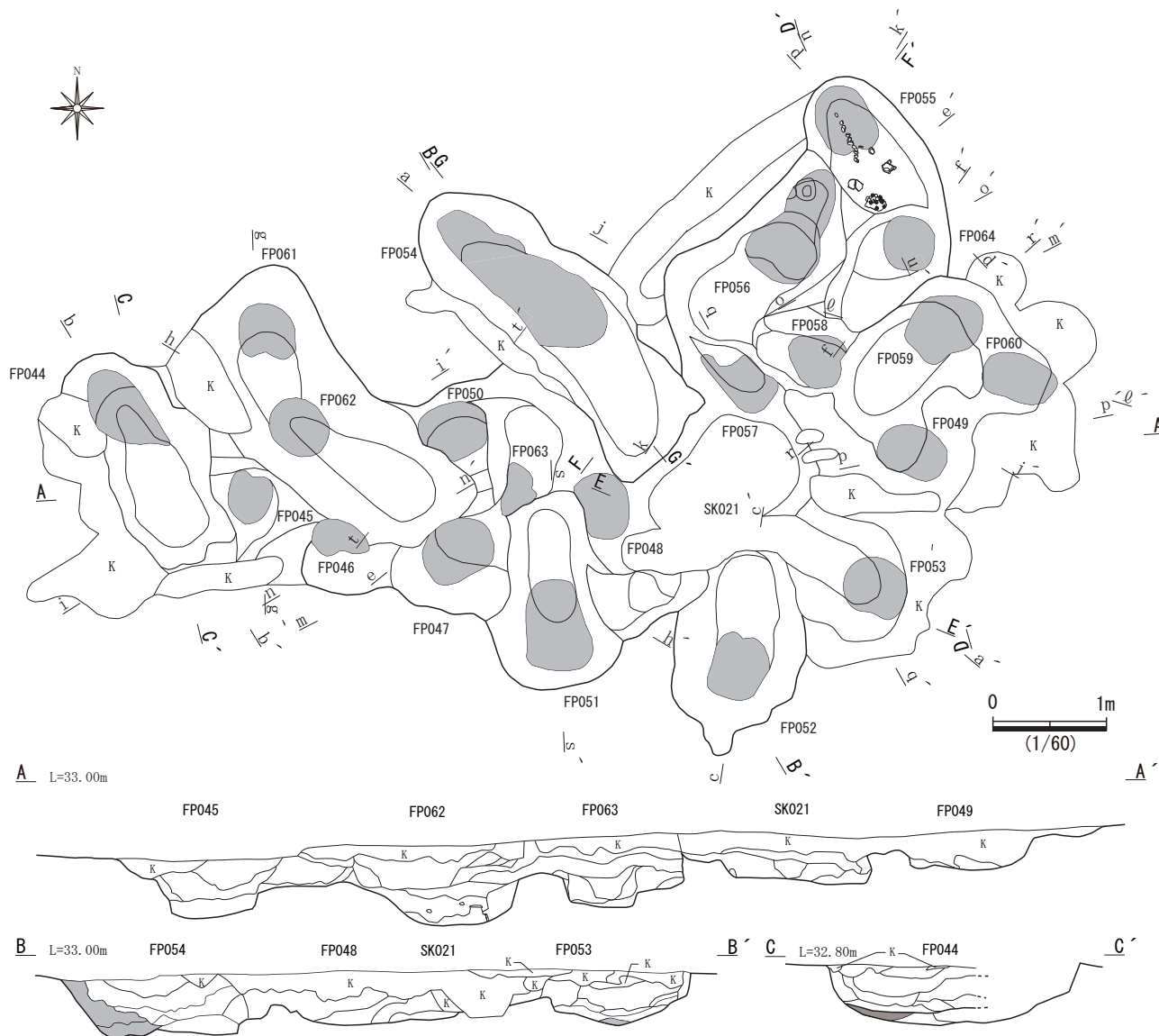
はFP051・059・062が相当し、炉穴の下層部にはロームブロックを多量に含んだ層が堆積していた。いずれの炉穴も足場はやや急なスロープ状になっており、周囲には複数の炉穴が取り巻く形で確認されている。後者には、FP044・052・053・055・056などが相当する。それぞれが外側へ向かって掘り込まれ、足場はいずれも平坦である。FP054では火床の赤化範囲が広いと、造り替えが行われた可能性がある。FP056でも火床の

広がりとともに段差がり、やはり造り替えた可能性がある。FP055では、足場側底面より17cm上で貝塊が確認された。大きさは35×30cm程度の円形状の塊で、下層部にはあまり焼土ブロックが含まれていなかった。

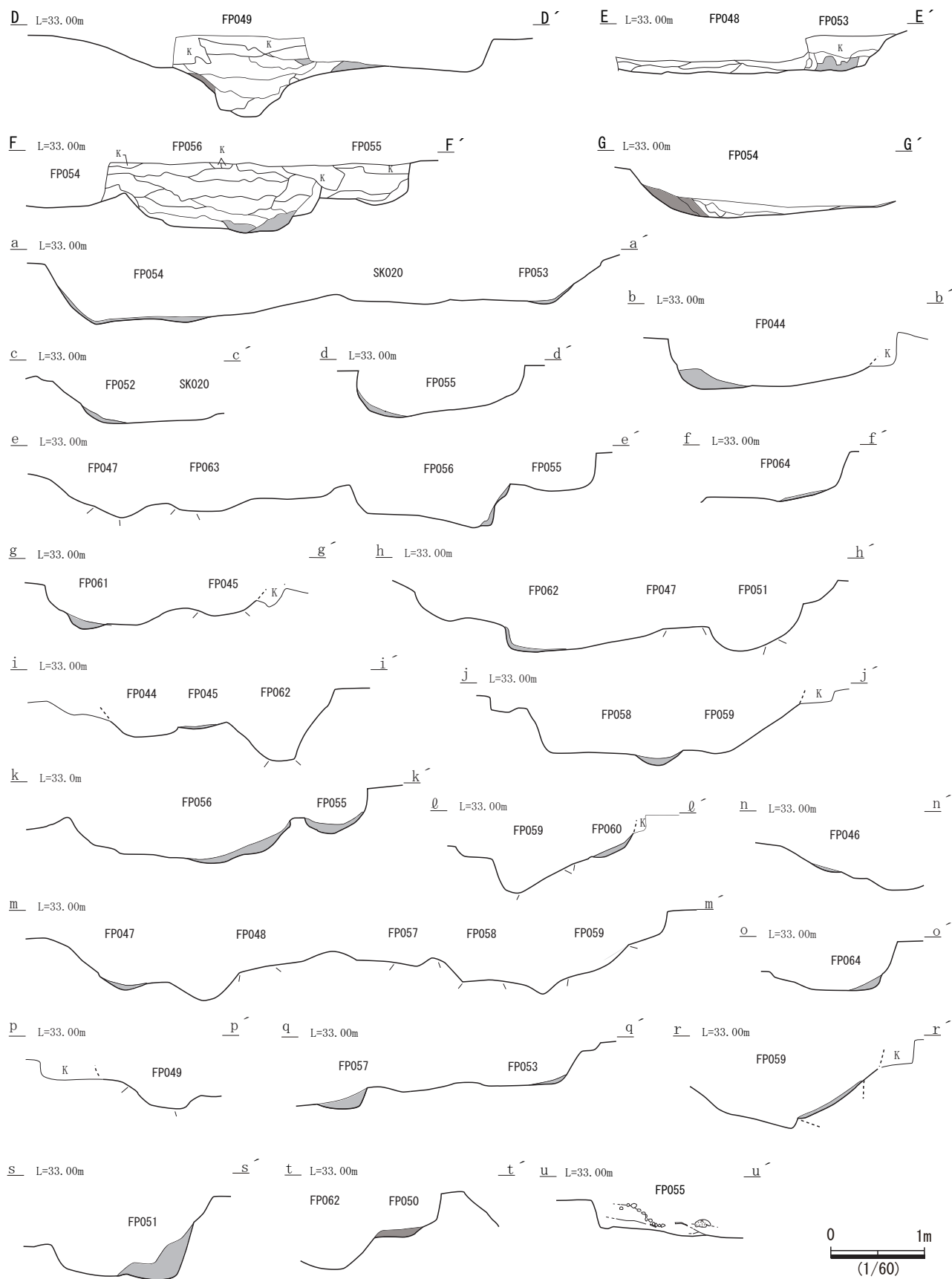
出土遺物は、条痕文系土器が主体で出土、当該時期の炉穴群と考えられるが、量的には少ないながらも、捺糸文系土器や沈線文系土器の出土も認められる。条痕文系土器では、鵜ガ島台式とわかる文様帯の破片が比較的多く出土しており、鵜ガ島台式から茅山下層式期にわたる炉穴群と考えられる。

1～4は幾何状の細隆線または沈線によって区画されたもので、区画文上に竹管文の捺押文が施されている。1・2は区画内に刺突文を充填するが、3・4は

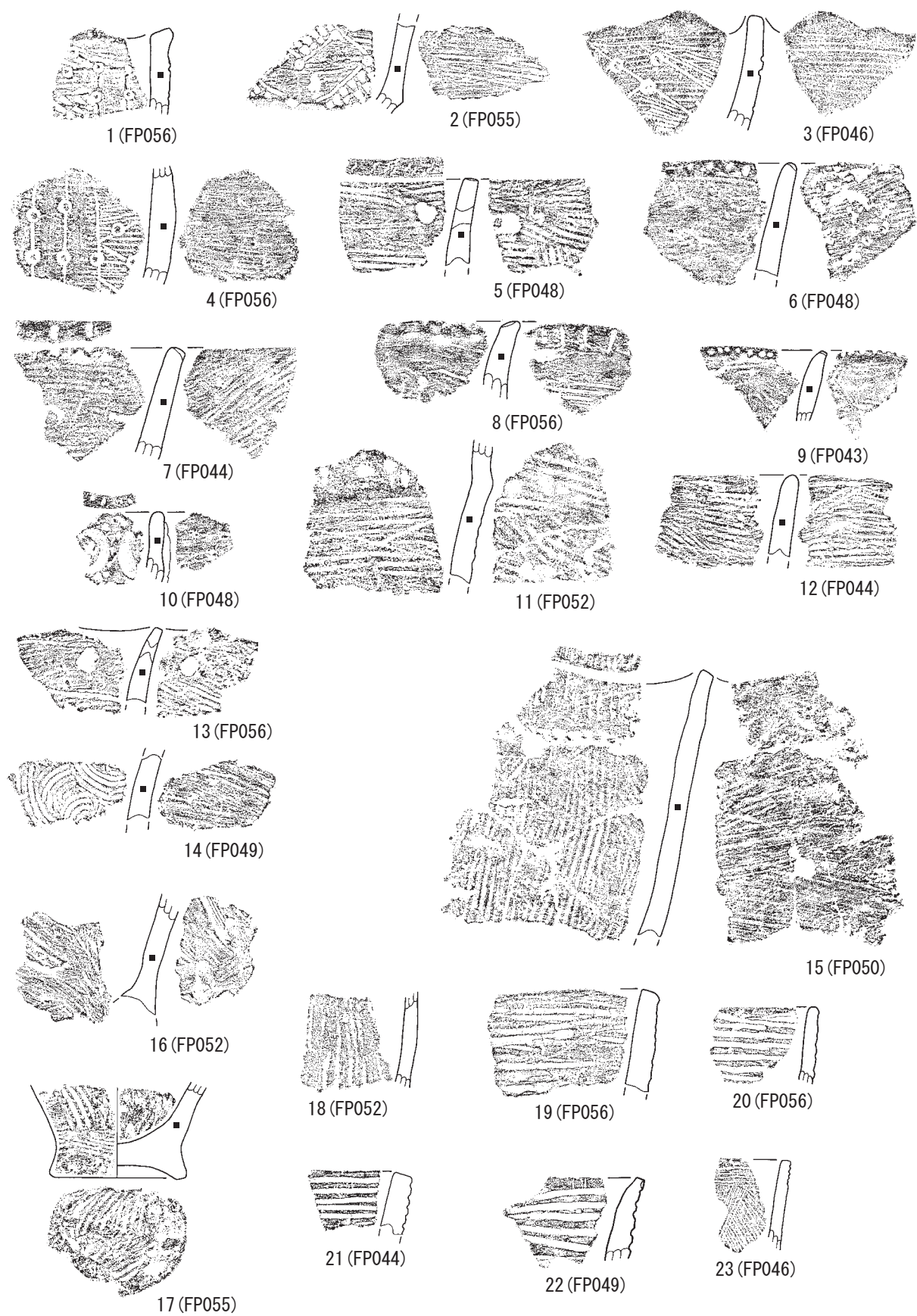
区画文のみである。3は緩い波状で4の破片とは出土地点が違うが、類似した文様構成のため同一個体の可能性もある。5～10はいずれも口唇部に刻みを持つ口縁部で、5は貝殻復縁、6・7は棒状工具が用いられている。8は内削ぎ状になる。10は口縁部直下から刺突文が垂下し、両脇に曲線的な凹線文が施されている。11～16ではそれぞれ変化に富む条痕文が施されている。14は同心円状、15は縦方向の条痕文が特徴的である。17は底部面まで条痕文が施された上げ底状の底部である。18は捺糸文系の胴部片で、縦位の捺糸文Rが施文されている。19以降は沈線文系の土器で横位の沈線文が施されたものが主に認められる。23は細沈線によって文様が構成された薄手の土器で田戸下層式と考えられる。



第16図 第4炉穴群実測図(1)



第 17 图 第 4 炉穴群实测图 (2)



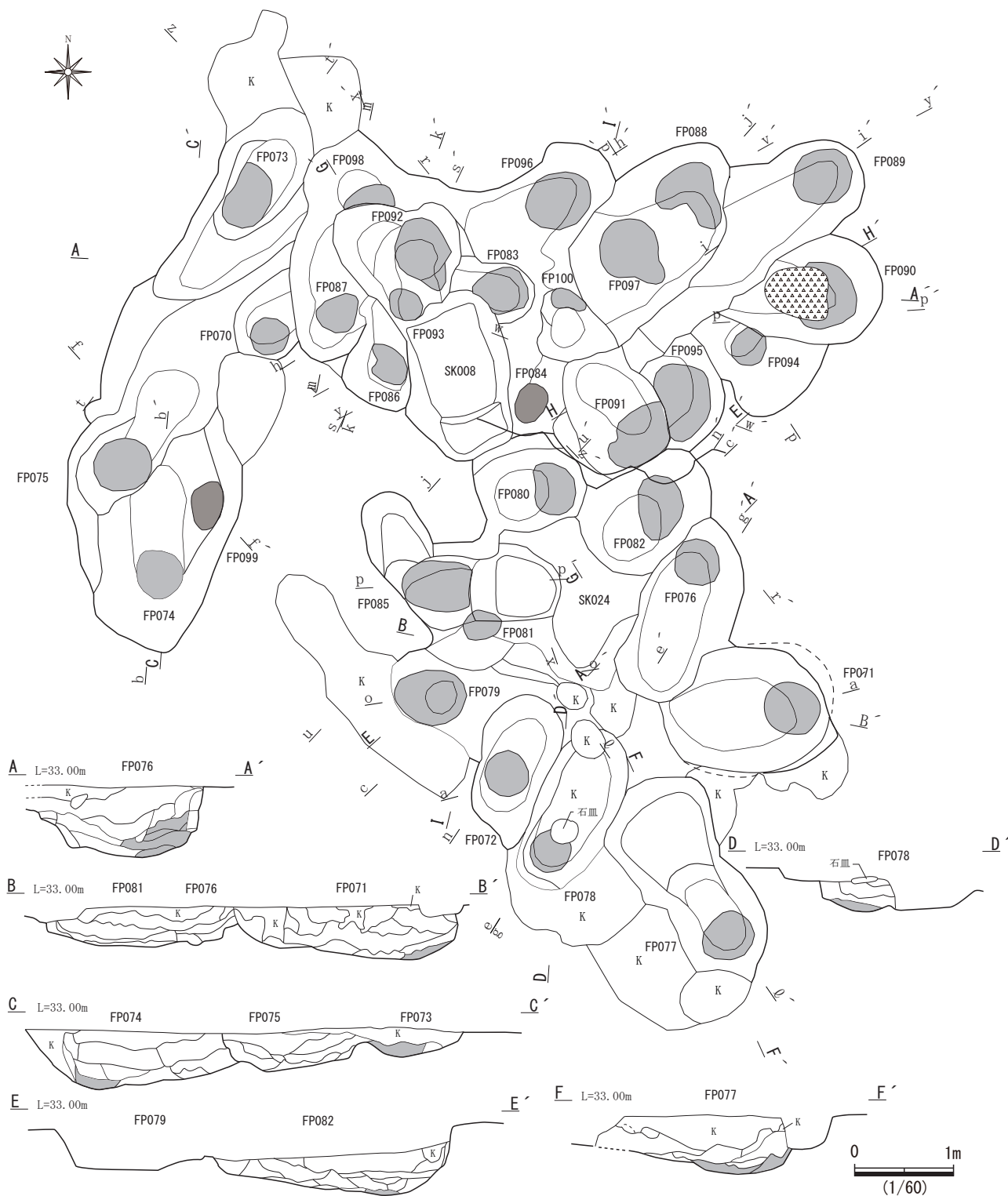
第18図 第4炉穴群出土遺物

(5) 第5炉穴群

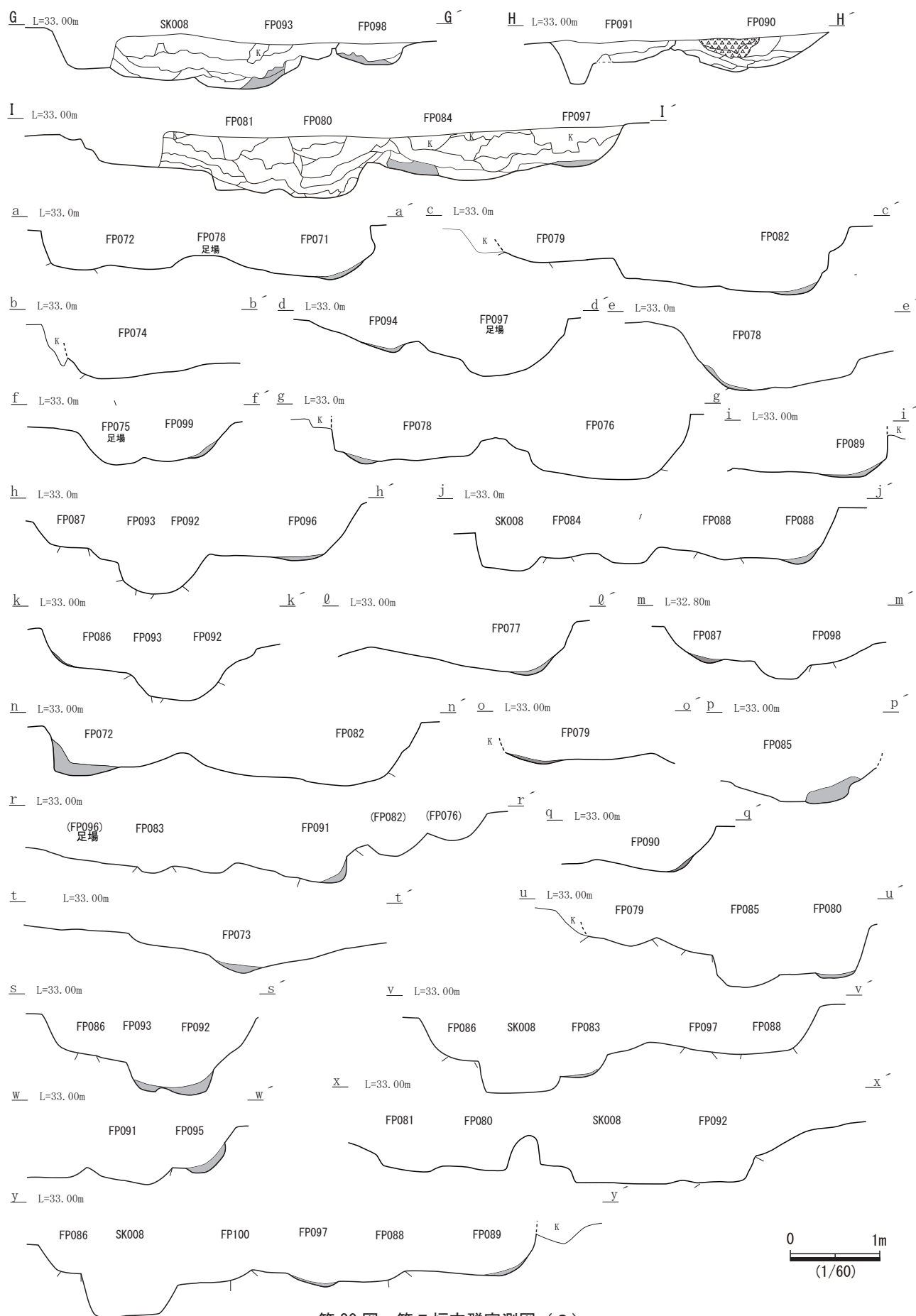
第5炉穴群は、FP070～100の31基が重複し、北西から南東に延びる部分と北から南に延びる部分に分かれる。全体の規模は、前者の長軸が9.51m、短軸は最も広い部分が5.32m、後者の長軸は5.63m、短軸が1.88mである。位置は調査区中央部のF6・F7グリッドにまたがる地点にあたる。

リッドにまたがる地点にあたる。

北西から南東側に延びる部分では、いくつかのまとまりに細分化が可能である。各炉穴をみるとFP071・072・076～078は、同規模で類似した楕円形となり、規則的な配置を見せている。FP079～082・085は、SK024平坦面を扇状に囲んでいる。FP083・084・



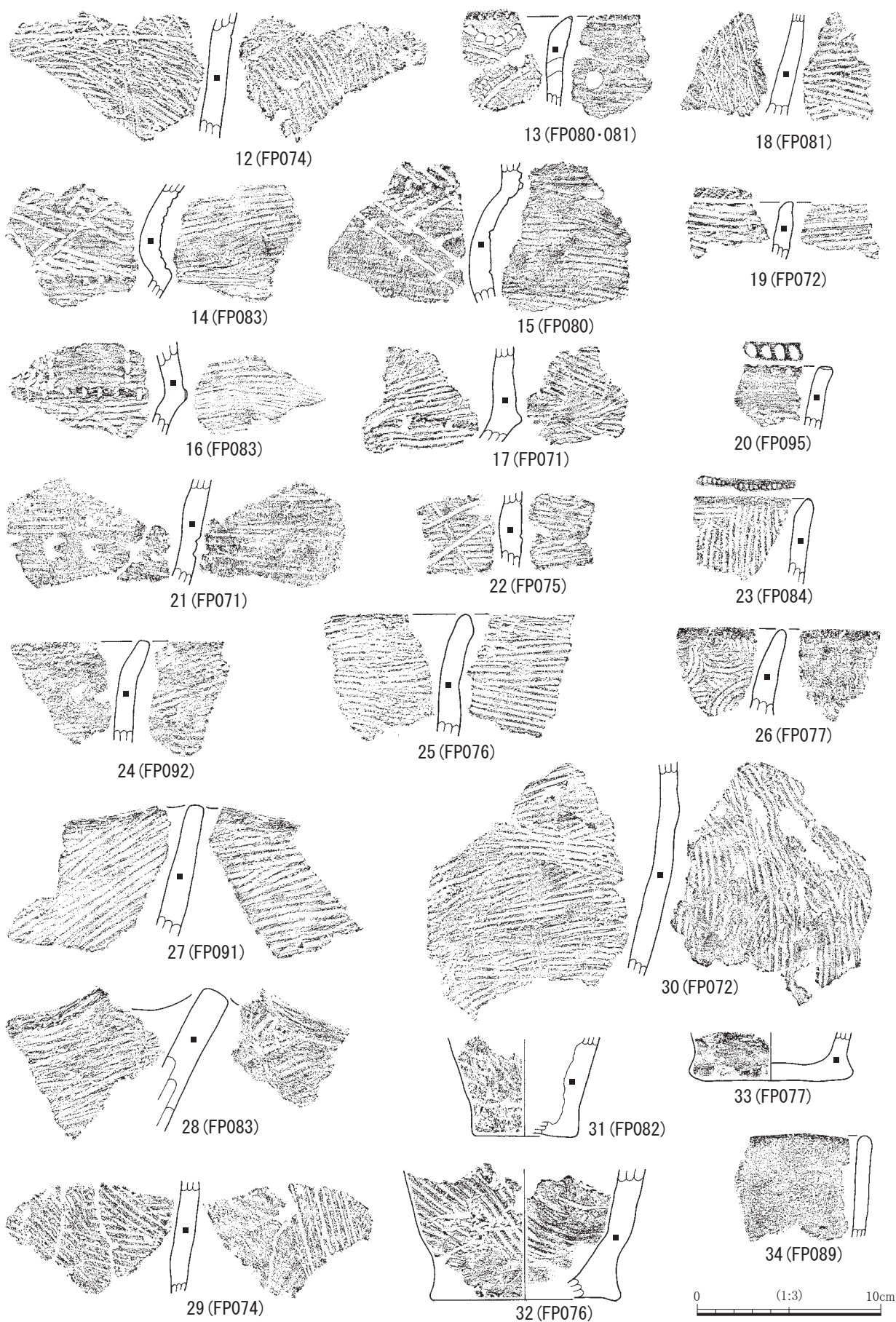
第19図 第5炉穴群実測図(1)



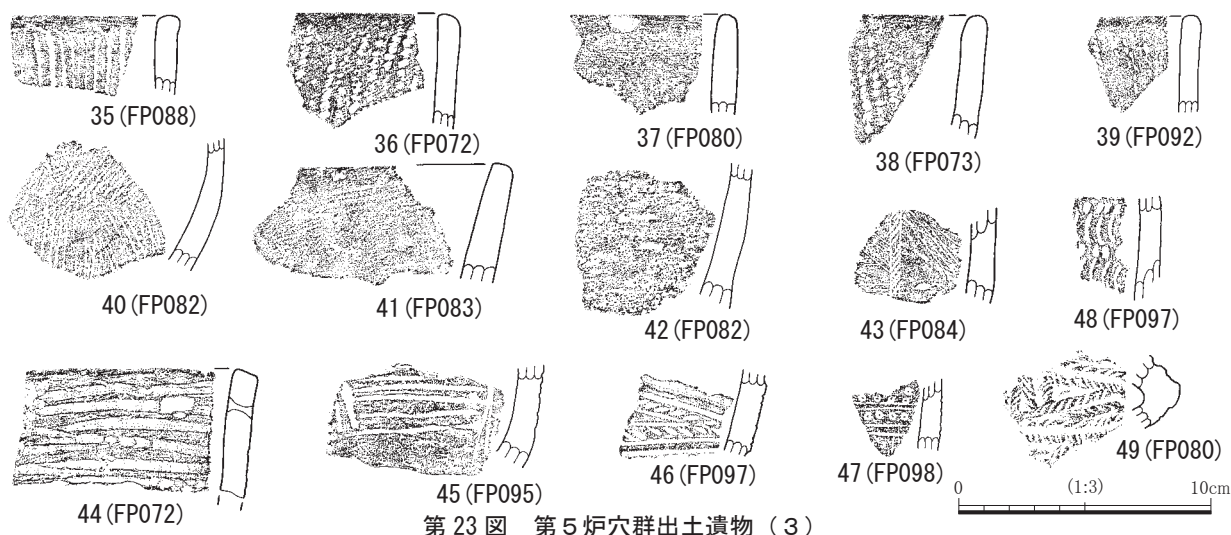
第 20 图 第 5 炉穴群实测图 (2)



第 21 図 第 5 炉穴群出土遺物 (1)



第 22 図 第 5 炉穴群出土遺物 (2)



第 23 図 第 5 炉穴群出土遺物 (3)

086・087・092・093・098 は、深い掘り込みを伴う SK008 を基点に北西方向に向かって密集する。FP088 ～ 091・095 ～ 097・100 が、北東方向へ折り重なるように複雑な広がりを見せている。一方、北東から南西方向に延びる部分の FP070・073 ～ 075・099 はいずれも火床を南側に向けて連なっていた。FP090 の覆土中では貝層が堆積していた。

出土遺物は、条痕文系土器が主体になって出土しており、本炉穴群は当該時期ものと考えられる。条痕文土器は鵜ガ島台式～茅山下層式の範疇に収まるものである。撚糸文系土器、沈線文系土器は、各炉穴から出土する条痕文系土器に混じっており、特に上層部から出土した中に多く認められる。

1 ～ 4 は鵜ガ島台式に比定される。1 は口縁部で、区画内の整然とした沈線文が施されている。2 ～ 4 は区画内が刺突文で充填されている。3・4 は同一個体とみられる。文様帯の一部に貝殻背圧痕文が認められる。5 ～ 9・11 ～ 19・21 ～ 34 は内外面に条痕文を施す土器群である。条痕文のみが施された中には、9・13・23 など口唇部に刻みを持つものがある。7 は口唇部に沿って刺突文を施している。条痕文を地文として装飾が施された土器も見受けられ、6 は波状を呈した口縁部で、口縁部直下が突出する変形した器形になり、突出部に沿って押引文が施されている。12・18・19・22 は沈線による格子目文が施されており、19 の口縁部は口唇部へ施文されている。13 ～ 15 は刺突文を充填あるいは列化させて X 字状の文様を表現している。7・21 の刺突文は間隔を空けて横走させている。16 は屈曲部に刻みを加えている。10・20 は無文であ

るが、20 は条痕文施文後にナデ消しの調整が行われている。28 の口縁部は、波状になった口唇部が角頭状で直線的にたち上がる特異な器形をしている。片口状口縁部の破片であろうか。5 ～ 33 はいずれも茅山下層式のものと考えられる。

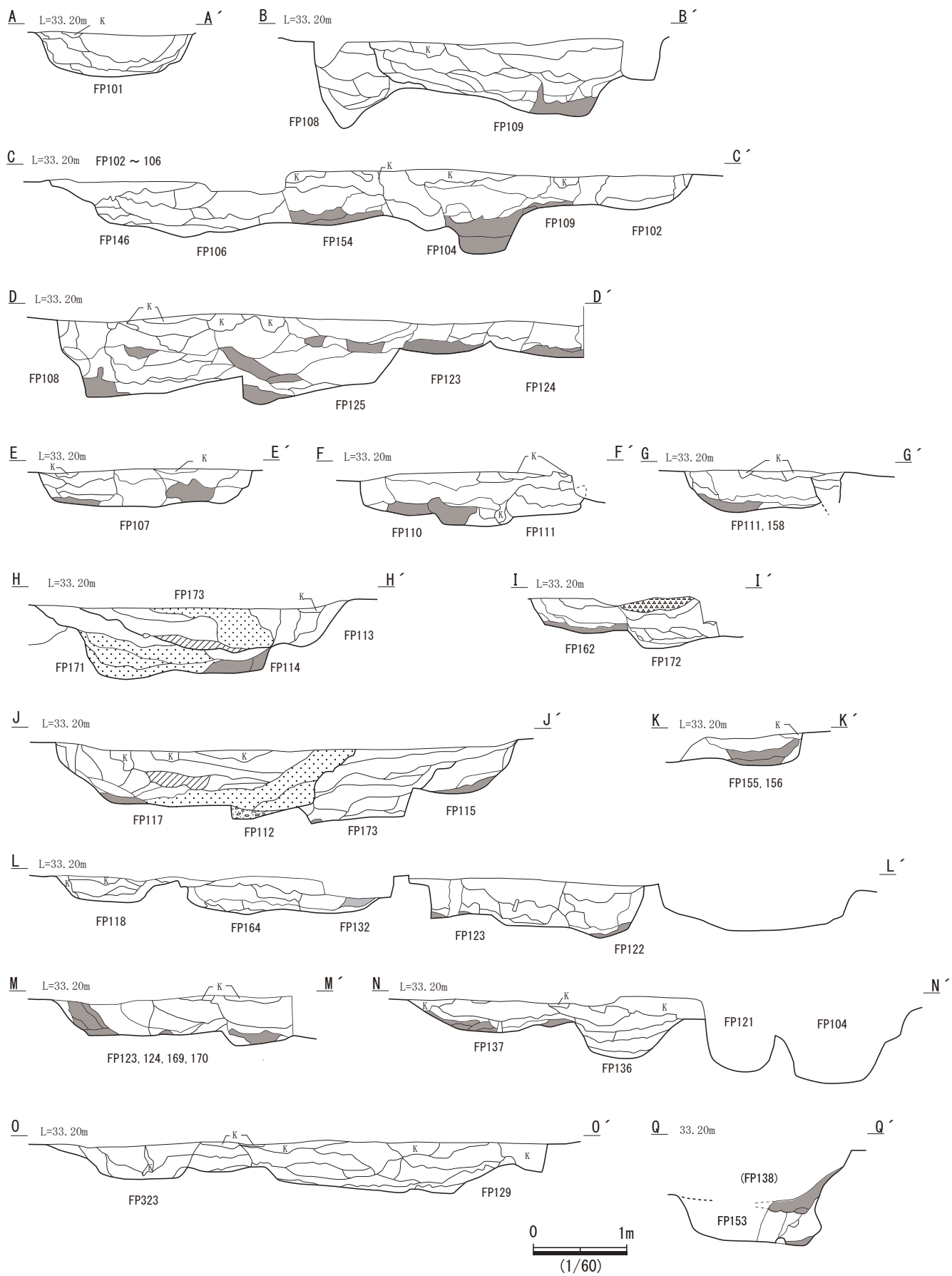
34 ～ 39 は撚糸文系の口縁部である。36 は無節 L 縄文、38 は単節 RL 縄文が施文される。40 は細い撚糸文が施された丸底の尖底部である。41・42 は無文であるが、外面は横位の擦痕文が目立つ土器で、42 は胎土に石英粒を多量に含んでいる。ともに撚糸文系土器の終末期に位置づけられた平坂式と考えられる。

43 ～ 47 は沈線文系の土器群である。43 は帯状の併行沈線間に斜状の文様を描いたもので、三戸式に比定されるであろう。44 は凹線文を密に横走させ、45 は横沈線に縦沈線を加えている。46 は沈線間に短沈線を施し、47 は細い沈線間に竹管文を刺突しているなど、田戸下層式の沈線文による多様な文様で表現されている。

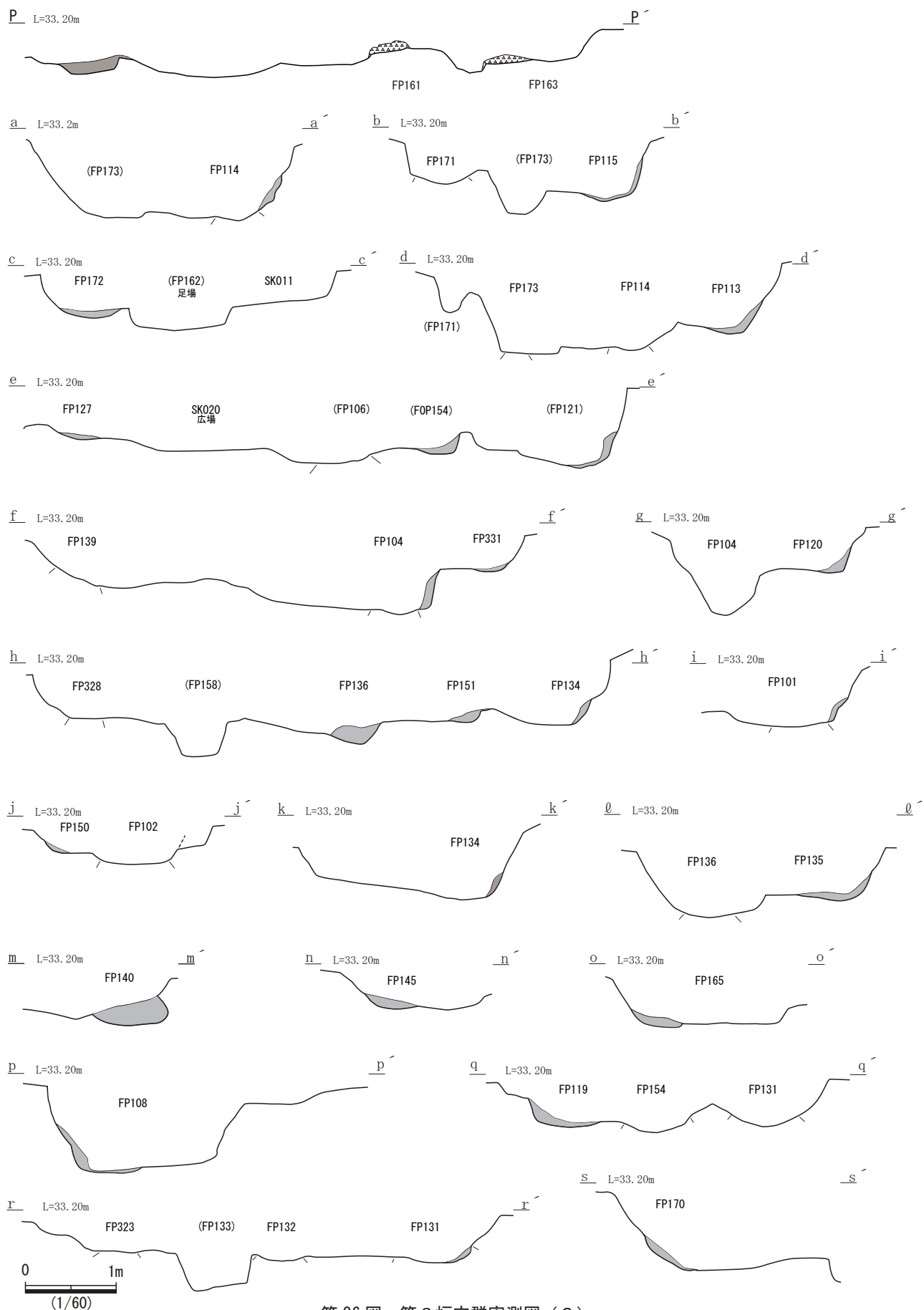
49 は細かい刻み目を入れた浮線文を密に施した縄文時代前期・諸磯 b 式の屈曲部と考えられる。

(6) 第 6 炉穴群

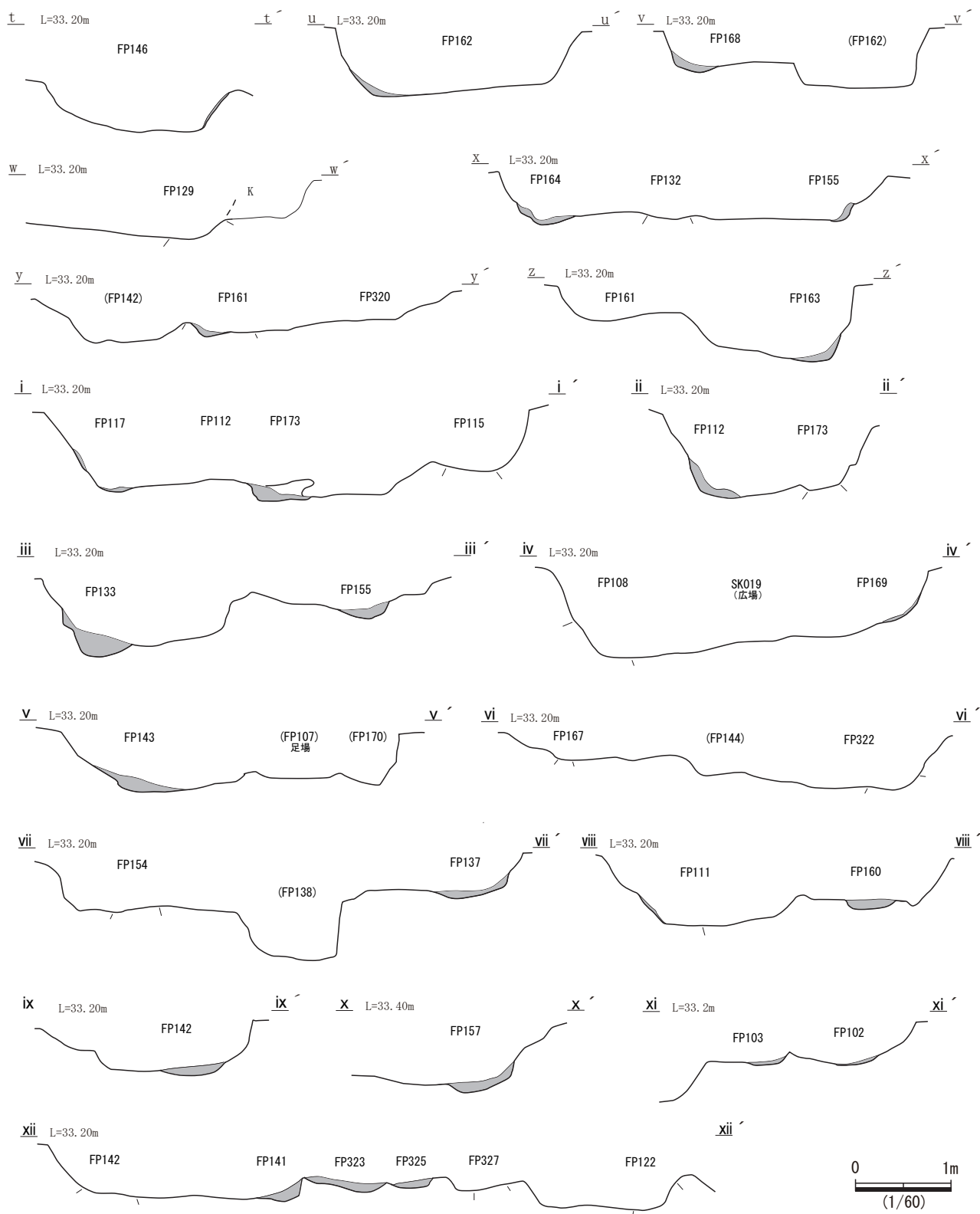
第 6 炉穴群は、FP101 ～ 174・319 ～ 331 の 87 基が重複したもので、南北に広がっている。全体の規模は、長軸 16.4 m、短軸は最も広い場所で 9.52 m となり、本調査区の中で重複基数、規模ともに最大である。位置は G7・G8 グリッドにまたがって立地している。調査区東側の張り出した部分の北西側全体に広がり、G7 グリッド側と G8 グリッド南側を拡張し、炉穴群全体の範囲を確認した。



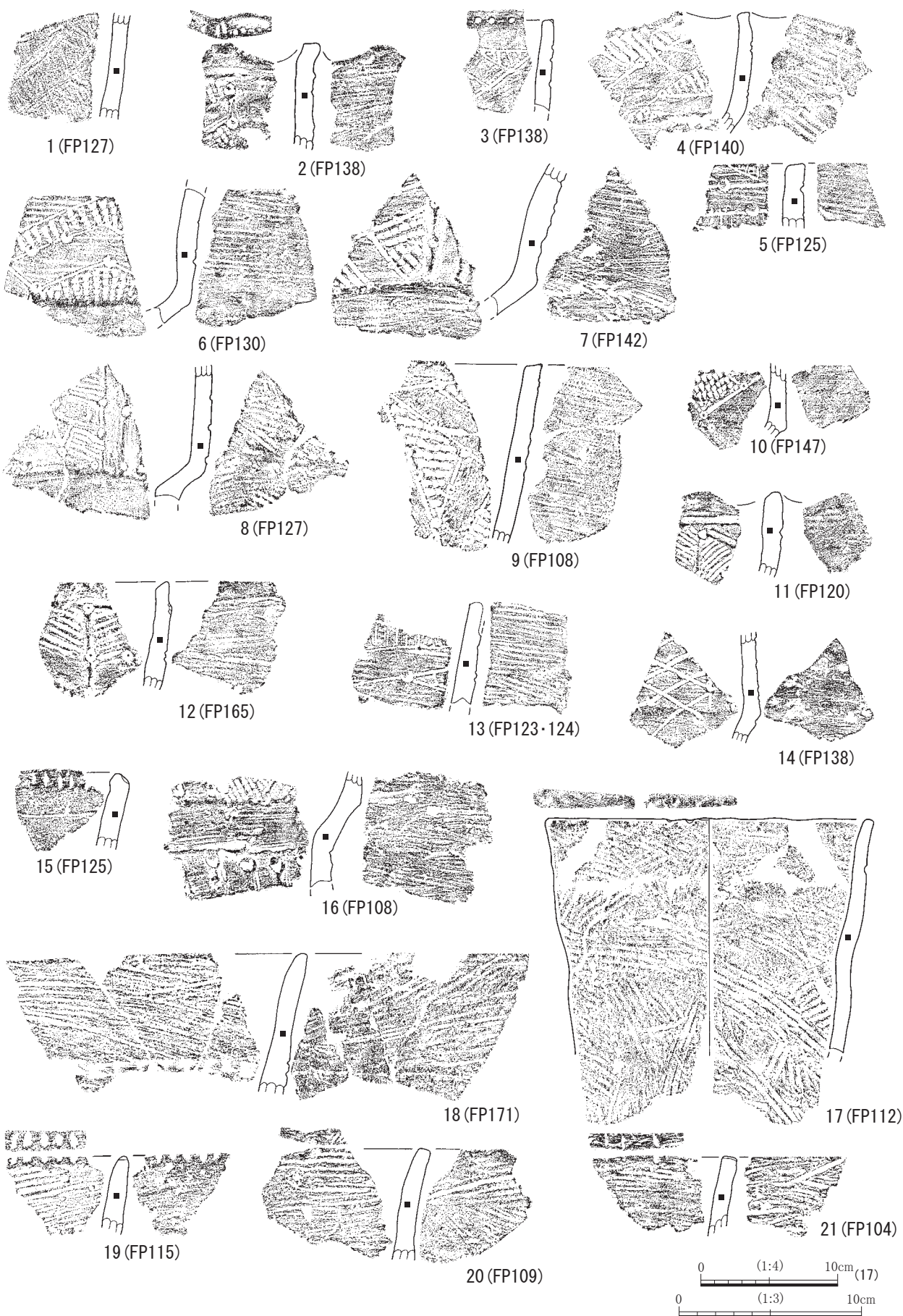
第 25 图 第 6 炉穴群实测图 (2)



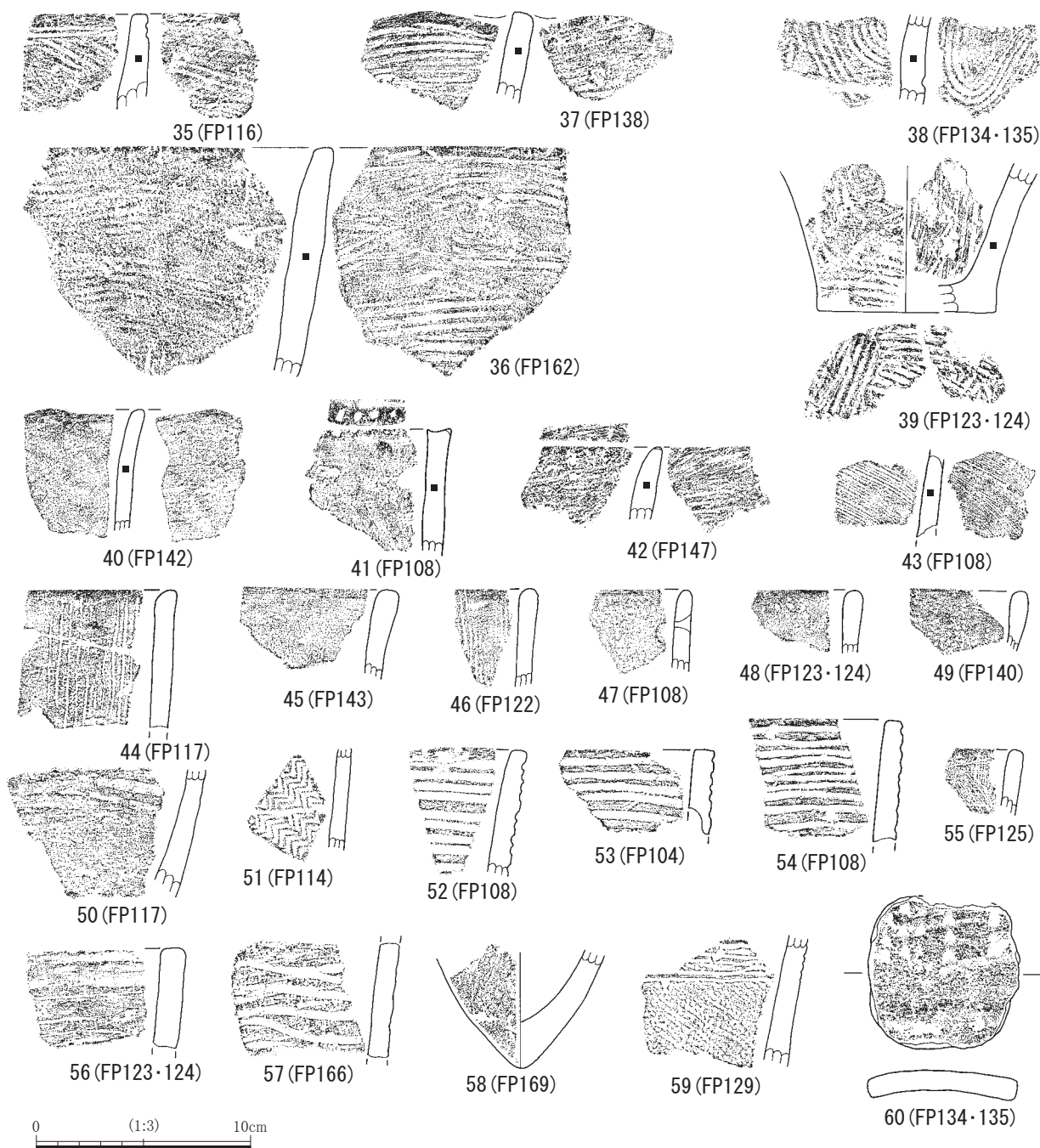
第 26 図 第 6 炉穴群実測図 (3)



第 27 図 第 6 炉穴群実測図 (4)



第 28 図 第 6 炉穴群出土遺物 (1)



第30図 第6炉穴群出土遺物（3）

炉穴群の北側と南側では、構築状況に違いが認められる。北側ではやや大きめの楕円形状の炉穴が、外側に向かって掘り込まれている。東寄りでは多数の炉穴が本来の形状も把握できないほどに密集し、西寄りで確認されているFP126～128は、SK020と連結している。一方南側では、東側に延びるFP101・134～137・151・152、南東側へ延びるFP102～104・120・121・150・331、南側へ延びるFP112～117・173などに分かれ、それぞれが核となる炉穴から放射状に広がっている。また、大型でかなりの規模・深さを有した炉穴

も郡中に点在する。炉穴群の西側では、FP125・108・109の順で連結している。FP153も極端に深い炉穴で、廃棄後にFP138を再度構築していた。FP108・125上面でもD～D'の土層からは、火床が埋没後に新たな炉穴を構築した状況が捉えられる。FP104も深さを有した炉穴であるが、本炉穴群中で最も焼土が厚く堆積していた。群中からは貝層・貝塊がFP117・161～163の4箇所確認されている。

遺物は、条痕文系土器を主体としている。条痕の施文は変化に富んでおり、鶺鴒ガ島台式の古相段階から茅

山下層式の新相段階まで認められ、炉穴群はかなりの長い時間幅を持って使用されたことがうかがえる。撚糸文系土器は少ないながらも炉穴群のほぼ全域にわたって認められる。沈線文系土器は撚糸文系土器に比べて出土量が少ない。

1はかなり磨耗しているが、細隆起線文で区画文が施され、野島式に比定できる。2～16は鵜ガ島台式の文様帯を持った破片である。2・7・8・11・12・16は細隆起線による区画文、3～6・9・10・13・14は沈線による区画文で文様が描かれる。細隆起線文を用いた区画内には主に沈線を充填し、沈線が用いられた区画内には刺突文を充填する傾向がうかがわれるが、2・7は細隆起線区画文に対し刺突文、5・13は沈線区画文に対し浅い縦位の沈線が施されるなど例外も認められる。この中で、6は含まれる繊維の量が少なく、胎土に石英・白色粒などが含まれ、他の鵜ガ島台式と比べて異質である。14は格子目状の沈線上に竹管文がまばらに押捺されている。15は外端に刻みが加えられたもので、鵜ガ島台式の範疇と考えられる。17～39は内外面ともに条痕文が施された茅山下層式に比定される土器群である。口縁部は口唇部に縦位の細かい刻みを施すものが主であるが、22・23は指頭による押圧が加えられている。装飾を伴っているものはさほど多くはない。18は押引文を横走させて、31の波状口縁は、波頂部から押引文を垂下させ、さらに横方向へ区画を施したもので、区画内には貝殻腹縁文が充填されている。33は刺突文のみを用いてX字状の文様を描いている。25は波頂部から隆帯が垂下した波状口縁であるが、刺突文など装飾を伴わず、段部も形骸化したような新しい様相がうかがえる。その意味では17なども段を持っていないことから、17・25ともに茅山上層式としてよいのかもしれない。その他、32には赤彩が施されていた。27は外反して立ち上がる器形で、繊維が非常に多く、内面はほとんどが剥離してしまっている。40～43は無文で擦痕文が認められる。42は内面に条痕文が施されていた。

44～49は撚糸文系土器の稻荷台式土器である。50は無文で横位の擦痕文が認められ、胎土に石英粒が多量に含まれていることから、撚糸文系土器最終末の平坂式であろうか。

51～58は沈線文系の土器群である。51は山形文を

縦位に施したと考えられる押型文土器である。本調査区で出土した押型文土器はこの1点のみである。52～54は凹線文を密に施し、55は細い沈線で文様を描いている。56は凹線文と細い沈線を融合させ、57は曲線的な凹線文を施しているなど、様々な手法を用いたものが見受けられる。58は尖底部で削り調整が認められる。52～58は田戸下層式の範疇に収まるものと考えられるが、57は粒が大きい白色粒を多量に含む胎土で、当該時期の土器とは異質な感じを受ける。

59は地文単節RL縄文に細い平行沈線を横走させており、縄文時代前期・諸磯b式に比定される。60は茅山下層式とみられる土器片を加工したやや大きめの土製円盤である。

(7) 第7炉穴群

第7炉穴群は、FP176～199の24基が重複し、北東から南西側にかけて広がる。規模は、長軸は9.46m、短軸は最も広い場所で7.19mである。位置はE7グリッド内南東隅にあり、一部E8・F7グリッドにかかった地点にあたる。この地点は谷側に向かって傾斜した地形になっていたが、攪乱の部分が多かった。

炉穴の分布状況は、北東側では直線状に連なる状態で掘り込みも浅い。谷側に近い南西側では、24基中20基がこの部分に集中し、深い掘り込みのものが多い。

遺物は、条痕文系土器が主体になって出土しており、当該時期の炉穴群と考えられる。条痕文土器の中には、沈線文系土器が比較的多く混入している。

1は細隆起線文で幾何状に文様が描かれた器壁の非常に薄い土器で、野島式に比定される。胎土に長石や微小礫が多めに含まれている。2・3は沈線区画内に沈線文を充填させた鵜ガ島台式である。4は内外面に擦痕文がほどこされている。5・6は刻みを持った口縁部で、5では刻みが深く施されている。7は全面に条痕文が施された平底の底部で、繊維を非常に多く含み、底面もやや歪んでいる。5～7は茅山下層式の範疇に収まるであろう。

8・9は撚糸文系土器の口縁部と考えられる。8は斜状に撚糸文が施文された稻荷台式、9は無文で口唇部が平坦に調整されていることから、撚糸文系終末期のものであろうか。

10～17は沈線文系の土器群である。凹線文を横走



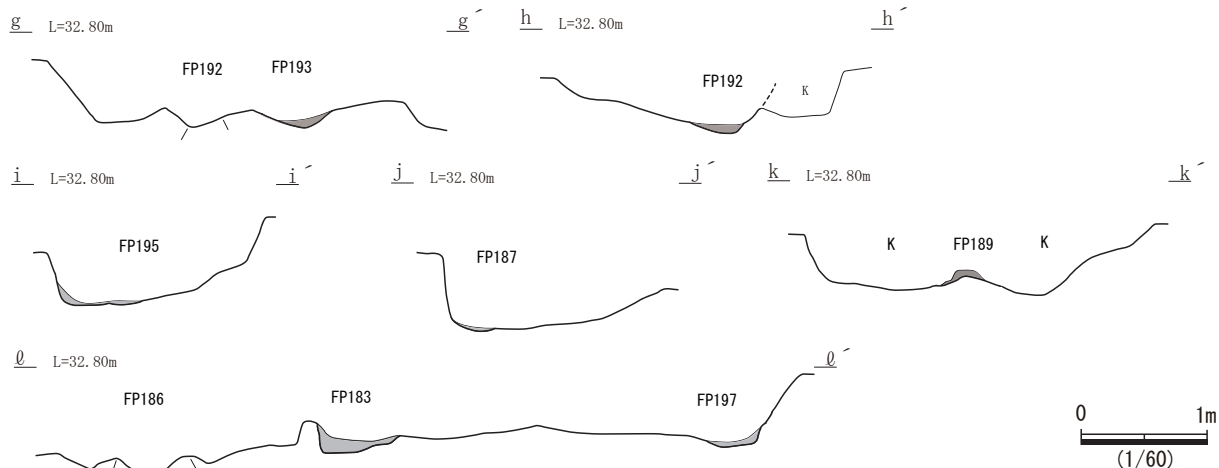
第 31 图 第 7 炉穴群实测图 (1)

させた胴部片が多く見受けられる。13 の胴部や 16 の尖底部では細い沈線が用いられ、14 では短沈線、曲線的な沈線などを施している。16 では沈線区画内に貝殻腹縁文を充填している。17 は、外反する器形で沈線文は認められないが、平坦に作出された口唇部には貝殻腹縁文を施している。若干の繊維が含まれ、赤

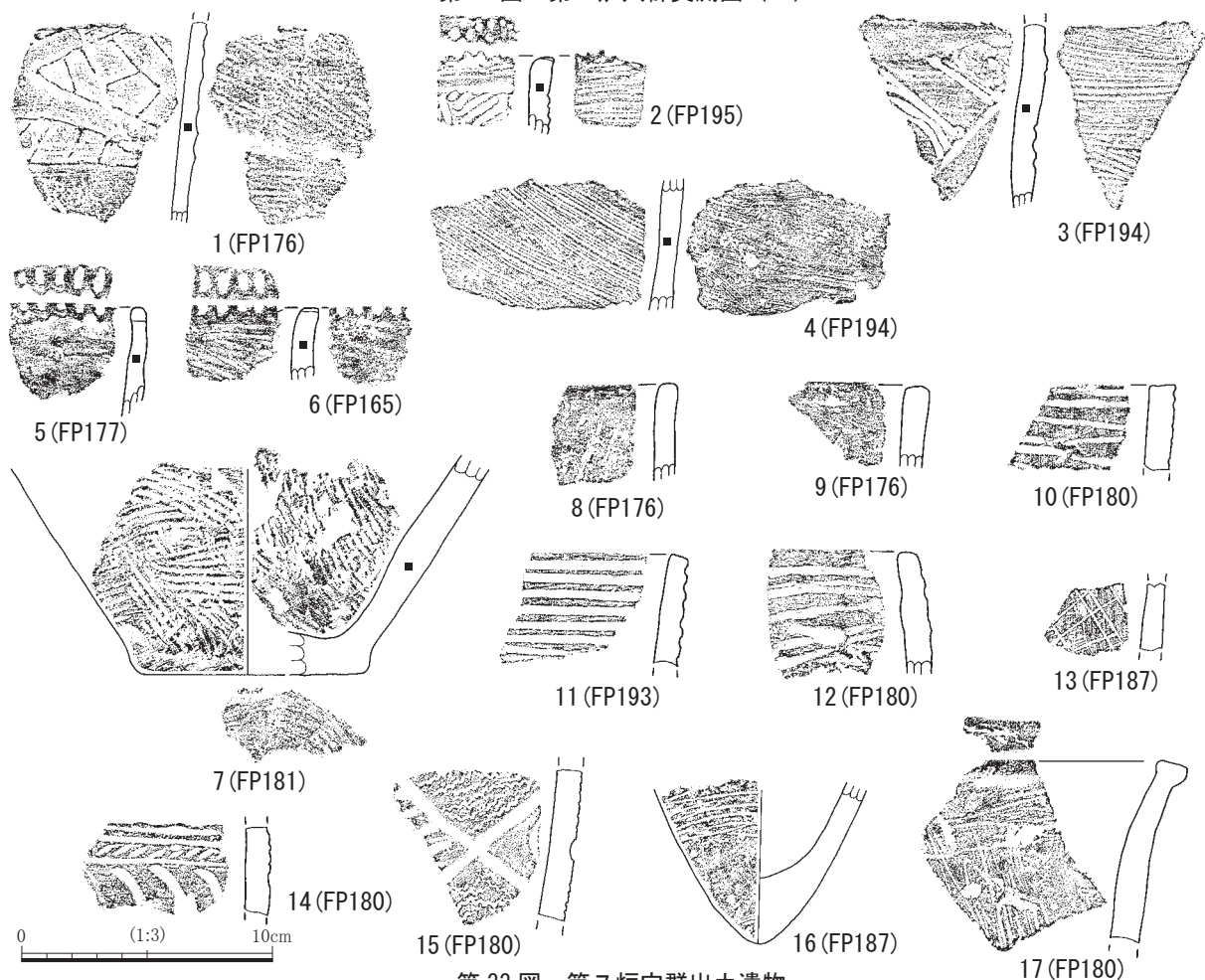
みを帯びた胎土で、田戸上層式のものと考えられる。

(8) 第8炉穴群

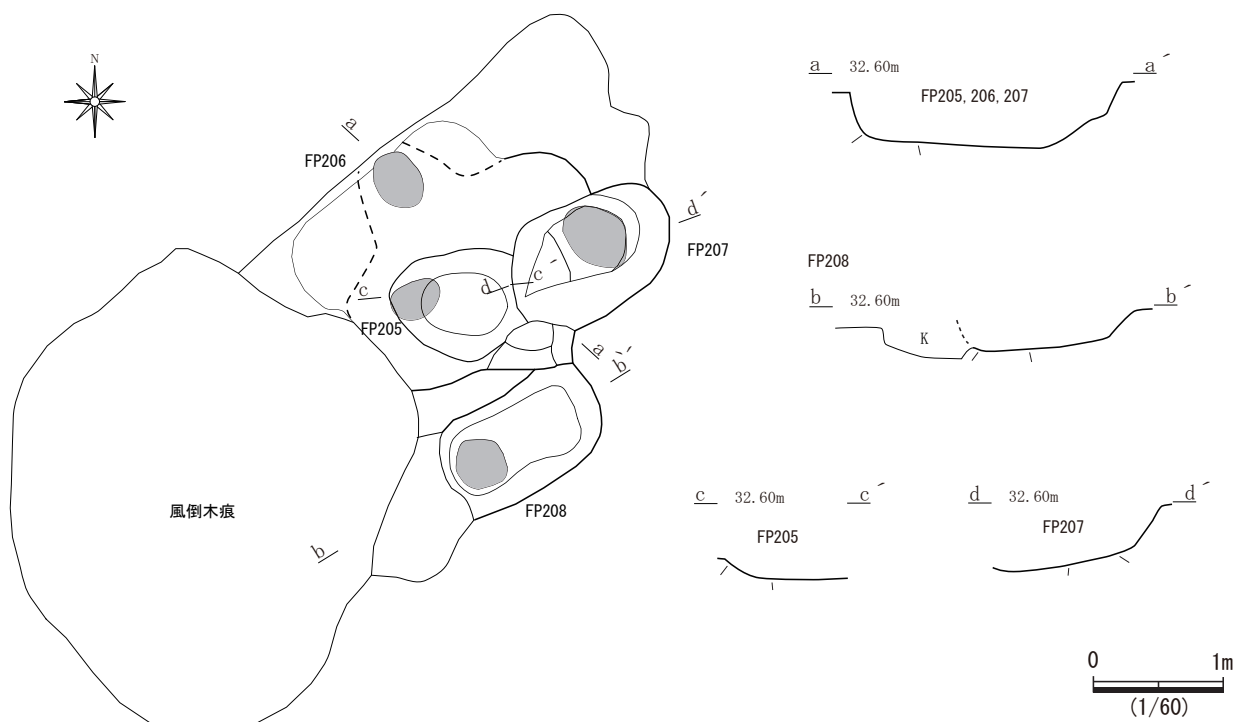
第8炉穴群は、FP205～208の4基が重複し、西側では一部が風倒木痕に切られていた。全体の規模は長軸2.85m、短軸は約2.43mである。位置は調査区北西側のE6グリッド東端の谷側に近い地点にあたる。



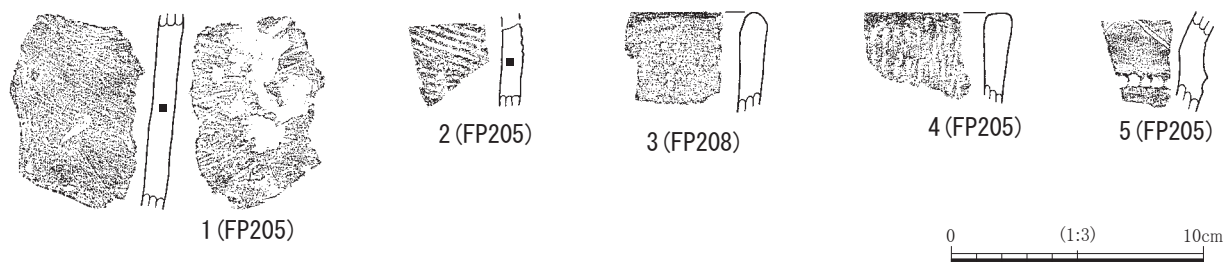
第 32 図 第 7 炉穴群実測図 (2)



第 33 図 第 7 炉穴群出土遺物



第 34 図 第 8 炉穴群実測図



第 35 図 第 8 炉穴群出土遺物

FP206 は炉穴自体の掘り込みが明瞭ではなく、被熱も非常に弱いものであった。FP208 は他の炉穴との重複部分はわずかで、単独の炉穴として取り扱ってよいのかもしれない。

出土遺物は、FP205 ～ 207 は一括で取り上げたが、全体に出土量が少ない。最も多いのは無文で繊維の含まれた土器、次いで繊維の含まれていない土器であったが、小破片ばかりである。条痕文系土器も全体の出土量としては多く、繊維を含んだ土器とともに当該時期の主体をなしているであろう。

1 は無文の繊維土器で、内外面ともに擦痕文が認められる。2 は外面のみに条痕文が施されている。3 は FP208 から出土した撚糸文系土器であるが、施文された原体は不明瞭である。4 は撚糸文ではなく無節縄文が斜位に施文されている。5 は鋸歯状の沈線と刻みを持った突帯文が横走させた胴部片で、わずかに繊維を

含んだ胎土などから田戸上層式に比定される。

(9) 第 9 炉穴群

第 9 炉穴群は、FP212・223 ～ 225・236 ～ 239・262・268 ～ 273・303・311・312・314 ～ 317 の 22 基が重複し、北西から南東に長く延びる部分と南側に延びる部分に分かれている。全体の規模は、北西から南東へ延びる部分の長軸が 9.00 m、短軸は最も広い部分で 5.36 m、南側へ延びる部分の長軸は 10.13 m、短軸 4.80 m である。南側では縄文時代前期の陥穴 SK016 に切り込まれていた。位置は調査区北西側の E6・F6 グリッドにまたがる地点にあたる。この地点は以前民家が建っていた場所とされ、東側部分が大きく攪乱を受けていた。攪乱を免れた部分からも炉穴が確認されたため、付近の炉穴群をまとめて第 9 炉穴群とした。しかし、南側に延びる部分はやや離れすぎているため、別な炉穴群として扱った方が適切かもしれない。

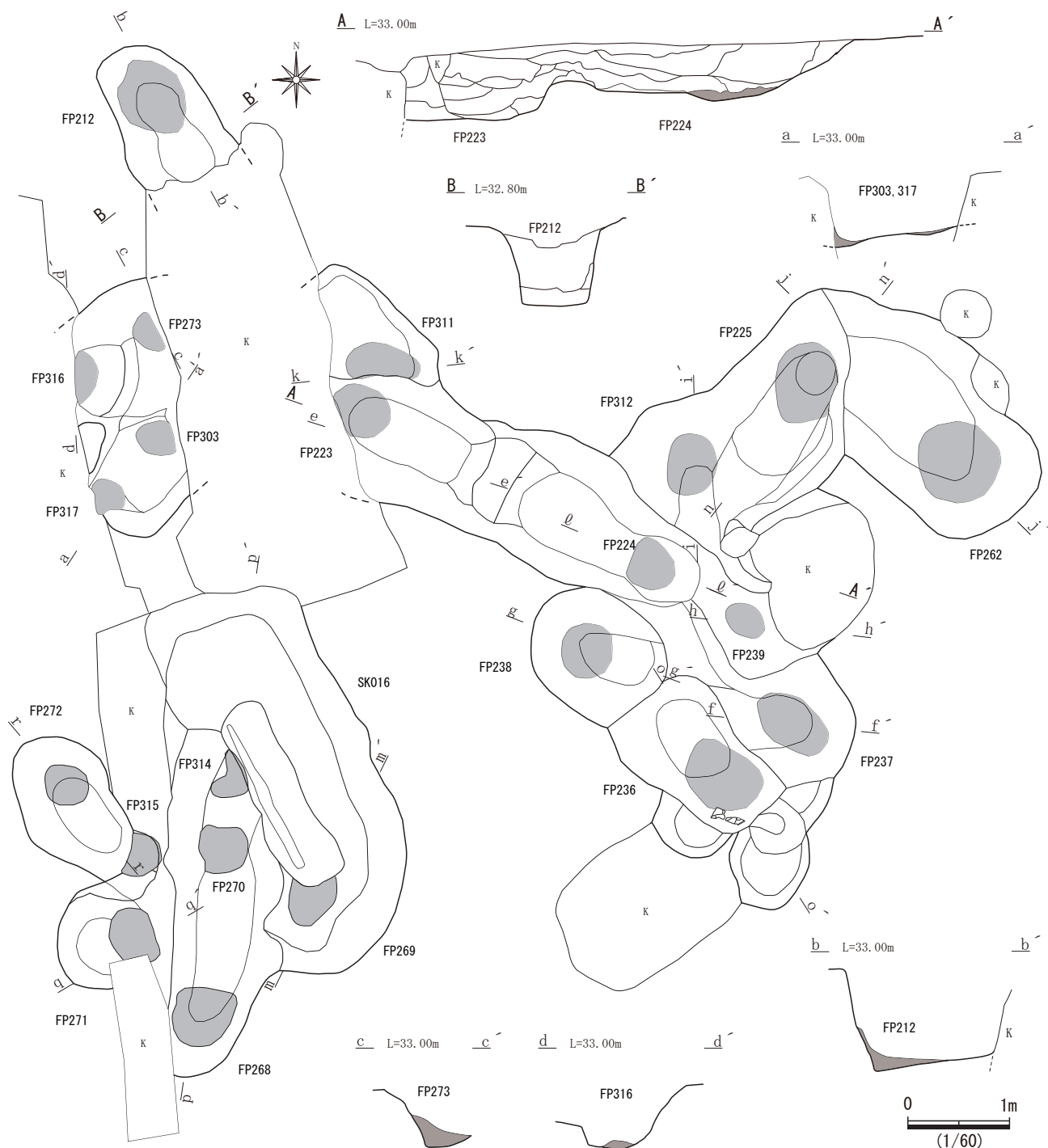
ない。

北西から南東側に延びる炉穴群は、FP223 と FP224 が向かい合わせになり、それぞれの火床側で複数の炉穴が広がっている。その東側は大きく攪乱されて全容は不明であるが、対照的な広がり方をしていたのではないかと考えられる。全体的に深い炉穴が多く、火床の赤化・被熱が強い炉穴も目立つ。一方、南側に延びる炉穴群の FP278 ～ 272・314・315 は、全体に浅めの

掘り込みで焼土も厚くはなく、火床の赤化も弱い炉穴がほとんどであった。

出土遺物は、条痕文系土器を主体としており、当該時期の炉穴群と考えられる。沈線文系土器では田戸上層式の土器が他の炉穴群より多く認められる。

1 は薄手で区画される沈線が細く、区画内にも細かい沈線が充填されている。2 は細隆線によって区画され、区画内にも同様の細隆線によって格子状の文様が施さ



第 36 図 第 9 炉穴群実測図 (1)

れ、1・2ともに野島式に比定される。3～9の口縁部は、茅山下層式に比定されるものと考えられる。3は沈線区画内にキャタピラ状の押引文が施されたもので、竹管文状の刺突が消滅し、文様もX字状に近くなるなど、鵜ガ島台式から茅山下層式への過渡的な雰囲気を持っている。3・4ともに口唇部外端に刻みを持つ。5は角頭状の口唇部、6は条痕文が口唇部にまで及ぶ。7・8は屈曲した部位で7は条痕文のみ、8は上部に刺突文を充填させている。9は環状の把手部で口唇部に縦位の刻みを有している。10～15は内外面に条痕文が施された土器で、薄手の作りである。この炉穴群の特徴として、条痕文が施された土器でも器壁の薄い土器が比較的多く見受けられ、古相を示す。11は波状の口縁部である。12は直線的な立ち上がりの器形に対し、13はやや湾曲したタイプになる。

16～24は沈線文系の土器群である。16・17は縦位の沈線が施され、16は刺突列もみられる。18はX字状沈線の区画内に貝殻腹縁文が充填されたもので、田戸下層式と考えられる。19～24は田戸上層式に比定できるものである。19・20は内湾気味の口縁部内側に刻みを持つ。19・22・23などは細い沈線を用いて文様が描かれている。19・24には刻みを付けたボタン状の突起があり、さらに24では刻みを持った隆帯が施されている。25は小型の尖底部である。

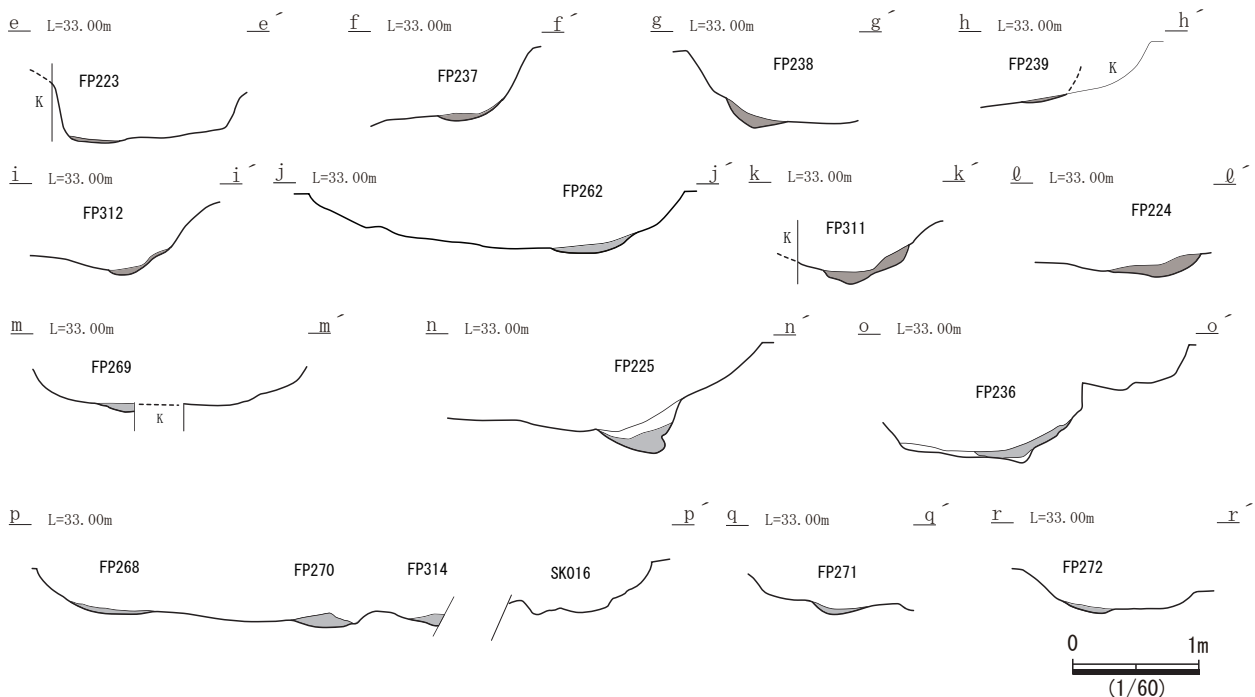
(10) 第10 炉穴群

第10 炉穴群は、FP213～221の9基が重複し、東西に細長く延びている。全体の規模は、長軸6.16m、短軸は最も広い場所で3.45mである。位置は調査区北西側のD6・7グリッドとE6・7グリッドにまたがった地点の谷側に最も近い場所にあたる。

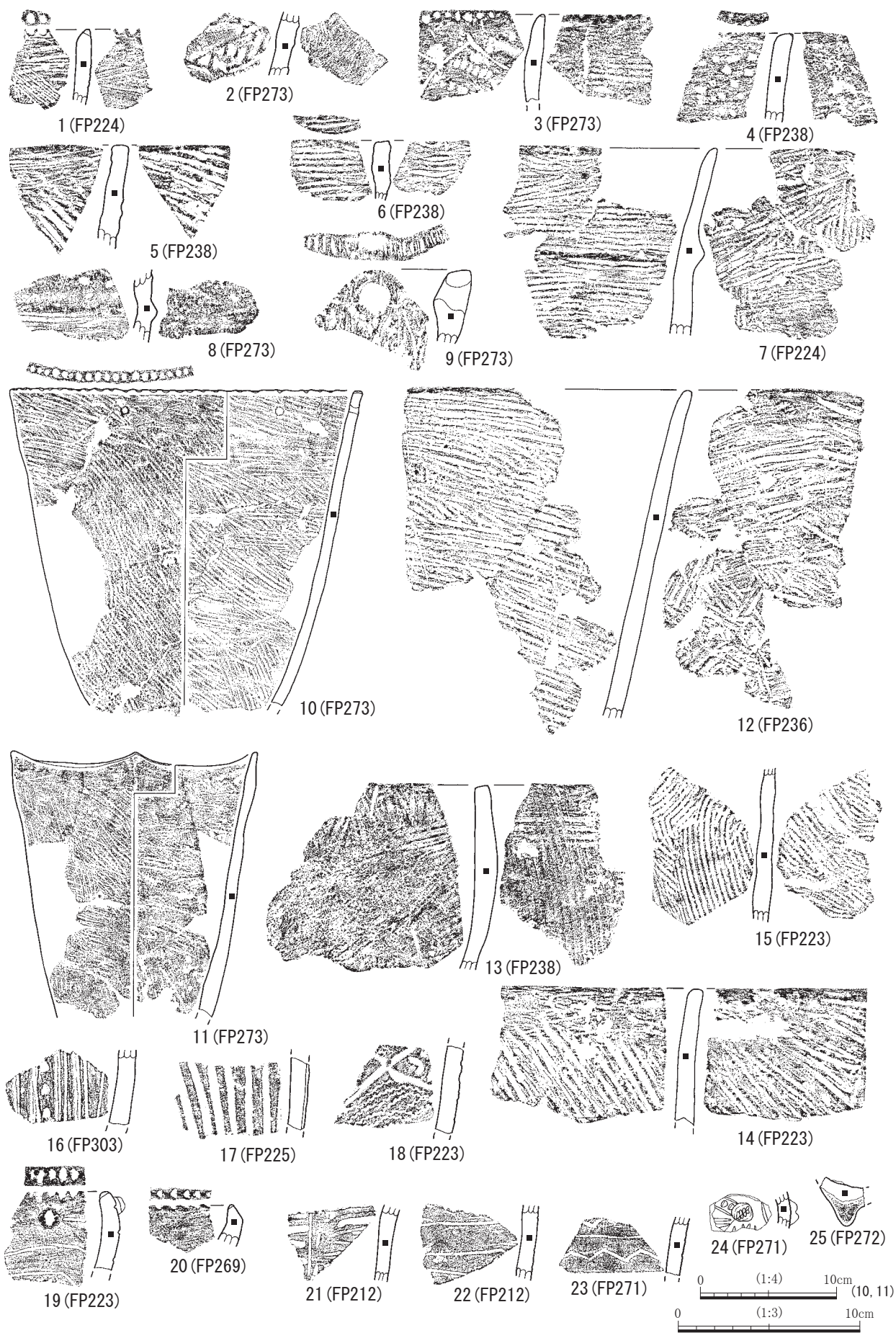
FP213～218とFP219～221では構造的な違いが認められる。前者は、深い遺構と浅い遺構2基が伴う構造であるが、掘り込まれた方向の違いから、さらにFP213～215の一群とFP216～218の一群に分けられる。深さを持つFP213では、下層に焼土ブロックや被熱したロームブロックを多量に含んでいる層が広がっていることから、深い炉穴から浅い炉穴へ移行していった可能性がある。後者ではFP219・220がかなりの深さを有しており、段差を持った足場は共有されていたと思われ、双方の炉穴が同時に使用されていた可能性が高い。一方、これらとFP221は深さに差があるため、関連性はあまりないと考えられる。

出土遺物は、条痕文系土器が主体で出土していることから、当該時期の炉穴群と考えられる。撚糸文系及び沈線文系の土器は主に各炉穴の上層部からの出土である。なお、FP213～214の間では一括して取り上げたものが含まれている。

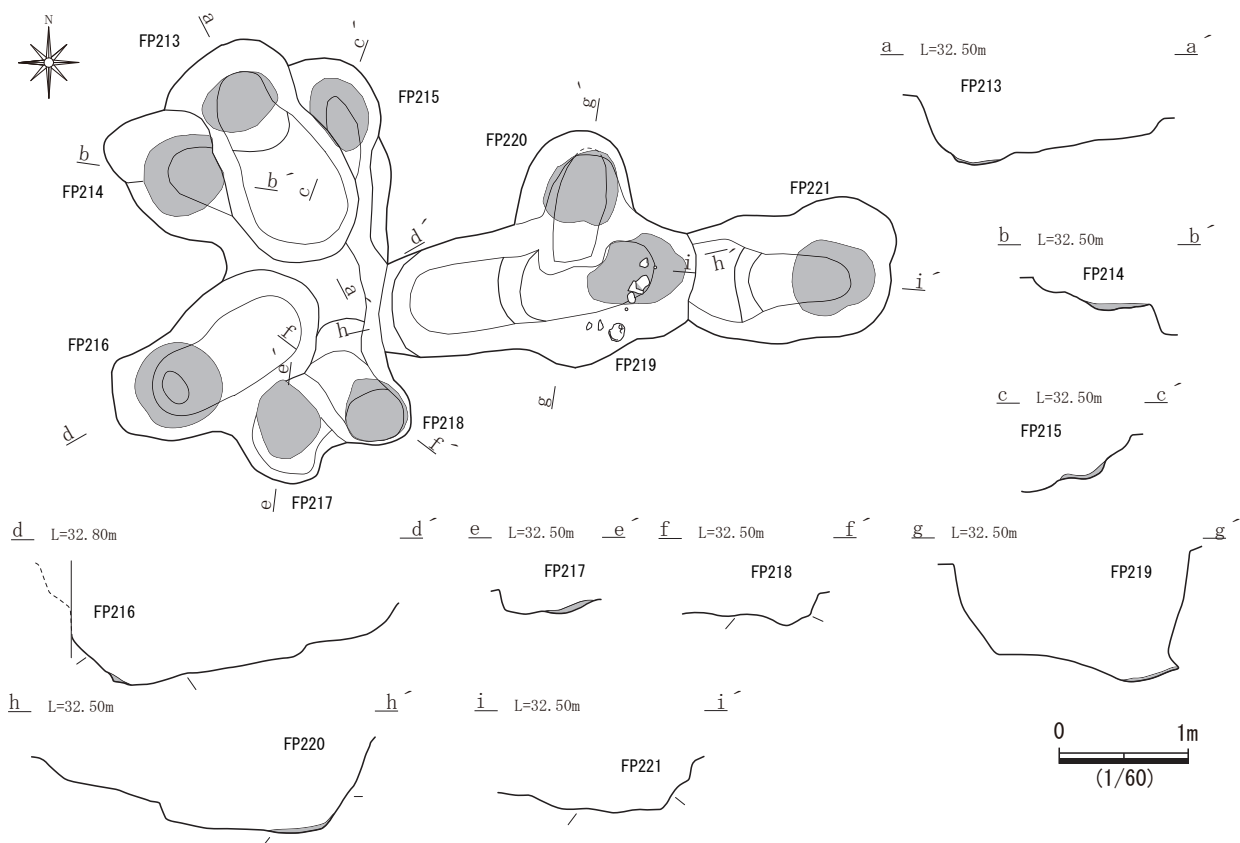
1は太目の隆帯にやや間隔を開けた沈線が描かれ、



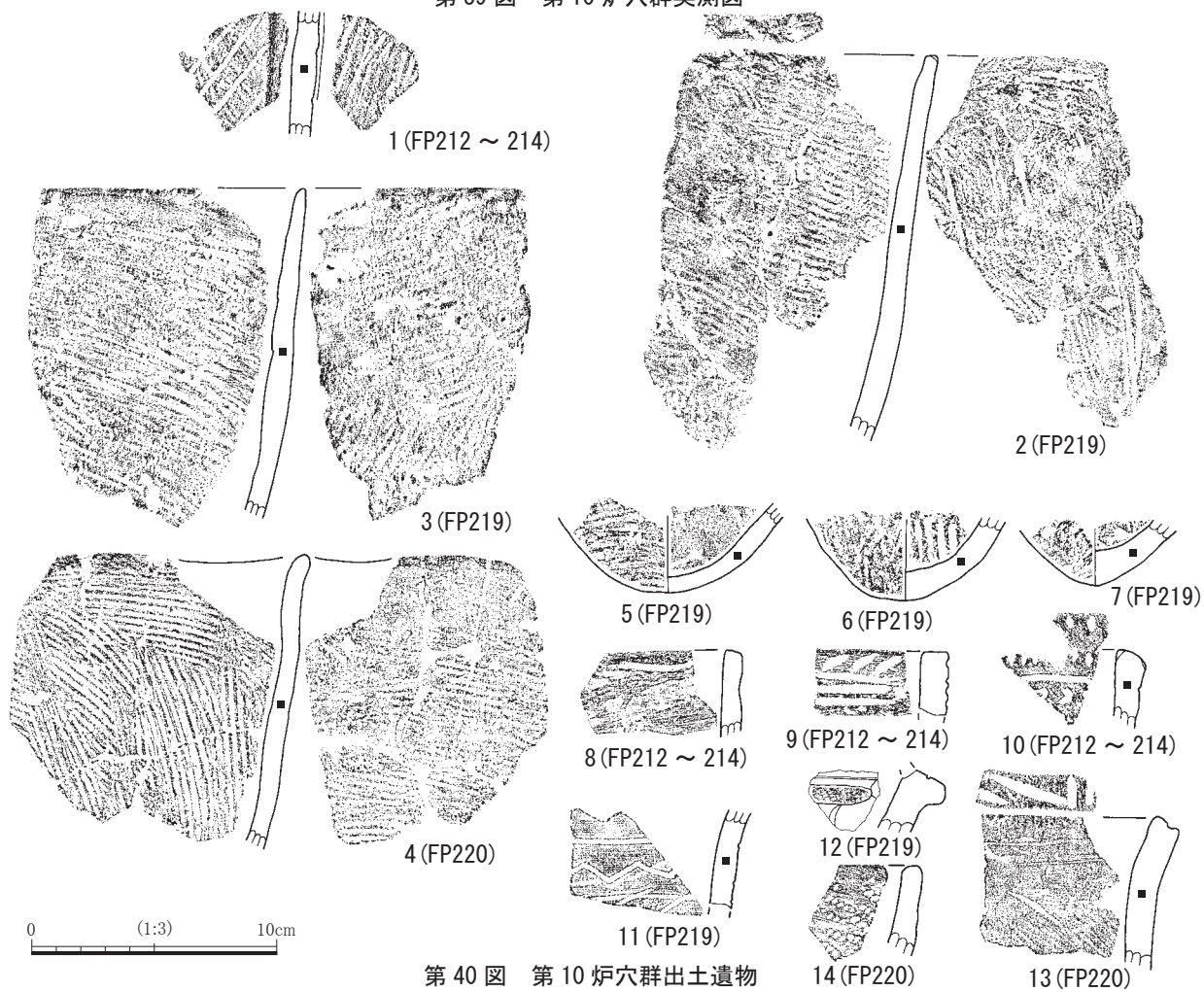
第37図 第9 炉穴群実測図(2)



第 38 图 第 9 炉穴群出土遺物



第 39 图 第 10 炉穴群实测图



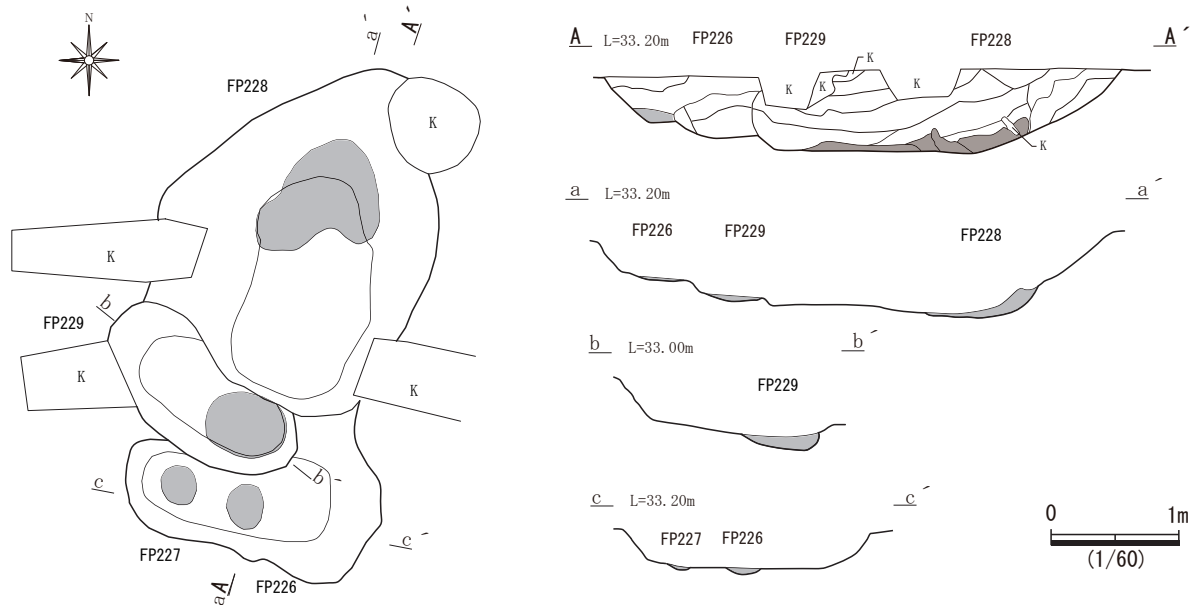
第 40 图 第 10 炉穴群出土遺物

内面には縦位の条痕文が施された野島式と考えられる。2～4は内外面に条痕文が施された土器群で、いずれも薄手のつくりである。5～7の底部は、内外面に条痕文が施されたものであるが、やはり薄手の仕上がりで丸底状の尖底部である。条痕文が施された土器は全体に器壁の薄い土器が目立っている。

8～13は沈線文系の土器群である。8・9は田戸下層式と思われるが、8は緩い波状になる口縁部で、

口縁直下に凹線文が施される。10～13は田戸上層式に比定できる。10の口縁部は内端に刻みを持ち、外端に縦位の刻みが施される。11は横位の沈線・鋸歯状沈線が描かれる。12の突帯上には貝殻復縁による刻みが認められる。13は口唇部に太目の沈線が縦位と斜位に施された口縁部である。胎土が11に類似しており、田戸上層式口縁部のひとつの形と考えられる。

15は縄文原体の側面圧痕が施されたものとみられ、



第41図 第11炉穴群実測図



第42図 第11炉穴群出土遺物

縄文時代前期花輪台式のものであろうか。

(11) 第11 炉穴群

第11 炉穴群は、FP226～229の4基が重複し、南北に長く延びている。全体の規模は、長軸4.00 m、短軸2.18 mである。位置は調査区北側中央部E6グリッド内の南西側にあたる。

FP228は本炉穴群の中で最も大きく、他の3基とは規模に差がある。FP226はFP227の足場内で確認されており、造り替えが行われた可能性がある。

出土遺物は、条痕文系土器が主体で出土しており、当該時期の炉穴群と考えられる。FP226・227からは出土していない。

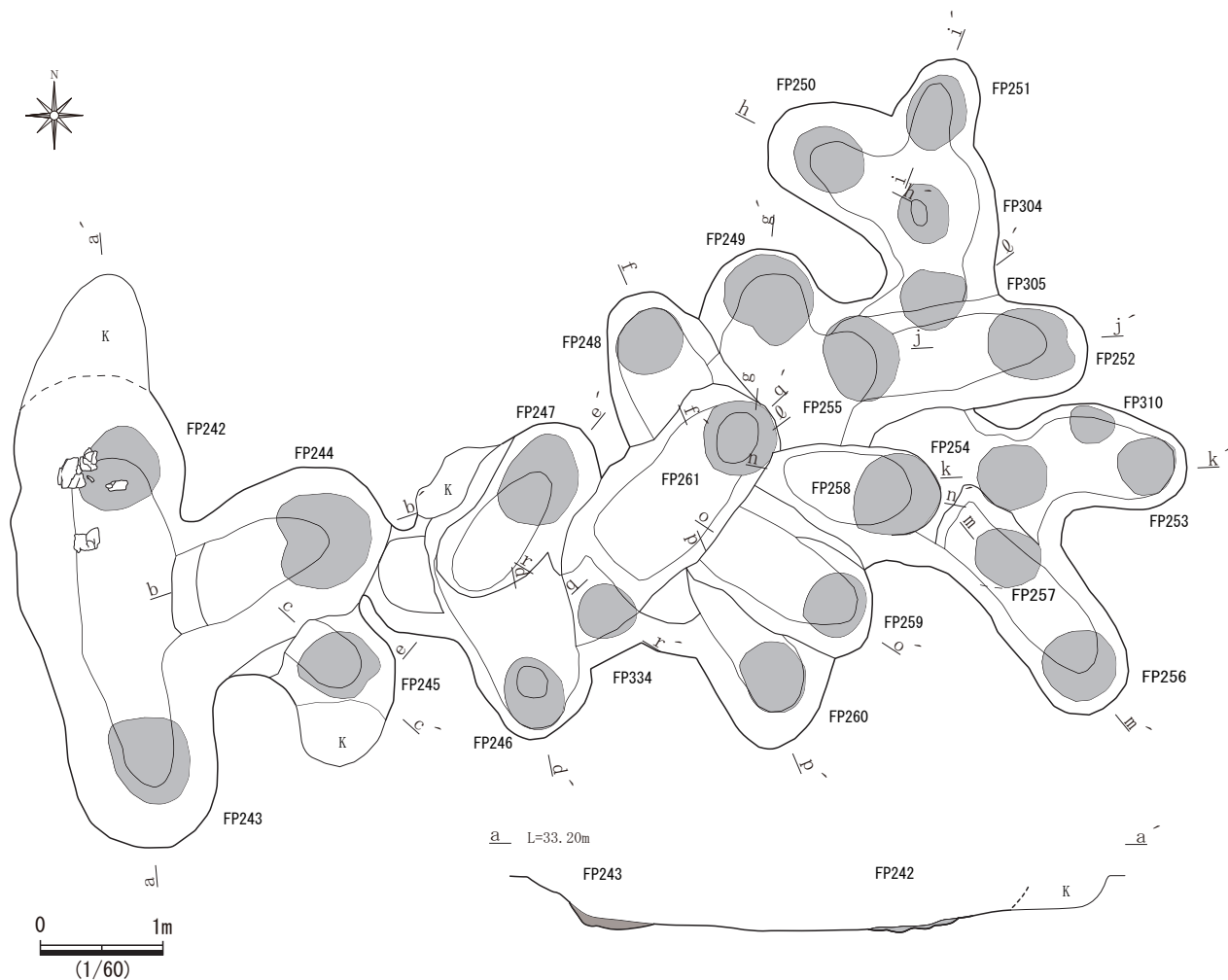
1は口唇部外端に刻みを持つ鵜ガ島台式の口縁部である。文様帯は沈線による幾何状の区画文内に刺突文を充填し、区画上に竹管文が押捺されている。胎土に含まれる繊維の量はさほど多くはなく、精緻なつくりである。一方2では、1と類似する文様帯となるが、竹管文が消失しており、鵜ガ島台式から茅山下層式へ

移行する段階のものではないかと考えられる。胎土に繊維を多量に含んでいる。3・4は内外面ともに条痕文が施された土器で、4の口縁部は内削ぎ状となる。

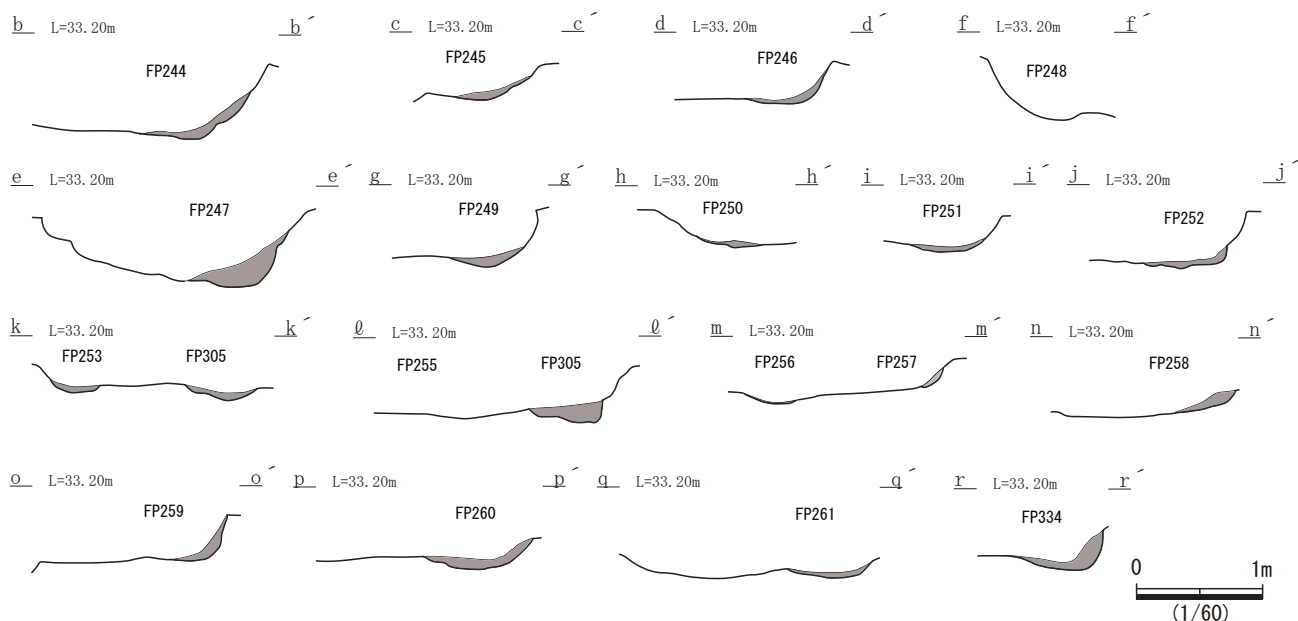
(12) 第12 炉穴群

第12 炉穴群は、FP242～261・304・305・310・334の24基が重複し、東西に長く延びる。全体の規模は、全長9.67 m、幅は最も広い部分で5.43 mである。位置は調査区北西側F7グリッド内の中央部から東側の地点にあたる。

炉穴群の西側にあるFP242～244は、規模の大きい炉穴が重複しており、足場を共有していた可能性がある。この3基より東側では、全体に小規模な炉穴が連なっており、放射状の広がりを見せている。いずれも深さは浅めで、極端に深い炉穴は認められない。炉穴群の中央でFP261を中心に、FP248・249・255・258・259・260が放射状になる。さらにその東側では、FP253とFP256の一群が南東方向へ、FP250とFP251の一群が北東方向へ分かれ、蛸足状に広がっている。



第43図 第12 炉穴群実測図(1)



第 44 図 第 12 炉穴群実測図 (2)



第 45 図 第 12 炉穴群出土遺物

深さは先端へ延びるほどに徐々に浅くなっている。深い方の炉穴には焼土ブロックとロームブロックが多く含まれる層が被っていたため、この炉穴の掘り込みを足場として利用し、新たな炉穴を構築した様相がうかがわれる。

出土遺物は、条痕文系土器を主体とし、当該時期の炉穴群と考えられるが、炉穴の基数に対して少なめで、図示したほとんどが小破片である。

1 は口端部に刻みを持った口縁部で、沈線で描いた区画内に斜状の沈線文を充填させている。2 は波状の口縁部で、細隆線文で区画している。区画内には 1 同

様に沈線が充填され、いずれも野島式と考えられる。3 の口縁部は隆帯で区画し、幅の狭い文様帯を作り出している。3 では押引文、4 では一部に山形状の沈線文が区画文の一部に施されているに過ぎない。3・4 とともに茅山下層式に比定されるが、4 は茅山上層式に移行する段階のものであろうか。5 は小型の条痕文土器である。6・7 は撚糸文系土器縮荷台式の口縁部である。双方に非常に細き撚糸を密に施文している。

(13) 第 13 炉穴群

第 13 炉穴群は、FP263・264・274～277・309 の 7 基が重複し、弓形になって南北に長く延びている。全

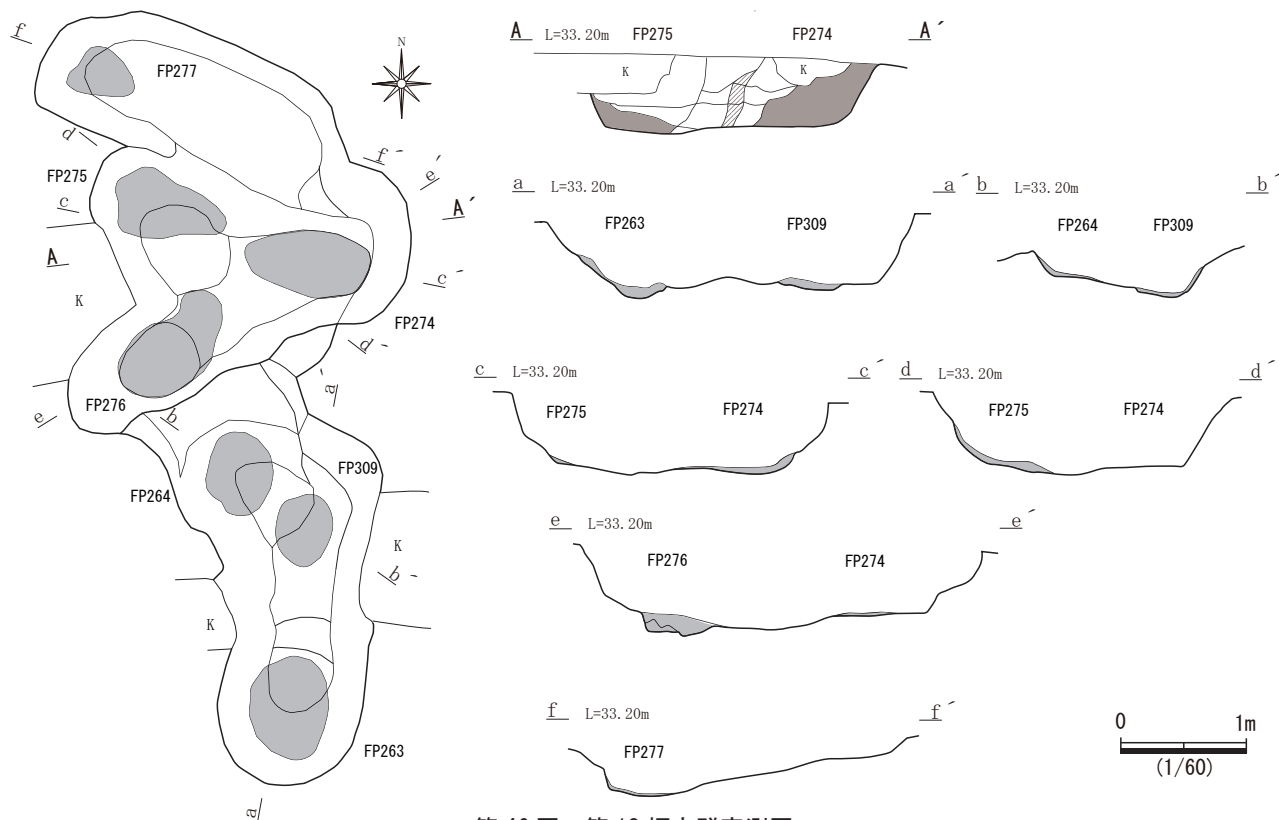
体の規模は、長軸 6.25 m、短軸は最も広い部分で 3.07 m である。位置は調査区北西側 F6 グリッド内の南西寄りにあたる。

7 基は群をなしているが、FP263・264 と FP274～276 の間には、掘り残しのわずかな壁がみられることから時期差が想定される。FP309 は FP263・264 を掘り下げた後に確認されており、直上には焼土ブロックと被熱したロームブロックが多量に含まれた層が被っていた。FP274～276 は、足場を共有した可能性があるが、FP274 では焼土の堆積が厚く、FP275・276 よ

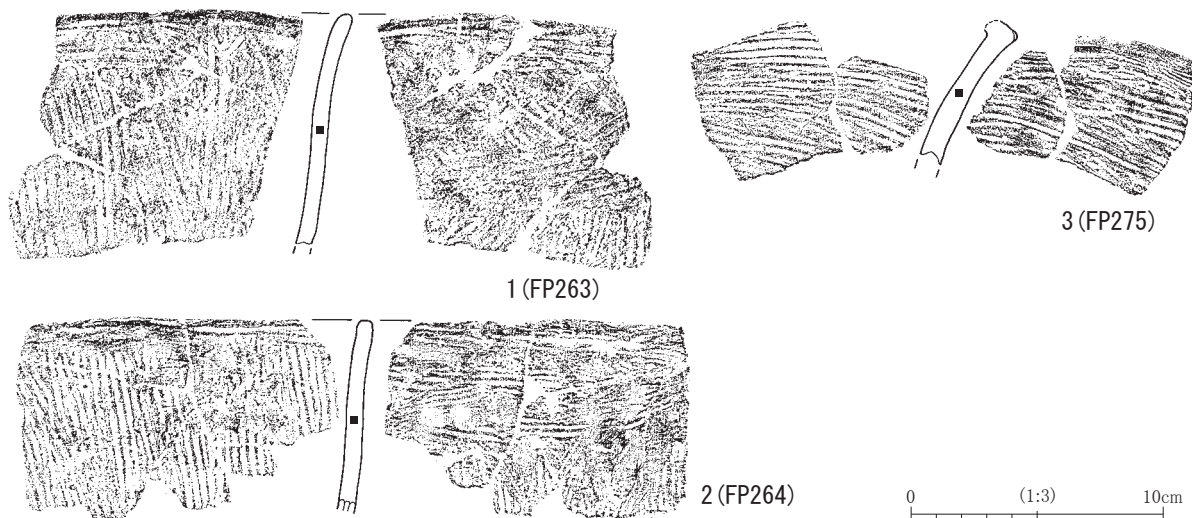
り長期にわたって使用されたようである。FP277 はスロープ状の長い足場になっており、この炉穴群の中でも構造的に違いが認められる。

出土遺物は、条痕文系土器が主体で出土しており、当該時期の炉穴群と考えられる。

1～3 は内外面ともに条痕文を施した土器である。1・2 はともに器壁が薄い作りで、条痕文が縦位・横位に整っている。3 は段を持った胴部で、段部に刻み目がつけられている。胎土に含まれる繊維は少なめで、表面に白色砂粒がやや多く認められた。



第 46 図 第 13 炉穴群実測図



第 47 図 第 13 炉穴群出土遺物

(14) 第14炉穴群

第14炉穴群は、FP241・278～293の17基が重複し、北東から南にかけて弓形に長く延びている。全体の規模は、長軸8.80m、短軸3.33mである。位置は調査区北西側のF6・F7グリッドにまたがる地点にあたる。

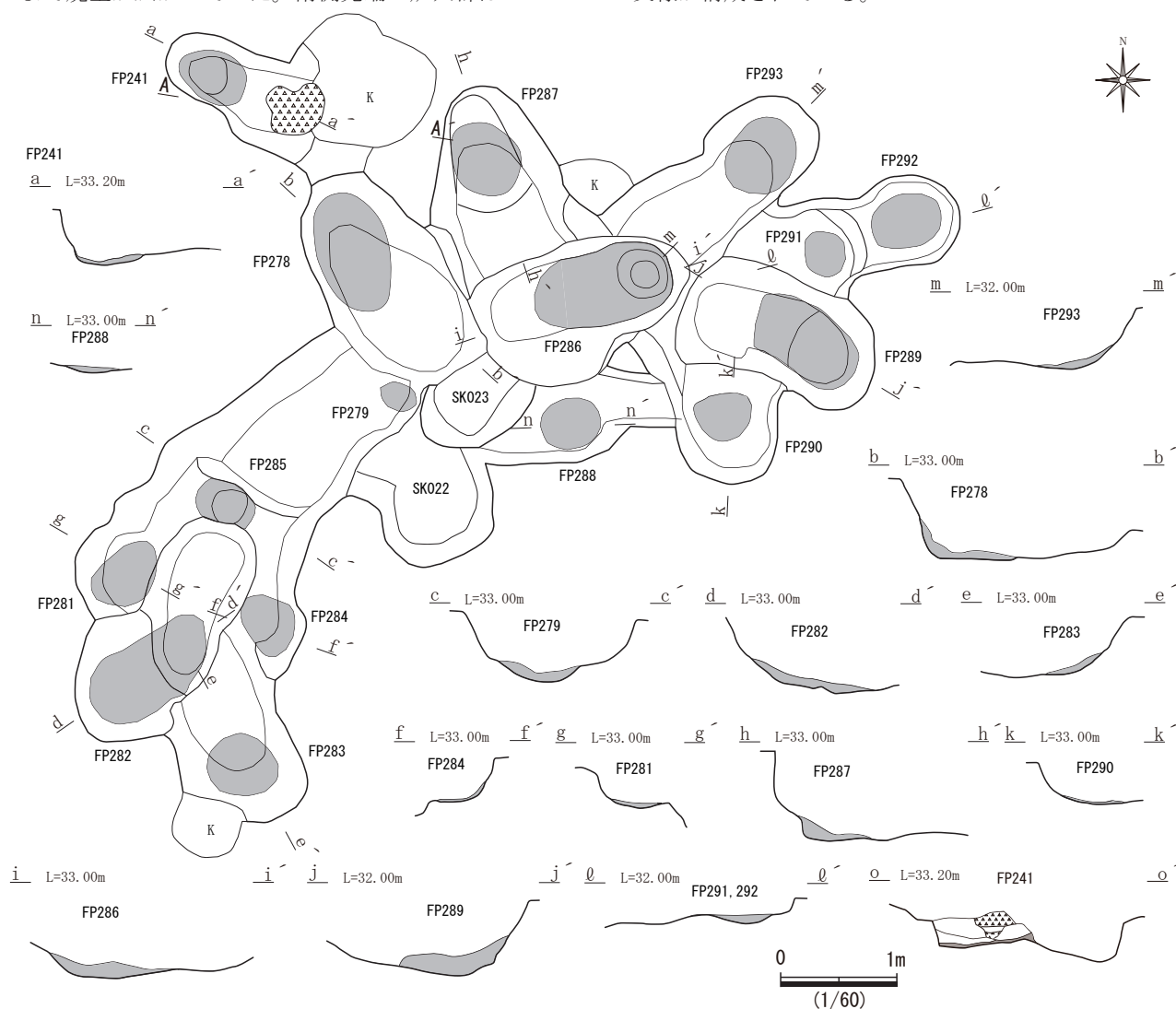
本炉穴群は、形態的な違いから南側の先端、中央、北東側、それに貝層を伴ったFP241に大別される。

FP241は、北西側に突出して確認されたやや小規模な炉穴であるが、火床側が深めになっている。炉穴群の中でも重複部分がわずかであるため、切り離して考えた方がよいのかもしれない。足場側上に貝層が堆積していた。北東側の炉穴群は浅めの炉穴が重複したもので、先端部が放射状に広がっている。中央部に位置するFP278・286・287は、ほぼ同規模・同形態で深さがあり、火床部の被熱も強い。FP286は足場部分にまで焼土が広がっていた。南側先端の炉穴群はFP282

を中心にしてFP281・283・284・285が放射状に延びている。ただしFP282の下層部は焼土ブロック混じりのロームブロックが多く含まれた層が被っていた。FP282の火床は焼土が南西側に広がっているが、段差があり、FP282を取り巻く炉穴のひとつとも捉えられる。FP283は別な足場を持っているため、FP282とは関連性があまりないようにみられる。

出土遺物は、条痕文系土器が主体になっており、当該時期の炉穴群と考えられる。

1・2は口縁部に一段の区画文を持つが、区画内に文様は認められない。2は緩い波状を有している。3・7・8の口縁部は浅い条痕文が施されており、8では口唇部が擦痕文状にナデ調整されている。4は口縁部直下に押引文の文様が施される。5・6でも口縁部に刻み目が付けられた一段の区画文が施され、刺突文で文様が構成されている。



第48図 第14炉穴群実測図

9・10は撚糸文系稻荷台式の土器で、9は撚糸文が太めである。

11～13は沈線文系の田戸上層式に比定される。11・12の口縁部は両端部に刻みをもつ。13は口唇部の平坦面に刺突文が施される。

14は半截竹管文を密に施し、大き目の竹管文状工具によって押捺が加えられている。縄文時代前期・諸磯b式と考えられる。

(15) 第15炉穴群

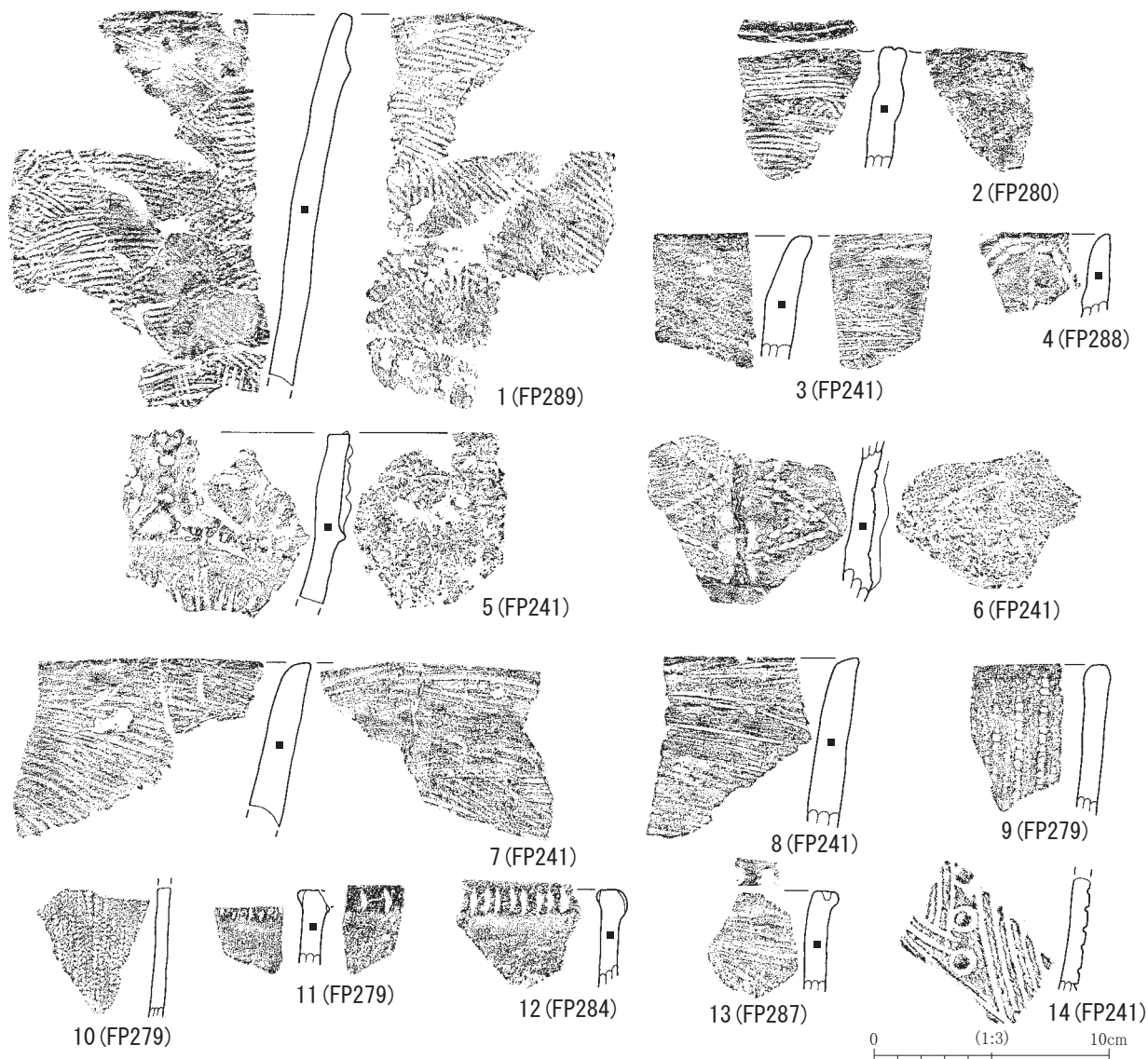
第15炉穴群は、FP294～301の8基が重複し、北東から南西にかけて延びている。全体の規模は、長軸4.70m、短軸は最も広い場所で2.78mである。位置は調査区北東側F6グリッド内の南東側の地点にあたる。

各炉穴の配置を見ると、南西側へ突出したFP297以

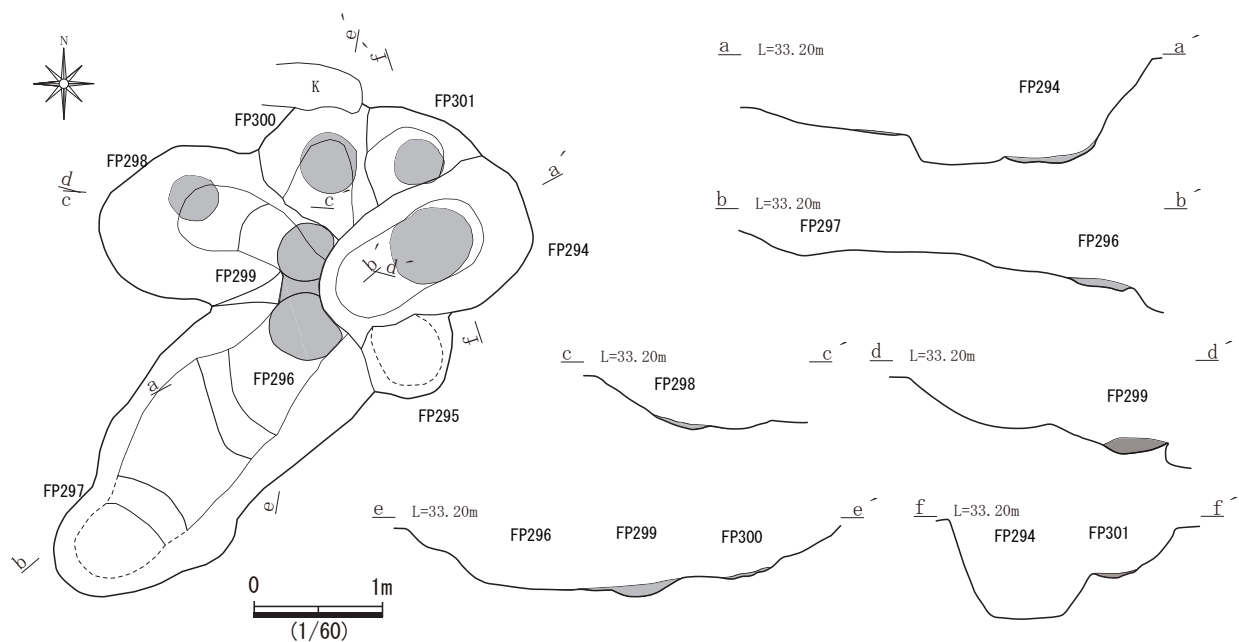
外は全て北東側に集中している。北東側の炉穴群は、最も深いFP294に接して浅めのFP296・298～301が放射状に広がっている。FP295は、FP294とほぼ同じ深さで接しているが、赤化した部分は認められないものの、底面のロームは硬化し被熱したとみられる。FP297も赤化は認められなかったが、先端部の底面は被熱の痕跡が認められた。

出土した遺物は、他の炉穴群に比べて量的に少なめである。その中でも条痕文系土器が主体となっており、当該時期の炉穴群と考えられる。なお、FP296・297では合わせて一括に取り上げた遺物も含まれている。

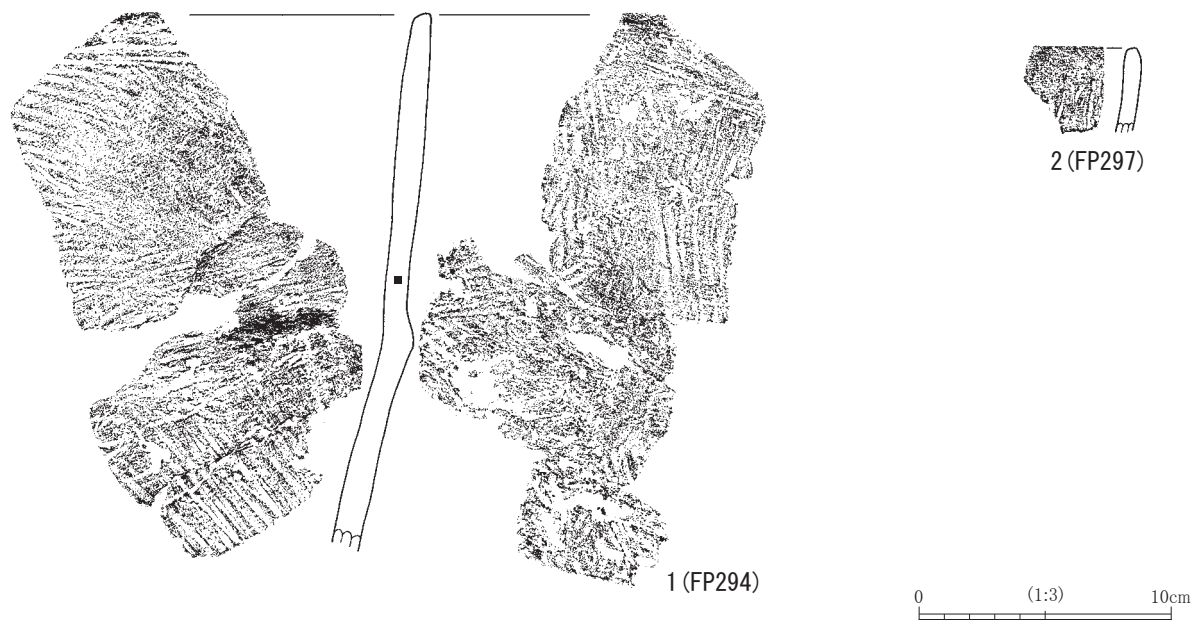
1は内外面ともに条痕文が施され、胴部上半に一段の区画がある。茅山上層式に近い時期のものであろうか。2は撚糸文系稻荷台式とみられる小型の口縁部である。



第49図 第14炉穴群出土遺物



第 50 図 第 15 炉穴群実測図



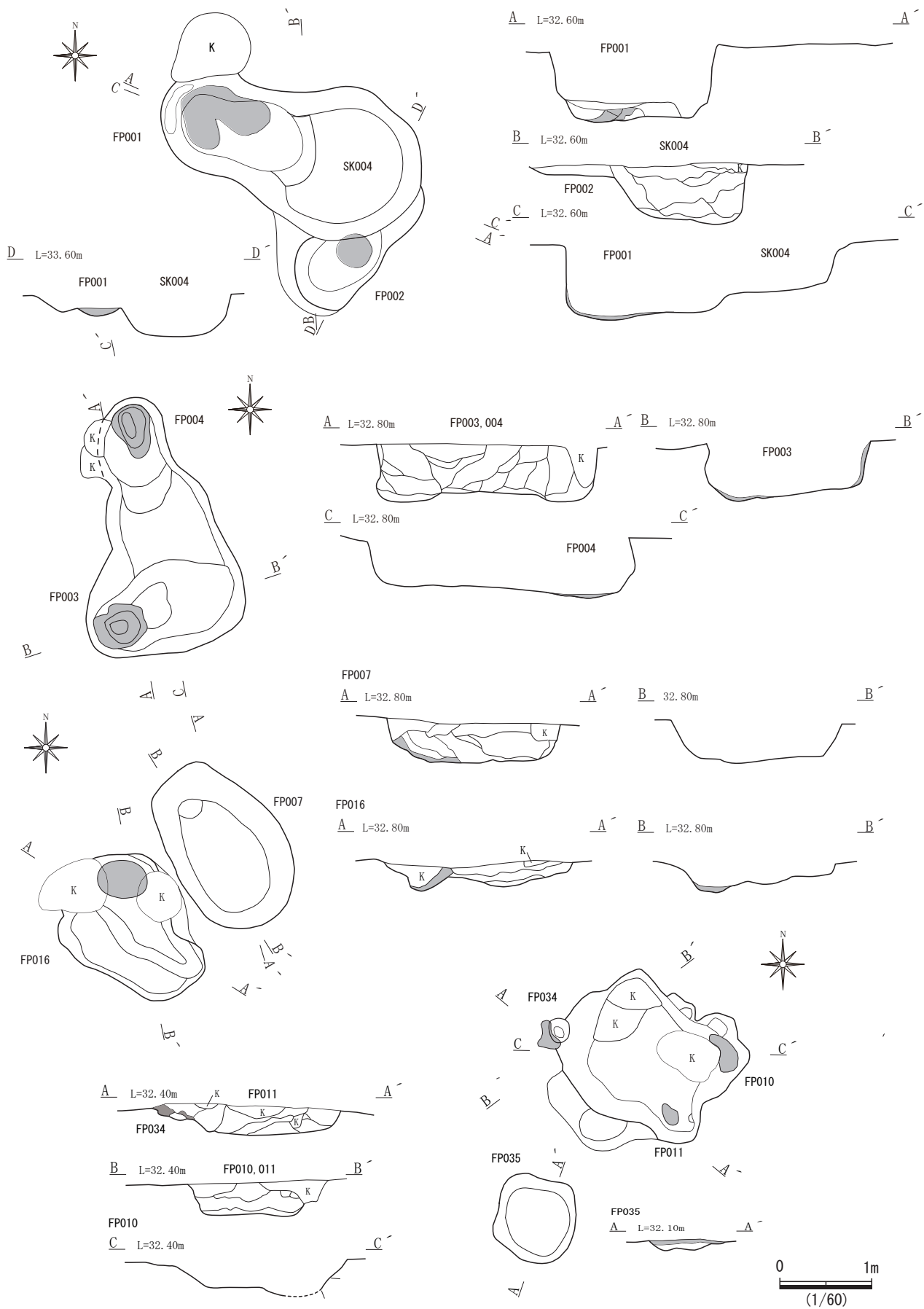
第 51 図 第 15 炉穴群出土遺物

(16) 重複の炉穴・単独の炉穴

FP001・002 は、SK004 とともに重複する。箱状に深く掘り込まれ、火床側の壁面まで強い被熱を受けた FP001 に対し、浅い掘り込みで火床の被熱も弱い FP002 は、構造的にかなりの違いが認められる。SK004 は FP001 の足場側にわずかの段差をもって掘り込まれ、炉穴と関連した可能性もある。遺物は、FP001 では条痕文系土器が主体で、当該時期の炉穴と考えられる。1 は緩い波状を呈した深鉢で、内外面ともに条痕文が施される。やや薄手であるが、条痕文の施文が乱雑である。FP002 では火床直上にややまと

まって出土した。沈線文系土器が主体であり、本炉穴は当該時期のものと考えられる。2 は、凹線文と細い沈線を融合させたもので、刺突列も併走させている。3 は凹線文を密に施したもので、2・3 とも田戸下層式に比定される。

FP003・004 は、それぞれの主軸が 85 度の角度をもって重複する。新旧関係は、土層から FP004 が新しいと考えられる。FP004 では火床側にローム質土の堆積が認められ、天井部が崩落した可能性が考えられる。出土遺物は、FP003 では沈線文系土器と条痕文系土器が主体で出土しているが、量的には沈線文系の方が多い。



第 52 図 重複炉穴・単独炉穴実測図 (1)

FP004 は条痕文系土器のみが出土するが、極少量の出土である。4 は捺糸文系土器の胴部片であるが、上層部からの出土である。

FP007 は、重複はしていないが、第 1 炉穴群 FP008 に連なるような配置である。出土遺物は、条痕文系土器が主体で出土している。5 は口唇部に刻みを持った波状口縁で、幾何状沈線の区画文上に竹管文の押捺を加えた鶺鴒ガ島台式である。本炉穴の当該時期のものとみてよい。

FP010・011・034 は、長軸が 1.90 m、短軸が 1.72 m の規模を持つ竪穴状の掘り込みの中で重複している。いずれも赤化・被熱が弱い。第 1 炉穴群の南東端部に近接する。出土遺物は、沈線文系土器と条痕文系土器が混在する。攪乱が影響しているのであろうか。

FP012・013 は、それぞれの主軸が 88 度の角度をもって重複する。出土遺物は、それぞれの炉穴の火床上面にまとも土器が廃棄されていた。6 は FP012 からの出土で、緩い波状口縁に刻みを持ち、菱形状の沈線文によって区画されたもので、文様帯の幅が狭く、段も明瞭ではない。7 はともに出土した小型の尖底土器である。8 は FP013 からの出土で、格子目状の沈線文上に竹管文が押捺されている。9 の尖底部は 8 に伴う可能性がある。6・8 ともに鶺鴒ガ島台式に比定される。

FP014 は、第 1 炉穴群と第 3 炉穴群の間に挟まれた小規模な炉穴で、赤化・被熱も弱い。落ち込みが不明瞭であったため不明な遺構として取り扱ったため、掲載した位置は正確ではない。出土遺物は極少量である。

FP016 は攪乱を受けているため形状は不明瞭であった。出土遺物は条痕文系が主体である。

FP035 は、足場側が広がった瓢箪形をしている。底面に焼土ブロックと被熱したロームブロックの混土層が薄く覆われていた。出土遺物は条痕文系土器が主体で、当該時期の炉穴と考えられる。12 は緩い波状をした口縁部で口唇部やや外側に刻みを持つものである。13 は小型の土器で口唇部に格子目文が施される。FP036 は焼土のみが確認されたものであるが、赤化は薄く、被熱も弱い。遺物は出土しなかった。

FP037・039・040 は 3 基の火床の向きを違えて重複している。FP037 の火床は明瞭であるが、FP039・040 の火床は規模も小さく、赤化・被熱も弱い。出土遺物は、FP037 から極少量出土するのみである。

FP042 は、隅丸長方形に掘り込まれた炉穴である。出土遺物は条痕文系土器が主体で、小片ながら鶺鴒ガ島台式が目立つことから当該時期の炉穴と考えられる。

FP065～067 は、重複して南北に長い掘り込みとなる。第 7 炉穴群の東側に近接している。重複部分が認められないことから第 7 炉穴群には含めなかったが、形態や規模が類似していることから関連性が高いものと思われる。出土遺物は FP066・067 が条痕文系土器を主体としているが、FP065 からは出土したのは沈線文系のみであった。

FP068・069 は、それぞれの主軸が 57 度の角度をもって重複する。双方には段差があって切り合っていることがわかった。新旧関係は、土層から FP068 が新しいと考えられる。出土遺物は、FP068 で条痕文系土器が主体で出土しており、当該時期の炉穴と考えられる。10 は内外面ともに条痕文が施された口縁部で、口唇部には斜状の刻みが施されている。繊維をあまり含まず、斜状に施された条痕文は明瞭である。

FP175 は第 7 炉穴群に近接した小規模な炉穴である。遺物は条痕文系土器が出土している。

FP200・313 は、調査区の中で最も北西で確認された炉穴である。火床同士が向かい合って重複する。当初、FP200 だけの炉穴を想定していたため、新旧関係を把握することができなかった。また FP313 では拡張して調査を行おうとしたが、直上には孟宗竹の根があって、全容を把握するまでにはいたらなかった。出土遺物はほとんどなく、FP313 の尖底部は確認面に近い位置からの出土である。

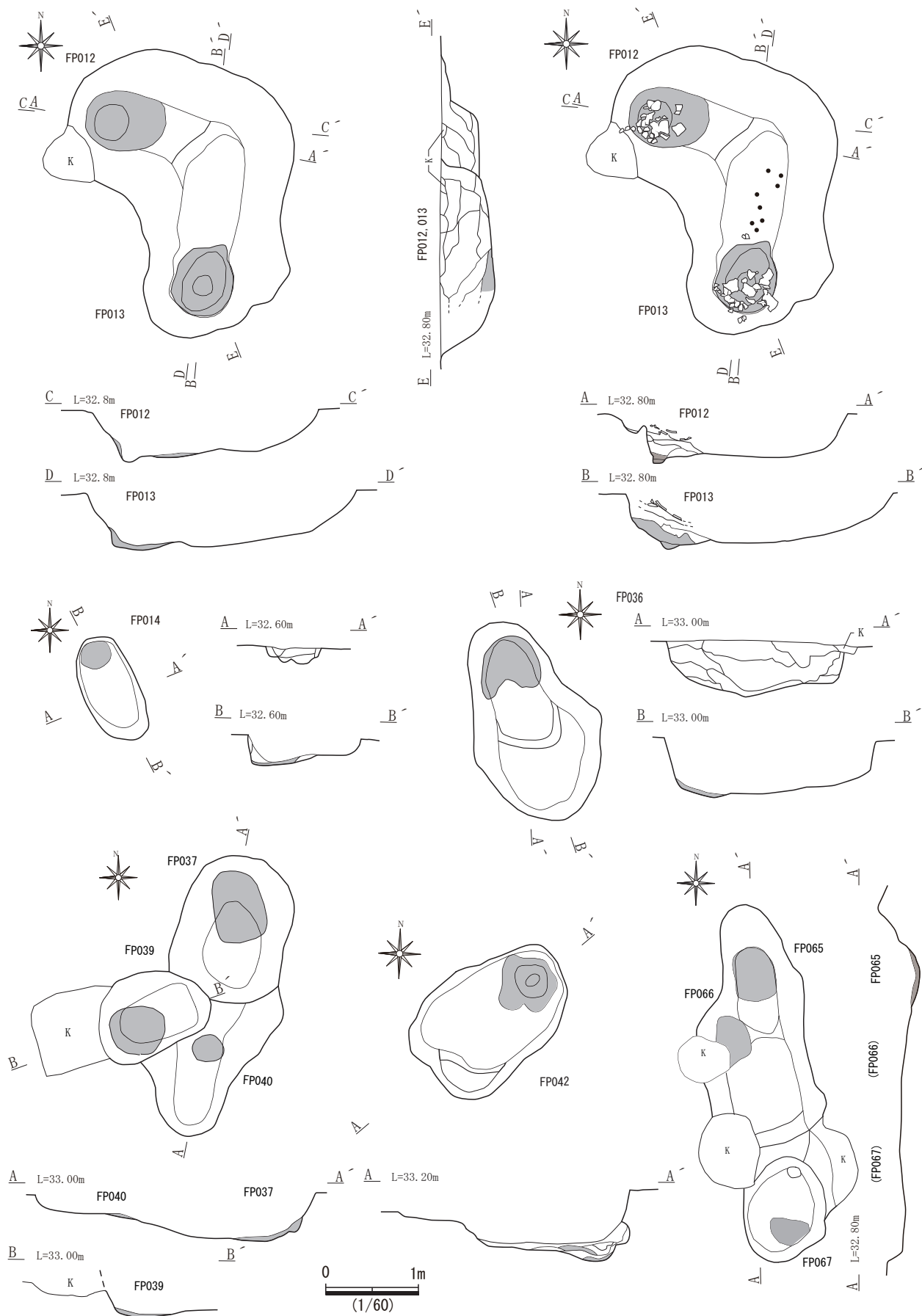
FP201 は、浅い掘り込みで、火床部分の赤化・被熱も弱い。遺物は条痕文系土器が出土している。

FP202 は、東西両側が攪乱で壊され、全容は不明である。火床部分のみの検出であるが、赤化・被熱が弱い。遺物は出土しなかった。

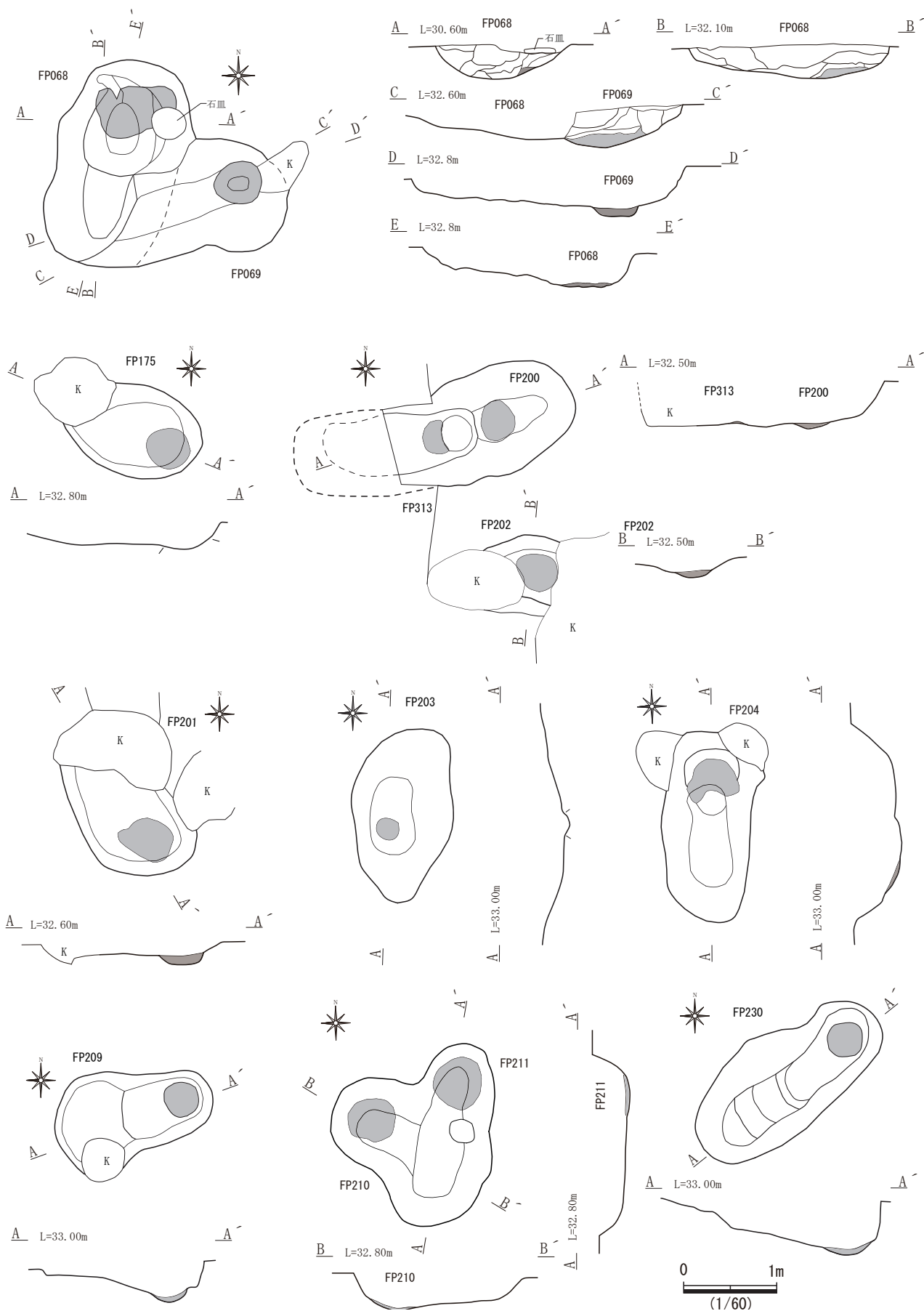
FP203 は、小規模な炉穴で、赤化・被熱部分の規模も小さくて弱い。遺物は条痕文系土器が出土している。遺物は条痕文系土器が出土している。

FP204 は、小規模な炉穴で、赤化・被熱も強くはない。遺物は無文土器が極少量出土している。

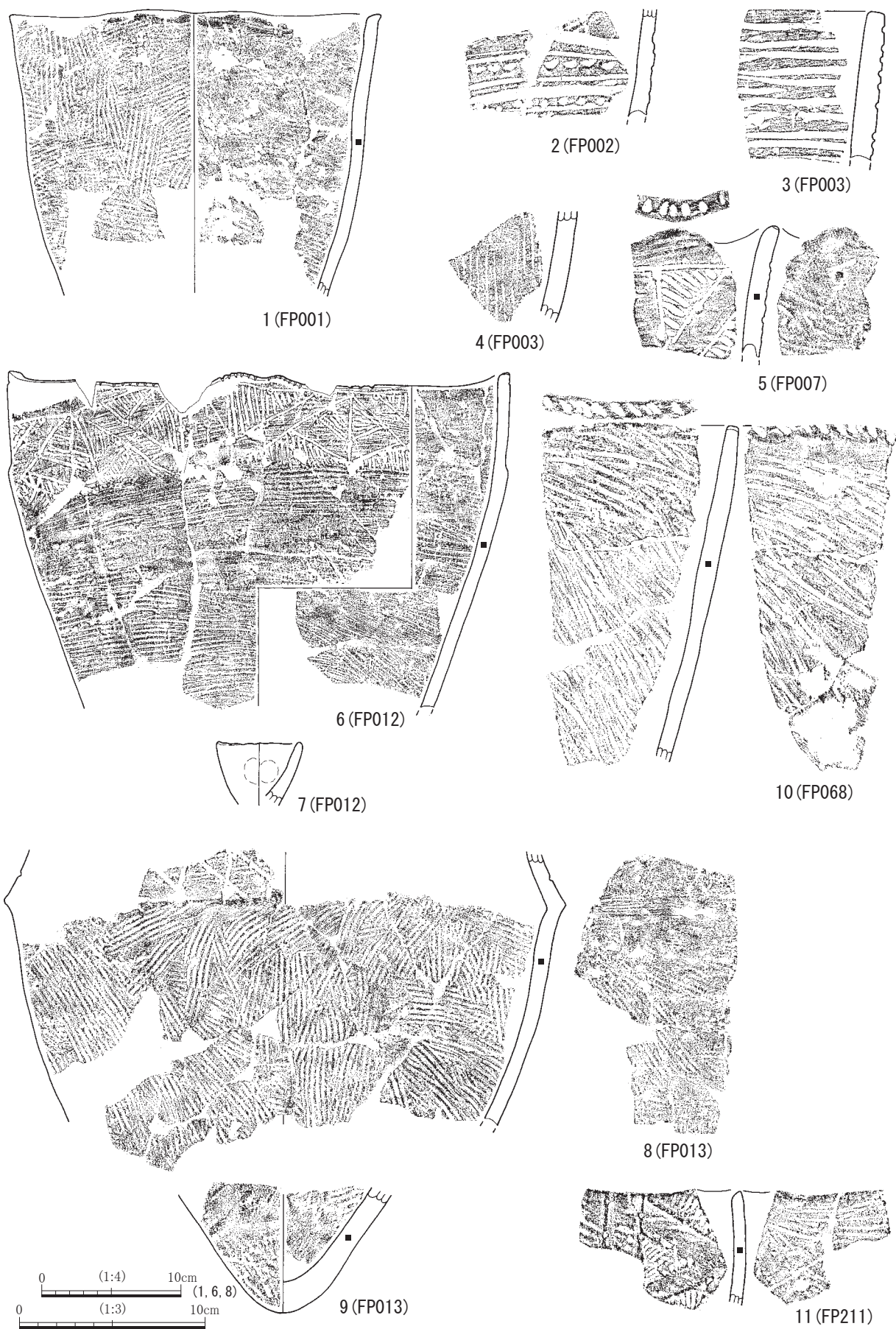
FP209 は、足場がやや広めで、火床に向かってやや急になる。遺物は条痕文系土器が出土している。14 は緩い波状をした口縁部で、直線的に立ち上がる。



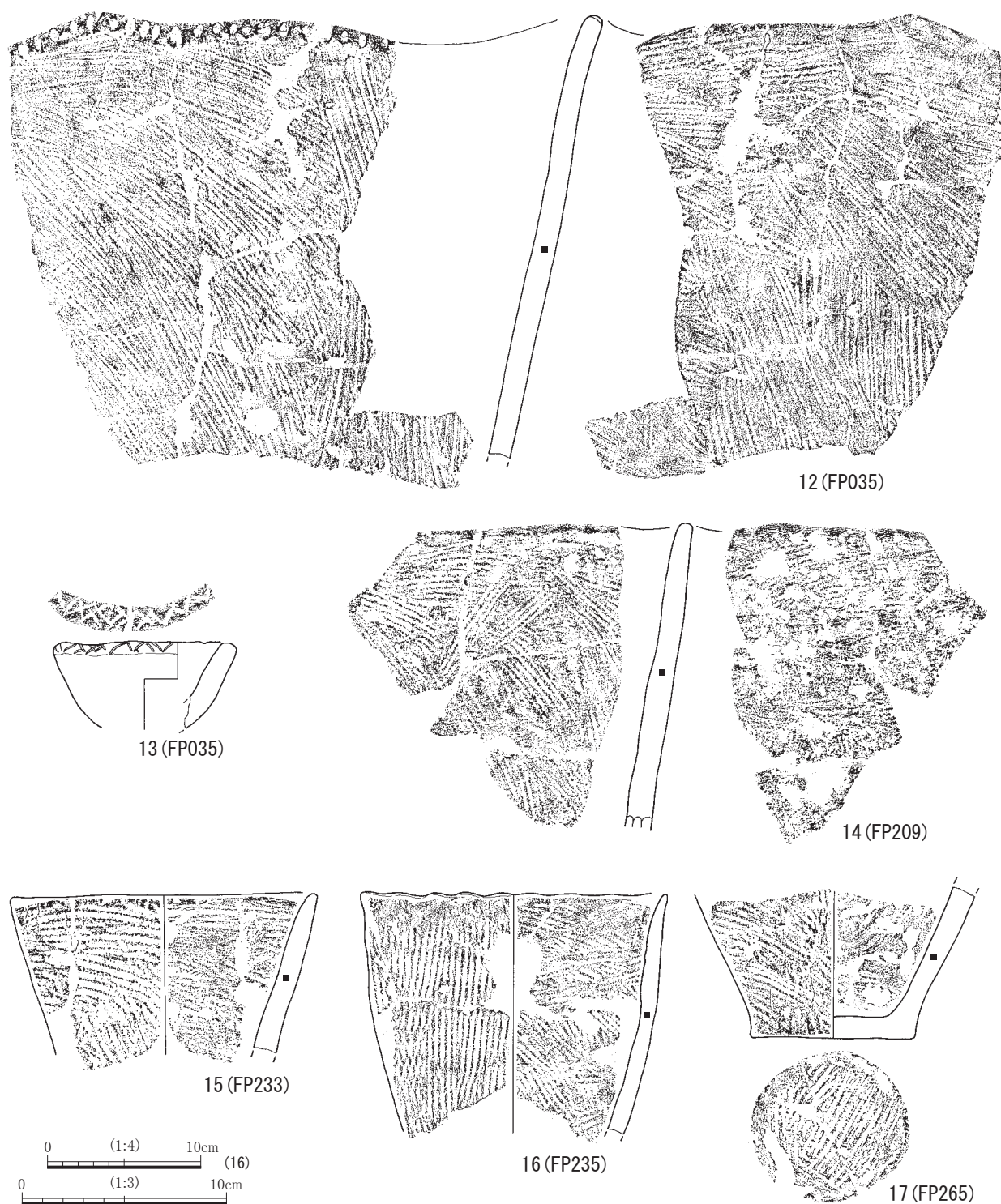
第 53 図 重複炉穴・単独炉穴実測図 (2)



第 54 图 重複炉穴・单独炉穴实测图 (3)



第 56 図 重複炉穴・単独炉穴出土遺物 (1)



第 57 図 重複炉穴・単独炉穴出土遺物（2）

FP210・211 は、それぞれの主軸が 81 度の角度をもって重複する。双方の足場は明瞭な段差を持たず、共有された可能性がある。遺物は条痕文系土器が極少量出土している。11 は緩い波状をした口縁部で、口唇部は打ち削ぎ状になり、細隆起線文で区画文が描かれている。区画内には沈線を充填したものと刺突文を充填したものが双方が認められ、区画文状にも刺突文がわず

かに加えられている。鶺鴒島台式と考えられるが、器壁も薄手でかなり古い様相である。

FP222 は焼土のみの確認である。東側を攪乱で壊されているが、掘り込みがあったかどうかは不明である。遺物は出土していない。

FP230 は、長楕円形で火床部分が深く、足場は角度を持ったスロープ状になる。足場には 2 つの段差も認

められる。遺物は条痕文系土器が主体で出土している。

FP231・233 はほぼ同じ形状、同じ規模の炉穴で並列し、その間に石皿を伴った FP232 が重複した炉穴である。第 11 炉穴群と近接して対峙した形になっている。遺物はいずれも条痕文系土器が主体で出土している。15 は FP233 からの出土で、やや小振りである。

FP234 は浅い炉穴で、赤化・被熱が弱い。遺物は小片が極少量出土するのみである。

FP235・332・333 は、各炉穴の火床が連続する形で重複している。FP333 の足場側は攪乱で壊されている。遺物が主に出土しているのは FP235 で、条痕文系土器が出土している。16 は口唇部に押圧が加えられた口縁部である。器壁が薄く、外面の条痕文が縦方向に施文されており、やや古い様相である。

FP240 は、不整形な浅い掘り込みに赤化・被熱の弱い小規模な火床が確認された。遺物は出土していない。

FP265・266・306 の重複は、深さや規模の違いから FP265 と FP266・306 に大きく分けられる。FP265 では掘り下げる課程で上層面に焼土が堆積し、下層部では焼土ブロックとロームブロックの混土層であったことを確認した。遺物は条痕文系土器が主体で出土している。17 の平底は底面にまで条痕文が施されていた。

FP267・307 の重複は、明らかに切り合っていることがわかる炉穴になるが、土層を確認しておらず、新旧関係は把握されなかった。遺物は、FP267 から条痕系土器が主体で出土し、FP307 からは出土していない。

FP302 は、小規模な炉穴であるが、底面全体に焼土が堆積していた。遺物は出土していない。

FP308 は、不整形な浅い掘り込みに赤化・被熱の弱い小規模な火床が確認された。遺物は出土していない。

FP318 は、周囲の掘り込みが消失し、火床のみの確認である。遺物は出土していない。

5. 土坑

土坑は、単独で確認されているものが 7 基である。その内、SK014 は、形状や覆土から木の根による攪乱と判断し、欠番とした。SK015 はかなり大型で、形状から風倒木痕の可能性がある。

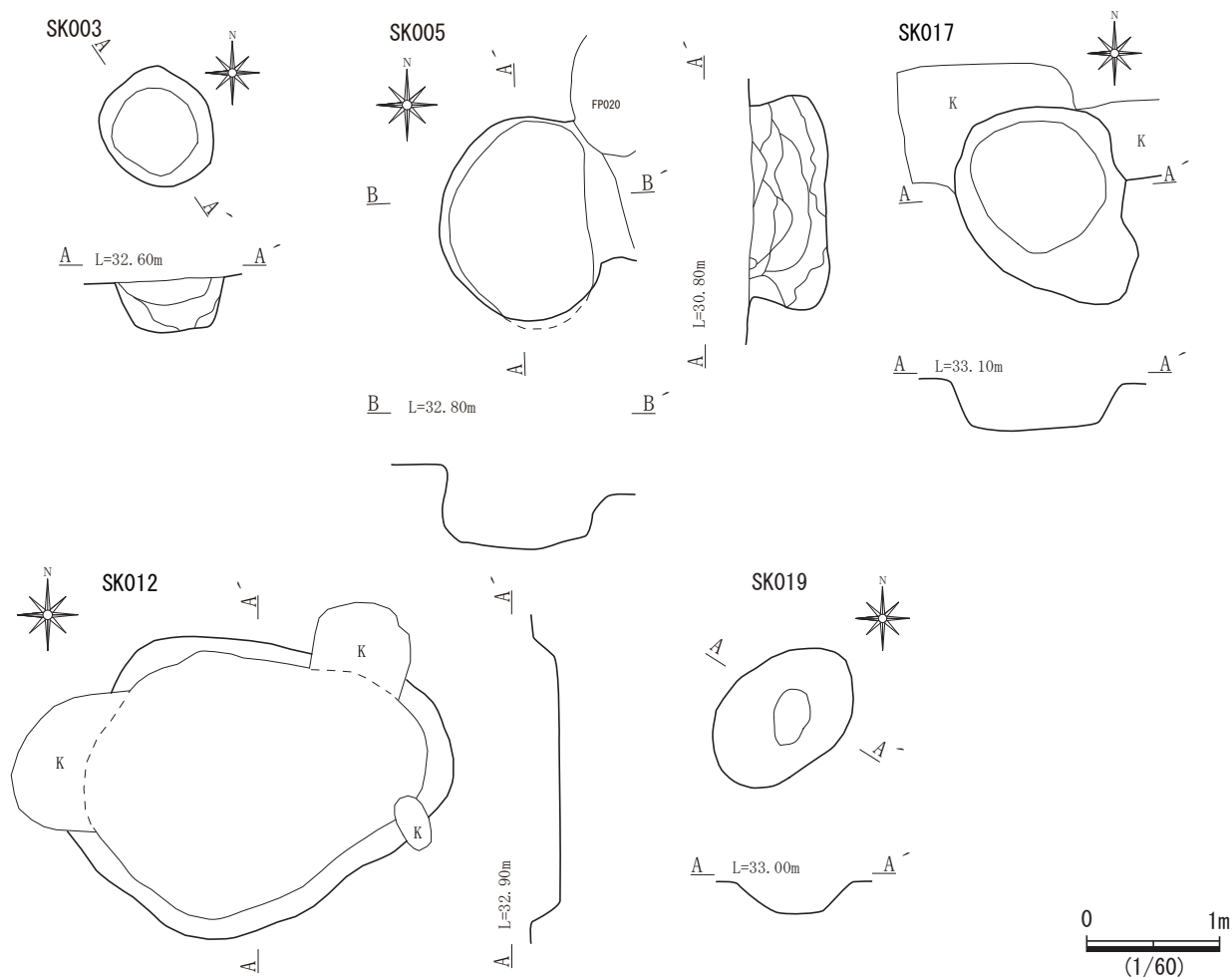
単独で確認された土坑の平面形状は、円形または楕円形のいずれかで、規模にはばらつきが認められる。位置は、SK003 以外調査区の北側に立地している。そ

うちで最も大きいものは SK012 である。掘り込みは浅かったが、遺物が比較的多く出土している。SK005 は最も深く、断面形状が袋状になる。当初、第 3 炉穴群と接しているため同炉穴群に含めていたが、切り合い関係を持たないことから単独の土坑として扱った。各土坑から出土している。

遺物は条痕文系土器を主体としていることから、当該時期の土坑と考えら、遺物が出土していない SK003・013・018 も、覆土の状態がほぼ一致しているため、同時期に使用された可能性がある。

それ以外は、炉穴群中で確認した土坑である。SK004 (第 52 図) は FP001 と重複した土坑で、炉穴の足場側にあつて、直線状に並んでいる。両遺構の切り合いについては土層にかからなかったため不明であるが、炉穴と関連した施設の可能性もある。SK007 (第 10 図) は第 1 炉穴群中にあり、FP005・038 の足場側に接して箱型に掘り込まれた極端に深い土坑である。所見については第 1 炉穴群の項に述べているが、炉穴に関連した施設とみて間違いのないであろう。SK008 (第 17 図) は第 4 炉穴群中にあり、箱状に掘り込まれていることから土坑として取り扱っていたが、北西側に存在する FP092・093 の火床とほぼ同じ高さで接し、足場側に足掛けのような段を有していることから、炉穴の足場と見るべきかもしれない。第 6 炉穴群の SK011 (第 24 図)、第 14 炉穴群の SK023・024 (第 44 図) は各炉穴群の端部にあり、火床を消失した足場の可能性も考えたが、円形状の掘り込みで底面が平坦であることから、土坑とした。SK023・024 は重複し、連なった状態で確認されている。第 4 炉穴群の SK022 (第 16 図)、第 5 炉穴群の SK024 (第 21 図)、第 6 炉穴群の SK019・020 (第 24 図) などは、炉穴群の中にある空間の部分を土坑として扱った。周囲に存在する炉穴は、火床のみ又は足場部分が極端に短いものが多く、足場の共有した部分であろうか。

遺物は炉穴群の出土状況と同じで、条痕文系土器を主体としており、各炉穴群に伴って使用された可能性が高い。SK008 から出土した 1 は、口唇部に刻みを持った口縁部片で、押引文による文様帯が施される。茅山下層式に比定される。2 は沈線文系土器で竹管文状工具による押捺が沈線間に充填されたもので、田戸下層式であろう。

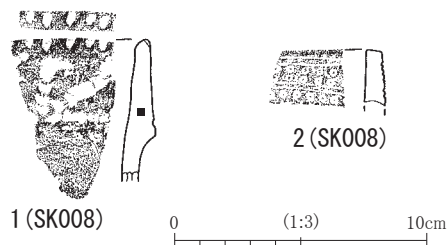


第 58 図 土坑実測図

6. 陥穴

陥穴は6基が確認された。形状はいずれも長楕円形で底部ほど先細りになる。規模をみると SK002 がかなりの深さを有していることが目を引く。他の陥穴より開口部が広がっているが、土層から両壁面のローム土が崩落していることがわかった。掘り込みが深い影響とみられる。SK010 は平面規模が他より小さめである。SK009 の開口部が狭いのは削平の影響を受けたものであろうか。位置は、SK016 以外は調査区の南側で確認されており、配置に規則性は認められない。炉穴と重複しているのは、SK001・006 が第2炉穴群と、SK016 が第9炉穴群である。第2炉穴群の遺構確認時に炉穴が赤みを帯びた暗褐色土を呈しているのに対し、陥穴表面は黒褐色土を基調としていることから、炉穴を陥穴が切り込んでいることが把握された。第9炉穴群と SK016 でも同様の状態を確認できた。

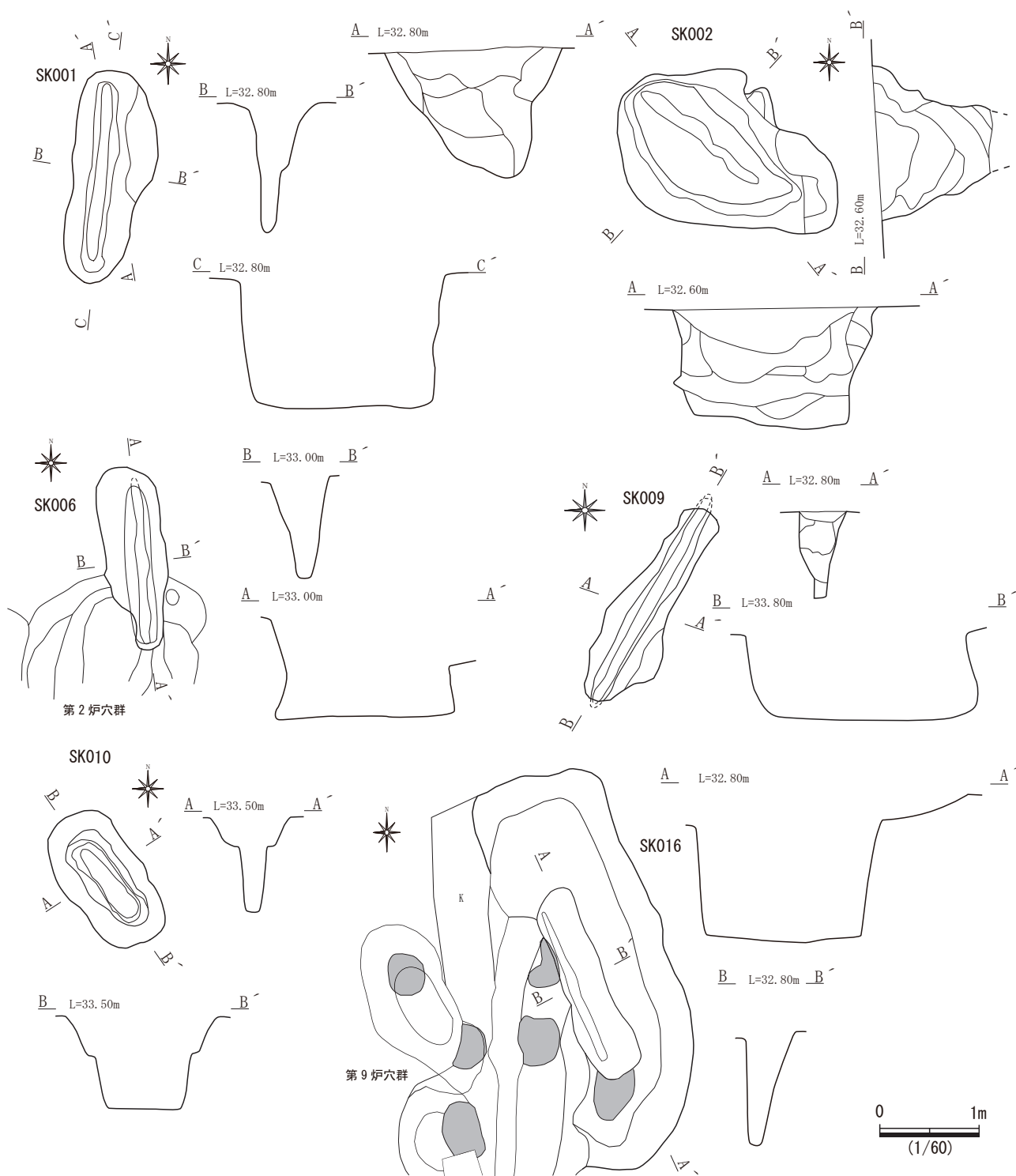
出土遺物は、縄文時代早期の遺物が主体となっているものの、SK001・002 などでは縄文時代前期の遺物



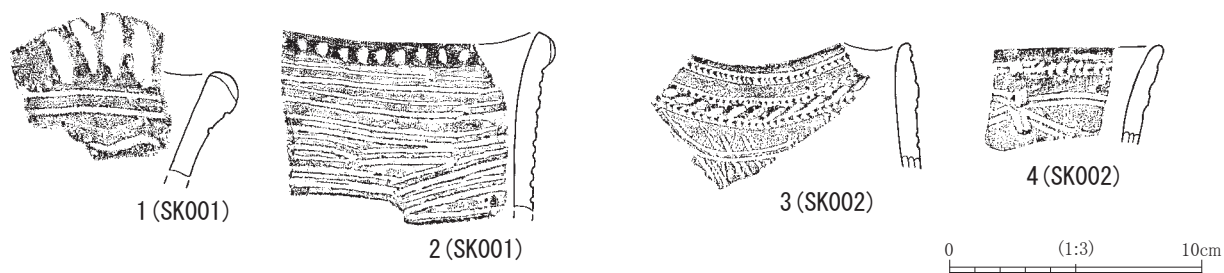
第 59 図 土坑出土遺物

も目立つ。SK002 では崩落層下の下層部、黒褐色土から縄文時代前期の遺物が出土し、当該時期の陥穴と判断される。遺物を伴わない陥穴であっても形状が SK002 と同様であることから、調査区内の陥穴は前期の所産ではないかと考えられる。

1・2 は SK001 から出土した遺物である。1 は波頂部に縦位の押圧を加え、平行沈線、波状沈線を施す。2 は平行沈線を密に施し、1・2 とともに諸磯b式と考えられる。3・4 は SK002 から出土した遺物である。1 の口縁部は、内湾する器形で、口縁部に斜状に刻みを持った浮線文と細い浮線文、曲線的な平行沈線が施



第 60 図 陷穴実測図



第 61 図 陷穴出土遺物

され、地文には単節 RL 縄文を施文している。2 は口縁部直下に刺突文を垂下させ、木葉文を横位に施している。1 は諸磯 b 式、2 は浮島 a 式に比定される。

7. 遺物包含層

(1) 遺物包含層の概要

寒沢遺跡 (8) 調査区における遺物包含層の存在は、試掘調査で指摘され、寒沢遺跡 (7) の調査でその範囲が明らかになった。遺物包含層は調査区の北側 E8・F8 グリッド以北に、5～15 cm 程の層厚で遺存していた。本来は、調査区全体に広がっていたとみられるが、調査区のほぼ中央に不自然な段があって、南側が明らかに削平されていることが調査前の現況からも見てとれた。段の北側部分でも宅地が建っていた影響で、所々に攪乱を受けた部分もある。

遺物包含層から出土した遺物は、縄文土器と石器・礫である。土器の総量は 1,910 点・32,351.8 g であった。時期別に見ると、早期が 1,831 点・28,397.2 g、全体の点数比 96%、重量比 88% を占める。次いで前期が 77 点・3,893.7 g で、全体の点数比 4%、重量比 12% に過ぎない。中・後期の土器にいたっては、2 点・60.9 g のみで、本調査区が縄文時代早期を主体とした遺跡であることが理解される。

早期の土器の内訳をみると、撚糸文系土器は 157 点・2,071.3 g が出土し、早期全体で点数比 9%、重量比 7% である。最古は稲荷台式土器で、他の形式は認められない。遺跡内で見れば他に FP220 から花輪台Ⅱ式とみられる土器 1 点と、FP082・083・117 から撚糸文系土器最終末に位置付けられる平坂式が 3 点出土している。

沈線文系の土器は 292 点・2,937.3 g が出土し、早期全体で点数比 16%、重量比 10% である。田戸下層式が主体となっているが、三戸式、田戸上層式も見受けられる。また、繊維を含まない無文土器は、胎土からこの時期のものと考えられる。

条痕文系土器は 1,382 点・23,388.6 g が出土し、早期全体で点数比 75%、重量比 83% を占め、早期の主体をなす土器群である。外面または内面にのみ条痕文を施した土器群も含めているが、そのほとんどが内外面ともに条痕文を施すものが圧倒的に多い。装飾を伴った野島式、鶺鴒島台式、茅山下層式も確認された

が、これに前後する子母口式と茅山上層式は認められなかった。ただ遺構内には茅山下層式の範疇として捉えた中には、かなり新しい要素を持ったものもある。そのほかに繊維を含んだ無文土器も認められる。

前期の土器で主に出土しているのは、諸磯 b 式、浮島Ⅰ・Ⅲ式が確認されている。全体的には諸磯 b 式の方が多く、先行する黒浜式の出土は 1 点のみであった。全体に出土量は少なく、ほとんどが小破片である。土器の分布傾向を概観すると、条痕文系の土器はほぼ全域で出土しているが、主に下位に遺構が存在する地点での出土量が多い。撚糸文系の土器は、出土量が少ないが、遺構の空白地点を主体に散見される。沈線文系の土器は条痕文系土器に伴って出土していることが多く、出土量は撚糸文系より多い傾向にある。

(2) 遺物包含層の出土土器

遺物包含層から出土した土器については、袖ヶ浦市内の中六遺跡の分類を参考にした。大別型式を「群」、細別型式ないし文様構成を「類」とした。

第Ⅰ群 撚糸文系土器

第1類 稲荷台式土器 (1～5)

本調査区で出土した撚糸文系土器のほとんどが、この型式に帰属する。ほとんどが撚糸文を縦位に施文したものを主体とし、他に縄文や、撚糸文・縄文施文後にすり消された無文の土器も認められる。

1 は撚糸文 R、2 は撚糸文 L、3 は細い撚糸文 R が施文されている。4 は無節 R 縄文で、5 は施文される原体が不明瞭であるが、やはり無節縄文であろうか。

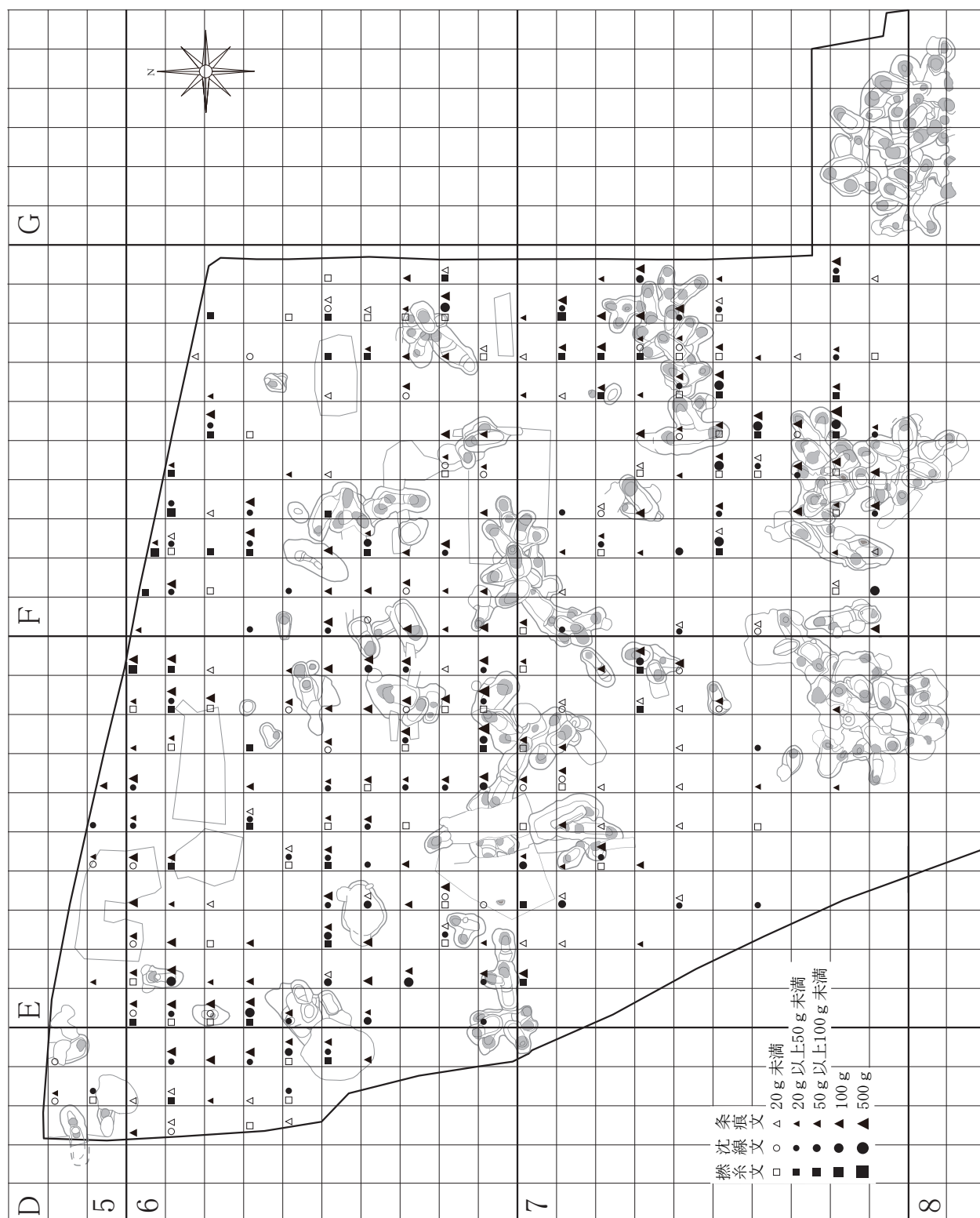
第2類 縄文原体側面圧痕文を施す土器 (6・7)

6・7 は縄文原体を用いて側面圧痕文が施された土器である。6 は胎土に砂粒を比較的多く含む。花輪台式に比定されるであろうか。この種類の出土量はわずかで、遺構内 FP220 出土のものを含めると 3 点確認した。

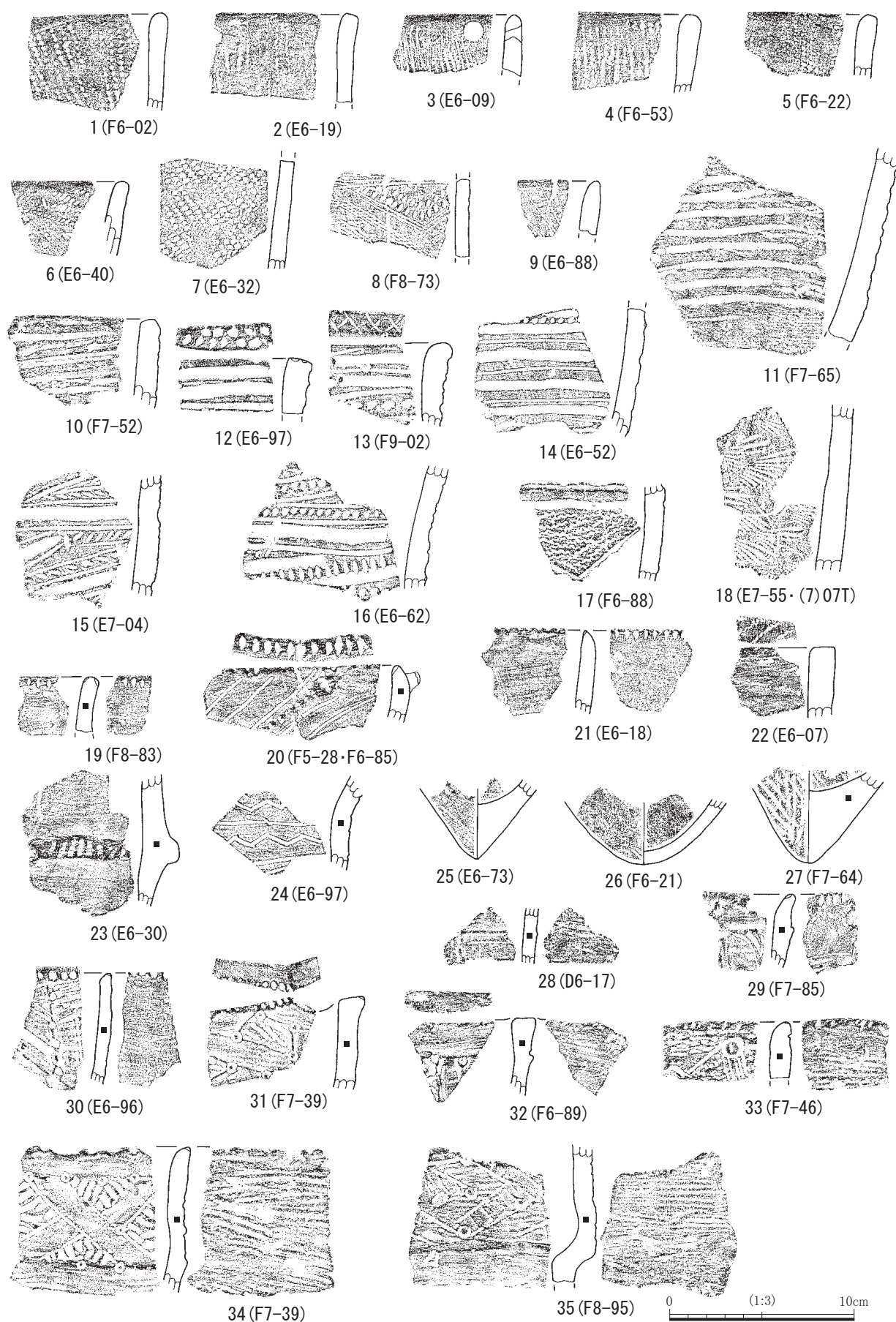
第Ⅱ群 沈線文系土器

第1類 三戸式土器 (8・9)

三戸式の出土は極わずかで、遺構内からの出土を含めても 5 点程度である。8 は平行沈線と帯状格子目文で文様を描出し、刺突文を加えている。薄手の器壁で色調はやや赤みを帯びる。9 は口唇部が打ち削ぎ状気味になる口縁部であるが、かなり細い沈線が平行に施されており、三戸式の範疇に収まるであろう。



第 62 図 遺物包含層・遺物出土状況図（土器）



第 63 図 遺物包含層出土遺物 (1)

第2類 凹線文を横位に施す土器 (10～12)

10～12は深めの凹線文を何重にも横走させている。胎土は、砂粒に微小礫や白色粒が含まれ、その多くは明るめの色調で橙色系をしている。本調査区で出土した沈線文系土器の中でも主体を占める土器で、遺構内からの出土も目立つ。10・12は口唇部が角頭状に仕上げられ、12では口唇部に刺突文が充填されている。11は底部付近の胴部で、無文帯は削り調整が認められ、内面には縦位のミガキが施される。いずれも三戸式から田戸下層式の範疇に収まるであろう。

第3類 凹線文と細い沈線が融合した土器

(13～16)

田戸下層式に比定される土器である。13の口縁部は器面を挟むような凹線文と細い沈線文が横走しており、丸みを持った口唇部には格子目文が施されている。14は浅めの凹線文と深めの細い沈線文を交互に施し、一部に細い沈線文が刺突列に替えられている。15は14の逆で、細い沈線文間に斜位の短沈線が施されている。16も細い沈線文間に刺突列が施され、刻みも加えられている。いずれも砂粒に細かい白色粒が含まれた胎土で類似しているが、15はやや砂粒が多く微小礫も含まれている。また、15のみ内面にミガキが認められない。

第4類 貝殻腹縁文を施す土器 (17)

17は太目の沈線文間に貝殻腹縁文を充填させている。第7炉穴群内 FP180 出土遺物 16 と同一の可能性はある。

第5類 貝殻表圧痕文を施す土器 (18)

18はE7-55と寒沢遺跡(7)第7トレンチ出土の土器が接合したものである。器面全体に圧痕文が充填される。胎土から田戸下層式と考えられる。

第6類 田戸上層式 (19～24)

19～21の口縁部は、口唇部内端に刻みを持つ土器である。19は外端部にも刻みが加えられている。19・21は無文であるが、20は斜位の沈線と隆帯が施され、隆帯上に貝殻腹縁文によって刻みが加えられている。22は口唇部が角頭状の口縁部で、口唇部には貝殻腹縁文が認められる。23は太い隆帯を施しているが、隆帯上には貝殻復縁文が加えられている。24は細い沈線で横位と鋸歯状の文様を描いている。20・24は胎土が精緻で内面はよくミガキがかけられ、同様の沈

線が施されていることから同一の可能性はある。ここでは図示しなかったが、寒沢遺跡(7)で図示した2・3のように無文の口縁部で、口唇部周囲に刺突文が加えられた土器が出土している。これらは色調が黄橙色系で、胎土に砂粒を多く含み、繊維も少量認められていることから田戸上層式の範疇に収まるであろう。

第7類 底部 (25)

25は尖底部である。削り取った擦痕から、丁寧に仕上げたことがわかる。

第Ⅲ群 条痕文系土器

第1類 野島式土器 (28)

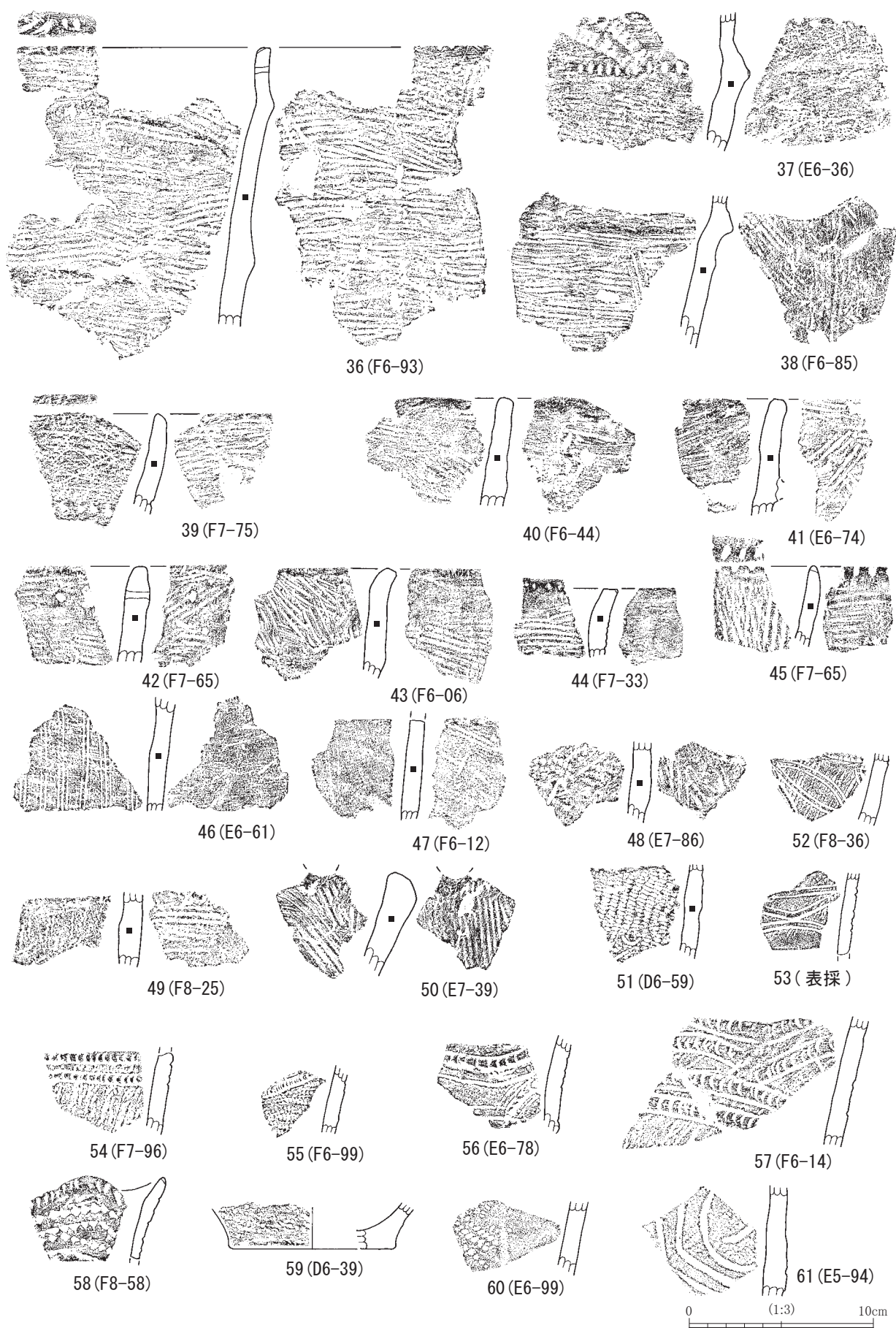
28は細隆起線で区画文を施した土器である。器壁も非常に薄く、内面に施された条痕文も浅い。遺物包含層中での出土はこの1点のみで、遺構内からも第6炉穴群 FP127、第7炉穴群 FP176 からなどからの出土が確認されているが、条痕文系土器全体から見れば極少量である。

第2類 鶯ガ島台式土器 (29～35)

29は口縁部直下を細隆起線で区画し、区画内に棒状工具を用いた沈線文が施されている。口唇部の内側に刻みが認められ、器壁の薄い歪んだ器形である。突起部であろうか。30も29と同様に器壁の薄い作りで、口唇部は棒状工具による刻みが施され、垂下する細隆起線文上には細かい捺押文が加えられている。外面の地文に条痕文がほどこされているが、内面には認められない。胎土には白色粒が目立つ。31～35は幾何状の区画文が描かれ、区画内には沈線もしくは刺突文が充填されており、区画文上には竹管文状工具による捺押文が加えられている。31・32の区画文は細隆起線文により描かれ、32は区画内に押引状の沈線を充填させている。31・32とも口縁部の作りは類似しているが、31は外端に刻みを持つ。33～35の区画文は沈線で描かれ、区画内の充填文は33が刺突文、34が沈線文、35が細い梯子状の沈線文である。33・35の竹管文はやや大きく、施文も雑である。

第3類 茅山下層式 (36～50)

36～38は段(屈曲部)を持った土器である。36は内外面ともに条痕文のみが施された土器であるが、二つの段を持つ。口唇部には刻みが施され、補修孔も穿たれている。胎土は繊維を多く含み、非常に脆い。37は段部に刻みが加えられ、段の上部には押引文による



第 64 図 遺物包含層出土遺物 (2)

装飾が施されている。38 は明瞭な段を持つ条痕文のみの土器である。繊維を多く含むが、焼成が良い。39 ～ 45 は内外面に条痕文をのみを施した口縁部である。39 は外面に刺突文を横走させ、浅い沈線が格子状に施されている。胎土には砂粒を多めに含んでいる。40 はやや緩い波状を呈している。41 は赤みの強い色調で、繊維を多量に含んでいる。42 は補修孔が穿たれている。43 は口縁部直下で外反する。44 は口唇部が平坦に作出され、外端に刻みを持つ。45 の口縁部の刻みは棒状工具が用いられ、薄手の作りである。条痕文が外面は縦位に、内面は横位に施されていることから、茅山下層式よりは古い時期のものかもしれない。46 は条痕文が縦位に施され、内面では擦痕文が認められる。47 ～ 49 は内面に条痕文が施されたものであるが、47 の外面は無文で擦痕文が認められ、48 の外面には縄文が、49 は外面に貝殻腹縁文が施されている。50 は、口縁部が窪みを持った土器で、湾曲せずに直線状の変形した形になるため、片口状の土器ではないかと考えられる。

第Ⅳ群 前期の土器

第1類 縄文土器 (51)

51 は単節 LR 縄文を施され、胎土は繊維を多量に含む。黒浜式と考えられる土器で、遺構内も含めて1点のみの出土である。

第2類 平行沈線文の土器 (53・54)

53 は平行沈線を用いて木葉文を施し、一部に細い爪形文も認められる。地文はまばらな撚糸文である。54 は細めの爪形文を複列横走させている。地文は太目の撚糸文が施文される。浮島Ⅰ式のものと考えられる。53・54 とともに丁寧な仕上がりである。

第3類 爪形文の土器 (55～57)

55～57 はいずれも爪形文の両側が沈線によって区画されたものである。55 は沈線間が細く、隣り合う爪形文が密接する土器で、地文には単節 RL 縄文が施文されている。胎土に微小礫が認められるが、薄手で内面はよく磨かれている。56 は地文が無文のものに隣接する爪形文が離れている。逆に57 では沈線間が広く、隣接する爪形文が比較的広い土器で、胎土には砂粒を多く含んでいる。

第4類 三角文の土器 (58)

58 は波状を呈した口縁部で、外面全体に三角文が

充填されている。口唇部外端にも三角文が施され、刻みを有したようにみえる。この1点のみの出土である。

第5類 底部 (59)

59 は平底の底部である。地文はまばらな撚糸文で底部下端まで斜状に施文されている。

第Ⅴ群 中期以降の土器

第1類 中期の土器 (60)

60 は磨滅が著しい土器であるが、幅広の沈線間を磨消した土器である。地文は縦位の単節 LR 縄文を施文する。中期後半の加曽利 EⅡ～Ⅲの範疇に収まるとみられる。中期の土器は、遺構内も含めて1点のみの出土である。

第2類 後期の土器 (61)

61 は地文縄文に渦巻状の沈線を施したもので、堀之内式と考えられる土器である。

8. 出土した石器・礫

(1) 遺構出土の石器 (1～4・10～12)

寒沢遺跡 (8) 調査区の各遺構から出土した石器は、石鏃4点・4.6 g、磨石9点・2,379.2 g、敲石1点・244.6 g、石皿4点・27,630.5 g、剥片25点・68.9 gであった。自然礫総量の3,219点・116,456.4 gの出土量に対して非常に少ない。

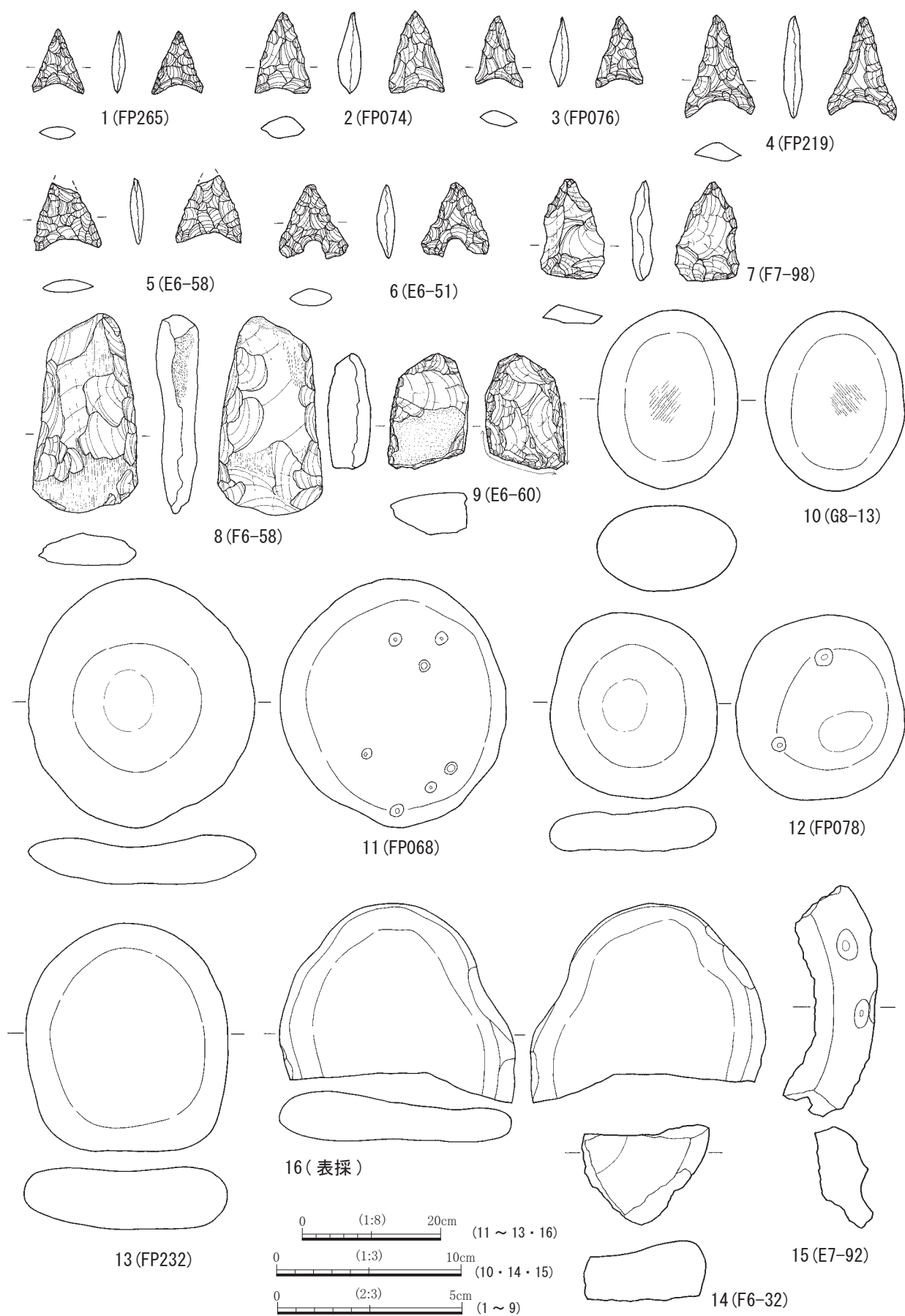
1～4 は石鏃で全て完形品である。1 で用いられている石材が黒曜石以外は、チャート製である。いずれも凹基無茎鏃に分類されるが、基部の挟りが浅い。

11～13 は大型の石皿で全て完形品である。いずれも同じ石材（多孔質の安山岩系）が用いられている。11 は出土した3個の石皿のうち最も大型のもので、凹部は浅く、凹部裏面には7箇所の窪みが認められた。FP068 の上面に凹部が伏せられた水平な状態で残置されていた。12 は他の2点と比べて小さく、凹部もあまり明瞭ではない。凹部側の縁に2箇所の窪みが認められた。第5炉穴群のFP078 足場側に、水平状態で残置されていた。13 は他の2点より形状が整っている。FP232 の上面で斜位に出土しているが、自然な埋没過程によるものと思われ、本来は水平状態に置かれていた可能性がある。

(2) 遺物包含層・遺構外出土の石器

(5～9・13～14)

遺物包含層から出土した石器は、石鏃3点・4.7 g、



第 65 図 出土石器

磨石 17 点・4059 g、打痕のある磨石 2 点・681.5 g、石皿 3 点・9,262.8 g、黒曜石の剥片が 15 点・50 g、チャートの剥片が 1 点・5.1 g であった。

5・6 は石鏃で、いずれも黒曜石が用いられ、凹基無茎鏃に分類される。5 は基部の挟りが浅いが、6 の挟入は他のものより深く、端部は丸みを持っている。

8・9 は打製石斧である。8 は刃部を局部的に磨いている。9 は自然面も残り、製作中に破損した部分と考えられる。

10 は被熱した磨石で、出土した磨石の中で唯一、両面に擦痕が認められたものである。

14・15 は石皿の破片である。14 の凹部は使用度が高いものであった。15 は皿部の大部分が欠損しているが、縁に 4 箇所の窪みが認められる。使用されている石材は多孔質な火成岩性のもので、調査区内ではほとんどみかけない材質である。

(3) 遺構内・遺物包含層出土の礫

調査区から確認された各遺構及び遺物包含層からは多数の礫が出土している。出土した礫の総数は遺構・遺物包含層を合わせて 3,221 点・117,373.8 g である。その内、完形礫は 1,229 点・50,351.8 g で欠損礫との比率は点数比 38%、重量比 43% である。

遺構内から出土した礫をみると、総量で 2,415 点・78,206.6 g、その内完形礫は 913 点・33,101.8 g で、欠損礫との比率は点数比 38%、重量比 42% である。

遺物包含層から出土した礫は、総量で 806 点・39,167.2 g、その内完形礫は 316 点・17,250.0 g で、欠損礫との比率は点数比 39%、重量比 44% となり、点数比に対して重量比が大きい傾向である。

出土した分布をみると、E6 グリッドの出土量が極端に多い。包含層が他のグリッド地点より厚く堆積しているためとみられる。次いで E7 グリッドになるが、こちらは包含層があまり厚くはないものの、攪乱の影響が少なかったためではないかと考えられる。

完形礫の大きさによる分類は中六遺跡を参考に、SS サイズ（～2.9 cm）、S サイズ（3.0～4.9 cm）、M サイズ（5.0～6.9 cm）、L サイズ（7.0～9.9 cm）、LL サイズ（10 cm 以上）に分けた。比率別でみると S サイズが最も多く、51% を占める。次いで SS サイズの 28% になり、全体に小さめの礫が主体である。しかし M サイズも 17% あり、L サイズ・LL サイズの 4% を含めると、大きめの礫も少ないとはいえない。また欠損礫の中に比較的大きいものが目立つのも特徴的である。遺構内からの出土礫では、SS サイズが S サイズとほぼ同じ割合にまで達し、大きめの礫は遺物包含層中ほど多くはない傾向が把握された。

石材別ではチャート・安山岩・石英斑岩・砂岩が主に出土しており、その中でチャートが最も多く見受けられた。サイズ別にみると、チャートは小サイズに集中し、安山岩・石英斑岩はサイズの大きいものに多い。一方で、遺物包含層からのチャートの出土量は少なめで、逆に安山岩・石英斑岩が多い傾向にある。大型の石皿で用いられているような多孔質安山岩は、礫の中ではほとんど認められなかった。

礫の状態であるが、完形礫・欠損礫ともに被熱したものが主体ではあったが、極端に赤化したものは少ない。遺構内よりも遺物包含層中からの出土した中に赤化の強い礫が目立つようである。

表 2 寒沢遺跡 (8) 出土礫一覧表

	完形礫		完形礫サイズ内訳					破損礫	
	個数	重量	SS 個数	S 個数	M 個数	L 個数	LL 個数	個数	重量
遺構内出土礫内訳									
炉穴	872	31928.6	374	386	103	6	3	1437	43439.5
土坑	41	1173.2	21	16	3	1	0	65	1665.3
合計	913	33101.8	395	402	106	7	3	1502	45104.8
遺物包含層出土礫内訳									
D5	3	124.1	2	0	0	1	0	2	423.3
D6	38	1631.6	10	22	5	1	0	24	1327.3
E5	0	0.0	0	0	0	0	0	1	9.0
E6	152	8509.9	35	87	27	3	0	215	9479.1
E7	23	1233.4	8	10	3	2	0	38	1995.2
F6	35	1933.3	12	14	8	1	0	52	2237
F7	65	3817.7	22	27	11	4	1	158	6446.3
合計	316	17250.0	89	160	54	12	1	490	21917.2
総合計	1229	50351.8	484	562	160	19	4	1992	67022.0

9. 炉穴出土貝類の分析

(1) 分析の方法

寒沢遺跡(8)では、7基の炉穴からいずれも茅山下層式期の所産と思われる貝層が検出された。検出状況をみると、FP055、090、117、162、241は覆土上～中層で検出されたのに対し、FP161、163は底面付近で検出された。また、FP241はやや間層を挟み上下2層に貝層が分かれるようであるが、それ以外はほぼ一括して廃棄されたような状況を呈する。各貝層は土ごとすべて取り上げられており、比較的貝層が厚く堆積していたFP090、162、241は任意の高さで分層して取り上げられ、それ以外は一括して取り上げられている。

貝層の分析は、まず9.5・4・2・1・0.5mmメッシュのフルイを用いて水洗を行い、フルイごとに選別を行った。2枚貝は蝶番が半分以上残存しているものに関して種の同定及び左右の判定を行い、それぞれの個体数の集計と重量を計測し、それ以外は破片として重量のみを計測した。巻貝は口が残っているものについて種の同定を行い、個体数の集計と重量を計測し、それ以外は破片として重量のみを計測した。2枚貝の最少個体数は左右の個数で多い方を採用した。その後、計測可能な個体について、マガキ以外の2枚貝については左殻の殻長、マガキは左殻の殻高、巻貝は殻高を計測した。集計結果は表にまとめ、遺構別及び遺跡全体の個体数の割合についてはグラフにまとめた。

なお、微小貝については、各メッシュのフルイで回収されたものの他に、0.5mmメッシュから漏れてしまったものも含め、水洗時に確認できたものについては回収している。これらについては、先に刊行された中六遺跡(12)で検出された微小貝と併せて、改めて分析を行う予定である。

(2) 分析の結果

選別の結果確認された種は表3のとおりである。殆どが鹹水産の貝類で、獣魚骨は確認されなかった。

検出された貝層に含まれる貝の個体数及び重量を見ると、FP162が圧倒的に多く、FP090、161、163、241が比較的多く、FP055、FP117は少ない。

遺構別に貝類組成の個体数割合を示したのが第66図である。FP055は8割以上がハイガイで、わずかにハマグリ、オオノガイ、ツメタガイが含まれる。

FP090はマテガイが6割弱を占め、マガキが2割程、ハイガイが1割弱含まれ、その他ハマグリ、アサリ、オオノガイ、カガミガイ、オキシジミ、ウネナシトマヤガイ、ツメタガイ、アカニシ、アラムシロがわずかに含まれる。カガミガイはFP090のみで個体として把握されている。FP117はハイガイが9割を占め、その他マガキ、シオフキ、オキシジミが若干含まれる。FP161はマガキが9割を占め、ハマグリ、シオフキをわずかに含み、ウネナシトマヤガイ、イタボガキ?、アラムシロをごくわずかに含む。FP162はアサリが8割弱を占め、シオフキが1割強、ハマグリが1割弱含まれる。その他マガキ、マテガイが一定量含まれ、ハイガイ、オオノガイも少量含まれる。また、オキシジミ、ウネナシトマヤガイ、イボウミニナ、ツメタガイ、アカニシ、アラムシロをわずかに含む。イボウミニナはFP162のみで個体として把握されている。FP163はマガキが7割弱を占め、ハマグリが約2割、ハイガイが2割弱を占める。その他、シオフキ、アサリ、ウネナシトマヤガイがわずかに含まれる。FP241はマガキが8割弱を占め、マテガイが約1割、オキシジミが1割弱を占める。その他、ハマグリ、ハイガイ、シオフキ、アサリ、ウネナシトマヤガイをわずかに含む。

個体数の多寡はあるもののすべての貝層にハイガイが含まれ、またFP117以外はハマグリ、ウネナシトマヤガイが含まれ、FP055以外はマガキ、シオフキが含まれる。

遺構ごとの貝類組成を見ると、ハイガイを主体とするもの、マガキを主体とするもの、それ以外に3分される傾向にある。FP055、117はハイガイを主体とし、FP161、163、241はマガキを主体とする。FP090はマガキを一定量含むものの、マテガイが主体となり、FP161、163、241とは異なる。FP162もハイガイ、マガキは含むものの比率は著しく低く、アサリの比率が著しく高くなる。これら主体となる貝類の相違は、検出された貝の個体数及び重量と関係性があるものと推測される。すなわち、検出個体数及び重量が少なかったFP055、117はハイガイが主体となり、検出個体数及び重量が比較的多かったFP161、163、241はマガキが主体となり、検出個体数及び重量が多かったFP090、FP162はそれぞれマテガイ、アサリを主体とする。FP162のアサリの多さは特筆するものである。

これらの貝類は砂泥質底に生息するものを主体としつつ砂質底に生息するものも含まれる。

次に貝類の計測について、貝層ごとの比較がある程度可能なハイガイ、マガキ、ハマグリについて見てみる（表 4）。ハイガイは、FP055、090、117、161、241 については概ね平均 3 cm ほどの殻長を測るのに対し、FP162 は平均 2.5 cm ほどと小さく、FP163 は平均 3.6 cm ほどの大きい個体が含まれる。マガキについてはばらつきが大きい、概ね殻高 4 cm を超える個体が認められる。ハマグリは、FP162 は平均 5 cm ほどを測るのに対し、FP163 は平均 4 cm ほどを測る。その他、FP162 で多量に検出されたアサリは平均 4 cm ほどを測り、シオフキは平均 4 cm 弱を測る。

最後に本遺跡の東方約 2 km に位置する中六遺跡から検出された貝層と比較を行ってみる。中六遺跡では、9 基の炉穴から 12 の貝ブロックが検出された。遺跡の主体的な時期である子母口式期の所産である可能性が指摘されている。検出された貝種はハイガイを主体とし、マガキがそれに続き、その他の種については検出量が少ない。ハイガイの殻長は平均 2.5 cm を測る。

表 3 寒沢遺跡 (8) 出土貝類種名一覧表

綱名	目名	科名	和名	学名
腹足綱	中腹足目	ウミニナ科	ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i>
		タマガイ科	ツメタガイ	<i>Glassaulax didyma</i>
	新腹足目	アクキガイ科	アカニシ	<i>Rapana venosa</i>
		ムシロガイ科	アラムシロガイ	<i>Reticunassa festiva</i>
掘足綱	ツノガイ目	ツノガイ科	ツノガイ科種不明	Dentaliidae gen. & sp. Indet.
二枚貝綱	フネガイ目	フネガイ科	ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i>
	ウグイスガイ目	イタボガキ科	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
			イタボガキ科種不明	Ostreidae gen. & sp. Indet.
	マルスダレガイ目	バカガイ科	シオフキガイ	<i>Mactra quadrangularis</i>
		マテガイ科	マテガイ	<i>Solen strictus</i>
		フナガタガイ科	ウネナシトマヤガイ	<i>Trapezium liratum</i>
		マルスダレガイ科	カガミガイ	<i>Phacosoma japonicum</i>
	アサリ		<i>Ruditapes philippinarum</i>	
	ハマグリ		<i>Meretrix lusoria</i>	
	オキシジミ		<i>Cyclina sinensis</i>	
	オオノガイ目	オオノガイ科	オオノガイ	<i>Mya arenaria oonogai</i>
	計	12 科	16 種	

両遺跡の貝組成を比較すると、中六遺跡の貝類組成はハイガイに特化しているのに対し、寒沢遺跡の貝類組成はハイガイを含むものの、より多様な組成を呈する。アサリが非常に多く検出されたことも大きな特徴といえるだろう。ハイガイの殻長を見ると、中六遺跡よりも寒沢遺跡の方がやや大きい個体が含まれる。これらの差異の要因は今後の分析によるが、仮に細かな時期差によるとすれば、より温暖化が進み、いわゆる縄文海進が進展したと思われる茅山下層式期になると、多様な貝類が生息可能な環境となり、それらの資源を利用した結果、寒沢遺跡では多様な貝類組成を有する貝層が形成されたのではないだろうか。

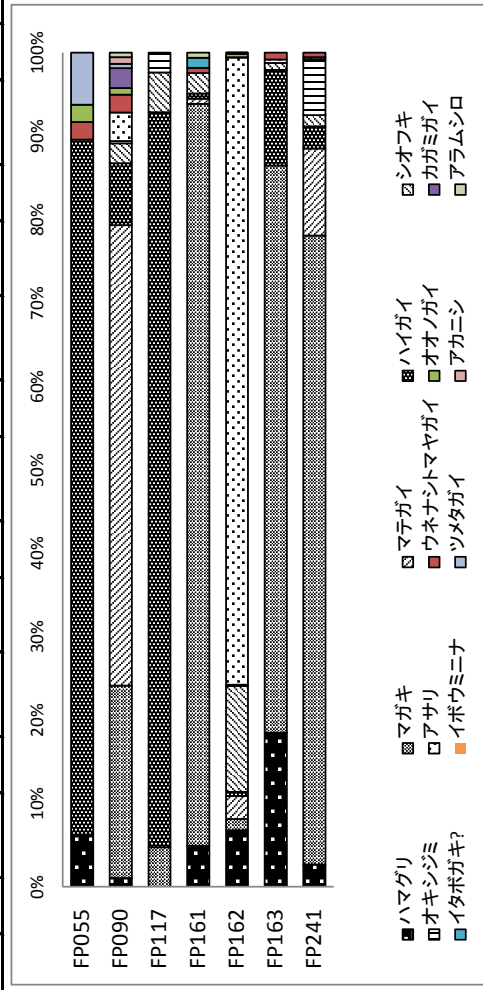
紙数の制限から今回は寒沢遺跡の貝層の概要のみの報告となったが、今後中六遺跡の微小貝も含め、詳細な分析を行っていきたい。

表 4 寒沢遺跡 (8) 遺構別貝類出土数

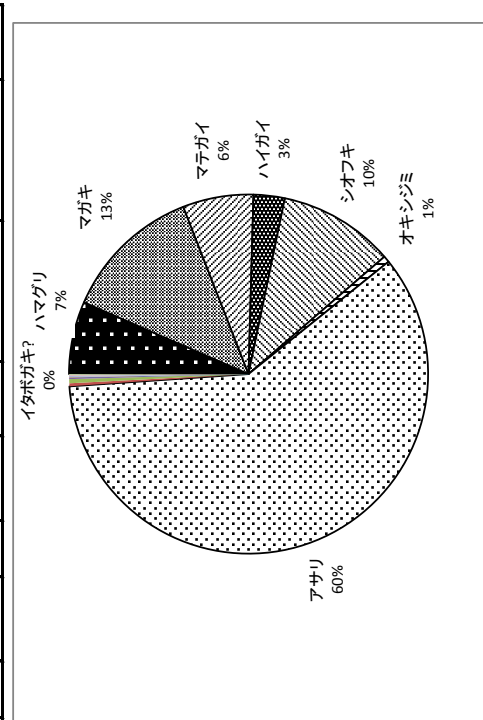
遺構名	ハマグリ				マガキ				マテガイ				ハイガイ				シオフキ				
	左 点数	左 重量(g)	右 点数	右 重量(g)	最少 個体数	左 点数	左 重量(g)	右 点数	右 重量(g)	最少 個体数	左 点数	左 重量(g)	右 点数	右 重量(g)	最少 個体数	左 点数	左 重量(g)	右 点数	右 重量(g)	最少 個体数	
FP055	1	1.8	3	9.52	3										40						
FP090	4	24.61	2	15.38	4	87	318.74	77	417.44	87	194	21.16	208	109.78	40	28	1	4.07	9	42.39	
FP117						1	3.1	2	11.02	2					37	31			2	4.4	
FP161	8	38.88	1	3.45	8	145	540.78	79	406.58	145	1	0.07	1	2.75	1	1			4	1.91	
FP162	319	2156.72	307	2270.86	319	63	115.36	43	117.77	63	126	30.39	130	26.01	23	50.44	23	1060.85	597	1701.18	
FP163	45	135.87	42	113.72	45	166	448.6	97	435.17	166					28	125.93	26	105.97	2	8.98	
FP241	8	6.86	10	6.3	10	282	600.36	119	346.11	282	16	1.4	39	3.66	39	10	5	11.22	3	5.39	
合計	385	2364.74	365	2419.23	389	744	2026.94	417	1734.09	745	337	53.02	377	56.07	378	142	481.12	157	502.57	617	1764.25

遺構名	オキンジミ				アサリ				ウネナントマヤガイ				オオノガイ				カガミガイ			
	左 点数	左 重量(g)	右 点数	右 重量(g)	最少 個体数	左 点数	左 重量(g)	右 点数	右 重量(g)	最少 個体数	左 点数	左 重量(g)	右 点数	右 重量(g)	最少 個体数	左 点数	左 重量(g)	右 点数	右 重量(g)	最少 個体数
FP055															1					
FP090	1	7.42	1	6.36	1	13	57.96	12	11.14	13	8	0.25	7	0.49	8	2	17.45	3	19.39	3
FP117	1	1.79																		
FP161															0	1				
FP162	5	13.69	7	35.05	7	3478	7568.77	3532	7763.86	3532	2	0.15	1	0.02	2	18	23.84	13	12.91	18
FP163						1	4.58	1	6.56	1					2					
FP241	22	27.28	25	96.47	25	1	0.3			1	2	0.11	2	0.18	2					
合計	29	50.18	33	137.88	34	3493	7631.61	3545	7781.56	3547	12	0.51	14	0.7	16	21	42.75	16	32.3	22

遺構名	イタボガキ?				イボウミナ				ツメタガイ				アカニシ				アラムシロ				その他				破片				合計				水洗前				混具率 (%)					
	左 点数	左 重量(g)	右 点数	右 重量(g)	最少 個体数	左 点数	左 重量(g)	右 点数	右 重量(g)	最少 個体数	左 点数	左 重量(g)	右 点数	右 重量(g)	最少 個体数	左 点数	左 重量(g)	右 点数	右 重量(g)	最少 個体数	左 点数	左 重量(g)	右 点数	右 重量(g)	最少 個体数	左 点数	左 重量(g)	右 点数	右 重量(g)	最少 個体数	左 点数	左 重量(g)	右 点数	右 重量(g)	最少 個体数	左 点数	左 重量(g)	右 点数	右 重量(g)	最少 個体数		
FP055																																										
FP090																																										
FP117																																										
FP161																																										
FP162																																										
FP163																																										
FP241																																										
合計	0	0	2	0.02	2	2	2.62	2	2.62	2	7	49.85	7	4	202.58	4	5	0.66	5	20.64	21759.25	5946	50420.99	106463.56	47%																	



第 66 図 遺構別貝類組成 (個体数割合)



第 67 図 遺構全体貝類組成 (個体別割合)

表 5 寒沢遺跡 (8) 貝類計測表 (単位: mm)

ハマグリ殻長

	FP090	FP162	FP163
-5			
-10			
-15			
-20			
-25			
-30			
-35		1	5
-40		6	5
-45		21	7
-50	1	49	1
-55		49	4
-60		36	
-65		8	
-70		1	
試料数	1	171	22
平均	46.2	50.8	41.4
標準偏差		6.2	6.8
最大	46.2	65.1	50.9
最小		34.9	30.3

シオフキ殻長

	FP090	FP162
-5		
-10		
-15		
-20		
-25		
-30		2
-35		27
-40		99
-45	1	39
-50		12
-55		1
-60		
-65		
-70		
試料数	1	180
平均	41.4	38.5
標準偏差		4.2
最大	41.4	50.1
最小		26.4

アサリ殻長

	FP090	FP162	FP163
-5			
-10			
-15			
-20			
-25			
-30		11	
-35	1	83	
-40		314	
-45	2	345	1
-50	2	97	
-55	2	6	
-60			
-65			
-70			
試料数	7	856	1
平均	45.4	40.1	40.1
標準偏差	6.5	4.4	
最大	51.7	52.7	40.1
最小	34.6	27.2	

オキシジミ殻長

	FP090
-5	
-10	
-15	
-20	
-25	
-30	
-35	
-40	
-45	
-50	1
-55	
-60	
-65	
-70	
試料数	1
平均	49.7
標準偏差	
最大	49.7
最小	

カガミガイ殻長

	FP090
-5	
-10	
-15	
-20	
-25	
-30	
-35	
-40	
-45	
-50	
-55	
-60	3
-65	2
-70	
試料数	5
平均	59.5
標準偏差	2.5
最大	61.5
最小	57.3

ハイガイ殻長

	FP055	FP090	FP117	FP161	FP162	FP163	FP241
-5							
-10							
-15					2		
-20		2			1		
-25	2	5	4		4		1
-30	3	3	5				3
-35	5	4	4	1	1	9	2
-40	4	5	2		2	10	1
-45	4	2	2			4	
-50		2					
-55							
-60							
-65							
-70							
試料数	18	23	17	1	10	23	7
平均	33.9	31.6	30.4	30.2	24.0	36.4	29.6
標準偏差	6.4	8.8	6.4		8.7	3.6	4.5
最大	44.9	48.8	40.7	30.2	39.8	42.2	39.5
最小	23.7	15.7	21.3		11.7	30.6	22.6

ウネナシトマヤガイ殻長

	FP162
-5	
-10	
-15	1
-20	
-25	
-30	
-35	
-40	
-45	
-50	
-55	
-60	
-65	
-70	
試料数	1
平均	11.7
標準偏差	
最大	11.7
最小	

ツメタガイ殻高

	FP055	FP162
-5		
-10		
-15		
-20		1
-25	1	
-30		
-35		
-40		1
-45		
-50		
-55		
-60		
-65		
-70		
試料数	1	2
平均	21.5	27.3
標準偏差		10.0
最大	21.5	39.1
最小		15.4

マガキ殻高

	FP090	FP161	FP162	FP163	FP241
-5					
-10					
-15					
-20					1
-25					1
-30					10
-35					5
-40	2	3	1		13
-45	2			1	10
-50	2	1	2		12
-55	6	2	1	1	8
-60	3			1	6
-65	2	1		2	1
-70	1	1		2	1
-75	2	2		1	1
-80		2		1	
-85		1		1	1
-90		1			
-95		2		1	
-100	1	4			
-105					
-110		1			
-115					
-120		1			
試料数	21	22	5	11	70
平均	56.1	64.8	48.5	67.1	43.0
標準偏差	13.4	46.1	6.6	13.4	12.0

アカニシ殻高

	FP090	FP162
-5		
-10		
-15		
-20		
-25		
-30		
-35		
-40		
-45		
-50		
-55		
-60		
-65		
-70		1
-75		
-80		
-85	1	
-90	1	
-95		
試料数	2	1
平均	87.8	66.0
標準偏差	2.5	
最大	90.5	66
最小	85	

ウミナシ殻高

	FP162
-5	
-10	
-15	
-20	
-25	
-30	
-35	2
-40	
-45	
-50	
-55	
-60	
-65	
-70	
試料数	2
平均	30.9
標準偏差	0.0
最大	31.6
最小	30.1

アラムシロ殻高

	FP055	FP162
-5		
-10		
-15	1	2
-20		
-25		
-30		
-35		
-40		
-45		
-50		
-55		
-60		
-65		
-70		
試料数	1	2
平均	11.3	13.2
標準偏差		10.0
最大	11.3	14.7
最小		11.7

IV. 総括

寒沢遺跡(8)では、縄文時代早期後半の条痕文期に帰属した炉穴が重複し、群を形成して大規模に展開することが明らかになった。袖ヶ浦市では、過去に中六遺跡(12)の調査で、炉穴237基を検出した例はあるが、今回の調査ではそれを上回る334基にのぼっている。

寒沢遺跡(8)の炉穴群は、調査区のほぼ全域で確認できるが、全体の分布状況を概観すると、調査区の中央部に集中しており、南と北の方向に向かって徐々に減少し、まばらになる傾向が把握された。炉穴群は第1・3・4・5・7炉穴群がひとつの環状をなし、さらにその外側では第2・6・12・14・9・10炉穴群がもうひとつの大きな環状になっているようにも捉えられる。また、重複する炉穴数からみても、基数の多い炉穴群は中央部のE7・F7・F8・G8グリッドに集中し、10基以下の炉穴群になると調査区北側E6・F6グリッドと南側F9グリッドに分散していることがわかる。特に南寄りの第3炉穴群から第7炉穴群は炉穴の集中する密度が高く、大型で深い炉穴を中心にして広がる特徴がうかがえる。一方、北寄りの第8炉穴群から第15炉穴群では、規模が小さく浅い炉穴で構成されており、南寄りの炉穴群とは構造に明らかな差異が認められた。

炉穴の構造による違いは、群を形成するひとつの炉穴群の中においても確認することができる。調査区内で最も大規模な第6炉穴群を例にとると、重複する基数87基の中で複数の形態に分類することが可能である。核となる炉穴を中心に放射状に広がるもの、形態を同じくする炉穴が連続したもの、土坑状の窪みに接続して派生するもの、一定箇所に密集し重複しているものなど、様々な形態がみられた。炉穴群内には地山が島状に残っていることや埋没した後に再度構築した状況も認められることから、造り替えがしばしば行われていたようである。おそらくは一時期に形成されたものではなく、3～5基程度の単位で使用され、長期間繰り返されることで結果的に大規模化したと考えられる。本遺跡では条痕文期の土器が主体となるが、器面に施される条痕文は変化に富み、時間幅を持つことが想定される。出土遺物からも長期間の使用が裏付けられることができる。

各炉穴・炉穴群からは、擦糸文系土器、沈線文系土器も出土しているが、主体となる出土遺物は条痕文系土器であった。条痕文系土器には、野島式期から茅山下層式期までが出土し、特に鶯ガ島台式期・茅山下層式期で占められていた。鶯ガ島台式期の中には野島式期の要素を残す土器群があり、茅山下層式の中にはかなり新しい要素を持つ土器があり、幅広い時期の様相を示している。なお、野島式前段階の子母口式期や、茅山下層式に後続する茅山上層式期段階の早期末葉～前期初頭のものは出土していない。これら出土遺物の状況から、寒沢遺跡(8)における炉穴群の稼動時期は、野島式期に出現し、鶯ガ島台式から茅山下層式期にかけて盛期を迎え、茅山下層式の終末段階には終息していったことが理解できる。

この条痕文期に該当する同様の遺跡として、前述した中六遺跡が知られているが、本遺跡とは調査面積に倍以上の開きがあるため一概に比べることは難しいものの、比較検討できる遺跡として注目される。

遺跡の展開する状況から両遺跡全体から比較してみると、中六遺跡では数次にわたる調査で早期の各時期により、活動拠点が移動していたことが確認されている。寒沢遺跡では今回の調査で初めて炉穴群の存在が確認されたのみであるが、周辺では隣接する大窪遺跡の確認調査において炉穴が多数存在することが明らかになっていることを踏まえると、中六遺跡と同様に活動拠点が移動していた可能性も考えられる。一方、炉穴の分布状況から中六遺跡(12)と今回調査を行った寒沢遺跡(8)を比較してみると、遺構の時期差による分布状況には違いが認められる。中六遺跡では炉穴群よりも重複しない単独の炉穴が台地上に密集する状況で、条痕文期前半段階の子母口式期に盛期があるのに対し、寒沢遺跡では、炉穴が多数重複した群をなすものが主体で、子母口式に後続する条痕文期後半段階の鶯ガ島台式期～茅山下層式期が盛期になっている。このように、同じ条痕文期の中でも出土遺物の時期差により遺構の分布状況の傾向に違いが認められることは今後の検討に値する好資料といえよう。

表6 寒沢遺跡(8)遺構一覧表1(炉穴)

遺構名	グリッド	形態	主軸方向	規模(m)					火床 (cm)		傾斜度	備考
				長軸	短軸(足)	短軸(火)	深さ(足)	深さ(火)	規模	焼土厚		
第1炉穴群												
FP005	F8-50	(楕円)	N-30° -E	(1.09)	—	(1.08)	—	0.42	98×78	37	—	焼土堆積厚い。FP006に切られる。SK007と連結。
FP006	F8-50	—	N-130° -E	(1.07)	—	(1.01)	—	0.40	83×52	3	—	FP005を切る。
FP008	F8-30	楕円	N-30° -W	2.31	1.30	(0.70)	0.38	0.47	58×48	7	8°	木根攪乱著しい。
FP009	F8-31	楕円	N-51° -E	(1.93)	1.87	1.32	0.18	0.45	60×55	12	5°	足場側が広がる。
FP015	F8-40	—	—	—	—	—	—	0.10	(30×22)	3	—	火床のみ確認。残存わず。
FP038	E8-59	(楕円)	N-26° -W	(1.53)	1.20	1.03	0.42	0.47	63×58	44	2°	焼土厚く堆積。足場側SK007と連結。
FP043	E8-59	(瓢箪)	N-1° -W	(3.56)	1.58	1.28	0.26	0.28	67×54	4	7°	木根攪乱に分断される。
第2炉穴群												
FP017	F9-29	(楕円)	N-146° -W	(1.12)	—	0.70	0.75	0.71	62×41	42	0°	火床側壁を鋭角に挟り、火床が構築される。
FP018	F9-19	隅丸長方形	N-62° -W	1.62	1.00	0.97	0.64	0.66	72×52	0	6°	下部炉穴を人為的埋め戻し後、上部炉穴を再構築。
FP019	F9-29	—	(北東→南西)	—	—	—	—	0.74	48×73	28	—	火床のみ確認。赤化部分硬化。
FP041	E8-09	楕円	N-6° -E	(1.84)	0.85	0.97	0.60	0.58	82×60	17	6°	群中で最も浅く、丸みをもった掘り込み。火床赤化不明瞭。
第3炉穴群												
FP020	E8-52	(楕円)	N-122° -W	(0.80)	—	0.83	—	0.47	—	4	—	火床のみ確認。赤化部分硬化。
FP021	E8-62	—	(南西→北東)	—	—	—	—	0.29	54×31	11	—	火床のみ確認。赤化部分硬化。
FP022	E8-63	隅丸長方形	N-175° -W	1.80	0.92	1.02	0.52	0.67	31×18	28	16°	火床は被熱ロー面が露呈。足場側上部より接合可能な深鉢出土。
FP023	E8-63	—	—	—	—	—	—	0.29	75×54	4	—	火床のみ確認。
FP024	E8-63	カクラン	—	—	—	—	—	—	—	0	—	火床のみ確認。赤化不明瞭。
FP025	E8-62	楕円	N-90° -E	1.53	0.89	0.71	0.43	0.30	73×56	11	15°	煙道部は緩やかな立ち上がり。
FP026	E8-43	楕円	N-23° -E	1.59	0.95	0.94	0.54	0.59	82×59	42	5°	焼土厚く堆積。被熱赤化部分が煙道部に達する。
FP027	E8-42	楕円	N-46° -W	(1.20)	0.81	0.68	0.37	0.38	76×44	5	9°	煙道部は緩やかな立ち上がり。
FP028	E8-43	—	—	—	—	—	—	—	46×19	0	—	火床がわずかに残存。
FP029	E8-52	楕円	N-65° -W	0.87	0.51	0.56	0.16	0.07	53×48	4	8°	小規模な楕円状。東側へ延びる足場確認できず。
FP030	E8-53	—	(西→東)	—	—	—	—	0.33	54×44	0	—	火床にも確認。赤化部分硬化。
FP031	E8-52	—	—	—	—	—	—	0.37	41×25	0	—	火床のみ確認。赤化部分硬化。残存わず。
FP032	E8-44	楕円	N-63° -E	(1.57)	(0.84)	1.04	0.29	0.35	50×43	7	0°	煙道部は攪乱により確認できず。直立した立ち上がりの可能性あり。
FP033	E8-52	楕円	N-98° -W	1.45	(0.62)	0.70	0.49	0.56	76×51	12	7°	強く被熱した赤化範囲が煙道部へ達する。
第4炉穴群												
FP044	F8-23	楕円	N-31° -W	(1.94)	0.92	(0.73)	0.50	0.48	38×23	26	3°	強く被熱した赤化範囲が煙道部へ達する。
FP045	F8-33	—	(南西→北東)	—	—	—	—	0.31	48×46	3	—	火床のみ確認。赤化部分硬化。
FP046	F8-34	—	(東→西)	—	—	—	—	0.19	54×33	0	—	火床のみ確認。
FP047	F8-34	—	(南→北)	—	—	(0.96)	—	0.50	70×62	6	—	火床のみ確認。赤化部分硬化。
FP048	F8-35	—	—	—	—	—	—	0.35	61×45	0	—	火床のみ確認。東側でSK025と連結。
FP049	F8-26	—	(北西→南東)	—	—	—	—	0.59	65×45	3	—	火床のみ確認。赤化部分硬化。
FP050	F8-24	—	(南東→北西)	—	—	—	—	0.43	66×52	0	—	火床のみ確認。
FP051	F8-35	隅丸長方形	N-6° -W	1.76	0.74	1.01	0.75	0.80	83×64	31	5°	焼土厚く堆積。赤化範囲が煙道部へ達する。足場急なスロープ状。
FP052	F8-36	隅丸長方形	N-176° -W	1.77	1.12	1.12	0.32	0.28	59×54	12	0°	火床赤化部分硬化。煙道部緩やかな立ち上がり。
FP053	F8-36	楕円	N-61° -W	1.53	0.97	0.98	0.40	0.45	45×35	17	0°	赤化部分煙道部まで達する。煙道部は緩やかな立ち上がり。
FP054	F8-25	楕円	N-56° -W	2.03	1.02	1.03	0.60	0.56	63×41	29	0°	赤化部分範囲広い。炉穴の形状から2基の重複か。
FP055	F8-16	瓢箪	N-23° -W	(1.31)	(0.97)	0.86	0.52	0.48	48×44	4	6°	貝塊出土。礎の出土も多い。
FP056	F8-16	(瓢箪)	N-33° -E	1.88	(0.90)	0.99	0.74	0.84	72×64	3	3°	炉穴下層部に焼土を含む層が厚く堆積。煙道部側に段がある。
FP057	F8-26	—	—	—	—	—	—	0.65	48×37	13	—	火床のみ確認。SK025と連結。
FP058	F8-26	—	(北東→南西)	—	—	—	—	0.66	51×51	15	—	火床のみ確認。赤化部分硬化。
FP059	F8-26	楕円	N-49° -E	1.80	0.86	0.83	0.84	0.73	52×50	9	13°	焼土堆積極端に厚い。足場かなり急なスロープ状。
FP060	F8-27	—	(北西→南東)	—	—	—	—	0.41	70×42	8	—	火床のみ確認。赤化部分硬化。
FP061	F8-23	楕円	N-9° -W	(1.27)	(1.04)	0.99	0.53	0.53	51×46	10	0°	火床のみ確認。赤化部分硬化。煙道部の立ち上がりは湾曲する。
FP062	F8-24	楕円	N-60° -W	(1.72)	(1.21)	(1.22)	0.78	0.88	58×48	3	11°	強く被熱した赤化部分が煙道部にまで達する。足場はスロープ状。
FP063	F8-35	(楕円)	N-168° -W	(1.31)	(1.02)	(0.84)	0.57	0.59	48×32	7	9°	火床のみ確認。
FP064	F8-16	(楕円)	N-36° -E	(1.31)	(0.61)	(0.88)	0.47	0.48	48×48	9	0°	火床のみ確認。赤化部分硬化。
第5炉穴群												
FP070	F7-72	(楕円)	N-121° -W	(0.68)	—	0.71	—	0.11	39×39	0	—	火床のみ確認。
FP071	F7-95	(楕円)	N-84° -W	1.78	1.25	1.28	0.50	0.58	55×53	13	5°	煙道部側オーバーハングする。天井部が崩落した可能性あり。
FP072	F8-03	楕円	N-27° -E	1.39	0.78	0.68	0.49	0.48	46×46	0	0°	焼土堆積やや厚。煙道部ほぼ直立の立ち上がり。
FP073	F7-72 (長楕円)	N-141° -W	1.51	0.85	0.71	0.24	0.27	64×42	13	8°	炉穴周囲は不整形な掘り込み。	
FP074	F7-91	(長楕円)	N-178° -E	1.93	1.12	(0.88)	0.51	0.61	48×46	10	7°	火床では赤化認められないがロー面は強く被熱。足場スロープ状。
FP075	F7-82	(瓢箪)	N-145° -W	1.65	0.90	0.66	0.40	0.51	57×55	0	0°	FP074と重複するが、新旧関係は不明。
FP076	F7-94	楕円	N-20° -E	1.95	0.80	0.86	0.68	0.27	64×42	4	10°	焼土堆積かなり厚く、複数の堆積層が認められる。
FP077	F8-04	瓢箪	N-147° -E	2.03	1.06	0.90	0.48	0.58	54×48	19	10°	足場で若干の段差が認められる。
FP078	F8-04 (長楕円)	N-152° -W	1.75	0.82	0.70	0.43	0.44	43×41	12	3°	火床上面に石皿がほぼ水平に残置。	
FP079	F7-83	—	(東→西)	(1.64)	—	—	0.37	0.39	72×55	15	0°	火床のみ確認。赤化部分硬化。
FP080	F7-84	楕円	N-79° -E	1.08	0.93	0.93	0.78	0.77	56×42	3	0°	円筒状に近い掘り込み。壁面まで赤色硬化する。
FP081	F7-93	—	—	—	—	—	—	0.52	39×30	5	—	火床のみ確認。
FP082	F7-84	楕円	N-45° -E	1.42	(0.96)	0.88	0.69	0.74	76×47	5	2°	煙道部は急な立ち上がり。攪乱のためか若干凹凸が認められる。
FP083	F7-73	—	(西→東)	—	—	0.62	—	0.76	57×48	4	—	火床のみ確認。赤色部分硬化。SK008と重複。
FP084	F7-84	—	—	—	—	—	—	0.57	40×30	14	—	火床のみ確認。
FP085	F7-93	瓢箪	N-92° -W	1.58	1.15	0.76	0.58	0.67	68×52	21	0°	煙道部攪乱。焼土堆積厚。足場側急な傾斜。SK024と連結。
FP086	F7-83	—	(北→南)	—	—	—	—	0.54	50×38	10	—	火床のみ確認。
FP087	F7-73	(瓢箪)	N-166° -W	(1.03)	—	0.68	0.42	0.41	44×37	5	0°	火床のみ確認。
FP088	F7-74	(楕円)	N-38° -E	(1.05)	1.24	1.03	0.60	0.65	68×45	6	2°	強く赤化した部分が煙道部にまで達する。
FP089	F7-75 (長楕円)	N-50° -E	(2.14)	1.03	0.86	0.51	0.52	62×56	5	2°	煙道部はほぼ直立した立ち上がり。長めの足場を有する。	
FP090	F7-75 (長楕円)	N-100° -E	(1.28)	—	1.15	0.34	0.48	68×62	3	12°	火床上面に貝層あり。立ち木下に遺存したため一部根に崩される。	
FP091	F7-84	楕円	N-135° -E	1.51	0.78	0.94	0.54	0.73	71×51	10	11°	赤化は不明瞭であるが、煙道部にまで達する。
FP092	F7-73	—	南→北	—	—	1.01	—	1.00	76×56	12	—	火床のみ確認。赤化部分硬化。
FP093	F7-73	—	—	—	—	—	—	0.98	37×31	18	—	火床のみ確認。赤化部分硬化。SK008と連結。
FP094	F7-85	—	(北東→南西)	—	—	—	—	0.32	38×36	3	—	火床のみ確認。FP090に切られた可能性あり。
FP095	F7-84	—	(南西→北東)	—	—	—	—	0.46	72×57	9	—	火床のみ確認。赤化部分硬化。
FP096	F7-74	(瓢箪)	N-52° -E	(1.65)	(1.08)	0.80	0.59	0.58	68×57	5	1°	煙道部は急な立ち上がり。足場は平坦。
FP097	F7-74	—	(N-57° -E)	(0.94)	—	(1.06)	—	0.59	76×63	4	—	火床のみ確認。FP088足場精査時に確認する。
FP098	F7-73	—	(南→北)	—	—	—	—	0.61	(47×20)	11	—	火床のみ確認。残存わず。
FP099	F7-82	—	—	—	—	—	—	0.44	(48×32)	4	—	火床のみ確認。赤化部分硬化。
FP100	F7-74	—	—	—	—	—	—	0.65	72×65	0	—	火床のみ確認。赤化部分わず。
第6炉穴群												
FP101	G8-26	瓢箪	N-124° -E	1.54	1.14	0.66	0.58	0.68	40×38	6	5°	火床部分は被熱するも赤化せず。煙道部は赤化強い。
FP102	G8-45	瓢箪	N-140° -E	1.19	(1.07)	0.72	0.37	0.42	50×48	2	11°	浅い炉穴。火床の赤化はあまり硬化せず。
FP103	G8-35	—	(N-114° -E)	—	—	—	—	0.43	65×61	4	—	火床のみ。FP102足場精査時に確認する。
FP104	G8-34 (長楕円)	N-158° -E	2.11	1.02	1.08	0.69	0.79	87×70	9	5°	焼土堆積極端に厚い。足場は長くスロープ状。	
FP105	G8-34	—	(N-114° -E)	—	—	0.63	—	0.60	48×53	6	—	火床のみ確認。赤化部分硬化。

遺構名	グリッド	形態	主軸方向	規模(m)					火床 (cm)		傾斜度	備考
				長軸	短軸(足)	短軸(火)	深さ(足)	深さ(火)	規模	焼土厚		
第6炉穴群												
FP106	G8-23	楕円	N-107° -E	1.36	0.97	0.81	0.72	0.76	60×46	0	4°	西側でSK020と連結。
FP107	G8-01	—	(N-82° -E)	—	—	—	0.72	—	43×26	0	—	煙道部側が赤化し硬化する。
FP108	G8-21	楕円	N-126° -W	2.18	1.62	(1.10)	0.87	0.92	56×51	27	4°	赤化範囲が煙道部へ達する。焼土堆積直上に崩落土が堆積。
FP109	G8-31	楕円	N-155° -E	(2.26)	1.41	1.16	0.47	0.805	72×48	28	13°	煙道部まで赤化範囲が達する。赤化部分硬化。足場は段を有する。
FP110	G8-32	隅丸長方形	N-64° -W	1.66	0.92	0.92	0.71	0.60	49×30	18	0°	炉穴下層部全体に焼土が広がる。火床部分は不明瞭。
FP111	G8-42	楕円	N-141° -W	1.98	(0.94)	1.12	0.72	0.75	40×32	11	0°	煙道部は急な立ち上がり。煙道部まで赤化範囲が達する。
FP112	G8-52	(瓢箪)	N-171° -W	2.08	(0.75)	1.02	0.74	0.81	66×55	37	9°	焼土堆積厚め。スロープ状となる足場はFP173火床を覆って構築。
FP113	G8-53	(長楕円)	N-129° -W	(1.20)	0.70	0.87	0.58	0.62	52×42	8	10°	煙道部は急な立ち上がり。煙道部まで赤化範囲が達する。
FP114	G8-43	楕円	N-164° -E	(1.52)	1.41	1.55	0.70	0.83	66×53	27	5°	焼土厚く堆積。
FP115	G8-43	(楕円)	N-87° -E	(1.23)	—	1.21	—	0.59	48×48	4	(8°)	煙道部まで赤化範囲が達し、硬化する。
FP116	G8-52	(長楕円)	N-80° -W	(1.03)	—	(0.92)	—	0.72	60×36	3	—	煙道部まで赤化範囲が達し、硬化する。
FP117	G8-52	(長楕円)	N-126° -W	(2.05)	(0.78)	1.09	0.69	0.81	55×44	0	7°	煙道部まで赤化範囲が達し、硬化する。
FP118	G7-93	楕円	N-12° -W	1.38	0.63	0.73	0.30	0.31	33×33	0	2°	小型。
FP119	G7-93	(楕円)	N-46° -W	1.21	1.39	1.38	0.46	0.43	54×42	13	0°	煙道部まで赤化するが、煙道部の立ち上がりは緩やか。
FP120	G8-35	—	(南西～北東)	—	—	—	—	0.48	58×35	12	(5°)	火床のみ確認。
FP121	G8-34	(長楕円)	N-91° -E	(1.07)	—	(0.87)	—	0.80	46×44	4	(13°)	火床のみ確認。
FP122	G8-31	(楕円)	N-96° -E	(1.47)	(0.67)	(1.10)	0.52	0.56	51×45	0	3°	小型。
FP123	G8-03	—	—	—	—	—	—	0.41	98×70	6	—	火床のみ確認。
FP124	G8-12	—	—	—	—	—	—	0.43	60×39	4	—	火床のみ確認。
FP125	G8-12	長楕円	N-110° -W	188	(1.01)	1.39	0.77	0.95	49×43	23	14°	火床赤化部分認められず、FP108足場が覆う。足場はスロープ状。
FP126	G8-22	—	N-40° -W	(139)	—	0.87	—	0.50	52×52	0	—	東側でSK020と連結。
FP127	G8-22	—	N-87° -W	(92)	—	0.74	—	0.35	40×40	0	(-1°)	東側でSK020と連結。
FP128	G8-22	—	N-123° -W	(80)	—	(0.68)	—	0.59	54×50	0	—	東側でSK020と連結。
FP129	G8-04	—	—	—	—	—	—	0.62	83×80	0	—	火床のみ確認。火床の窪みと赤化範囲がずれる。
FP130	G8-04	—	N-158° -E	(0.87)	—	0.79	—	0.54	35×31	0	—	火床のみ確認。
FP131	G7-94	—	N-65° -E	(1.52)	—	1.51	—	0.52	72×72	6	—	火床のみ確認。
FP132	G8-03	—	—	—	—	—	—	0.54	53×50	3	—	火床のみ確認。
FP133	G8-03	隅丸長方形	N-45° -W	(1.94)	0.97	0.90	0.78	0.85	68×64	25	8°	火床は硬化する。
FP134	G8-26	(瓢箪)	N-65° -E	(1.61)	(0.70)	0.89	0.66	0.80	73×68	7	8°	煙道部まで赤化範囲が達するが、火床は赤化が認められず。
FP135	G8-15	(長楕円)	N-40° -E	1.33	—	1.02	0.52	0.50	71×59	7	0°	やや小型。
FP136	G8-25	(長楕円)	N-90° -E	(1.71)	(1.20)	(0.98)	0.60	0.69	63×57	19	10°	火床は硬化する。
FP137	G8-15	(楕円)	N-53° -E	(1.36)	(0.64)	0.98	0.39	0.36	75×51	19	1°	火床は硬化し、煙道部付近まで広がる。
FP138	G8-14	隅丸長方形	N-22° -E	2.00	1.22	1.12	—	(0.55)	—	10	—	FP153上に構築される。
FP139	G8-24	(楕円)	N-55° -W	(1.12)	—	0.98	—	0.57	78×58	22	—	火床部分の赤化範囲は煙道部まで達する。
FP140	G8-14	楕円	(北西～南東)	—	—	0.94	—	0.38	71×56	28	(12°)	小型。
FP141	G8-02	(長楕円)	N-143° -E	(1.27)	(0.68)	(0.93)	0.43	0.46	77×62	11	4°	火床部分の赤化範囲は煙道部まで達する。
FP142	G7-92	楕円	N-3° -W	1.60	(0.83)	(0.94)	0.44	0.41	76×58	10	0°	小型。赤化範囲は足場側まで広がる。
FP143	G7-91	不整形	N-27° -E	1.36	0.71	0.80	0.54	0.38	102×49	16	3°	下部全面に赤化範囲が広がる。
FP144	G7-91	長楕円	N-28° -E	1.85	0.83	0.97	0.53	0.58	60×56	10	14°	火床は硬化する。
FP145	G7-90	楕円	N-11° -W	1.41	0.64	(0.95)	0.35	0.36	60×51	9	(-5°)	火床は硬化する。
FP146	G8-13	長楕円	N-161° -E	1.80	0.84	0.76	0.66	0.73	52×40	2	0°	煙道部に赤化範囲が達し、硬化する。足場は段を有する。
FP147	G8-33	(楕円)	N-5° -W	(1.11)	(0.74)	0.79	0.49	0.60	50×40	0	11°	火床のみ確認。
FP148	G8-12	—	—	—	—	—	—	0.18	38×24	0	—	火床のみ確認。地山の立ち上がり部分で確認される。
FP149	G8-34	(楕円)	(北西～南東)	—	—	0.68	—	0.39	50×48	4	—	火床のみ確認。
FP150	G8-45	(楕円)	(北～南)	—	—	0.77	—	0.29	45×42	4	—	火床のみ確認。
FP151	G8-26	(長楕円)	N-84° -E	(1.34)	(0.70)	(0.96)	0.68	0.67	40×37	11	0°	赤化範囲は不整形な広がりが方。赤化no状態からFP134より新しいか。
FP152	G8-25	—	(南～北)	—	—	—	—	0.52	64×53	8	—	火床のみ確認。
FP153	G8-14	隅丸長方形	N-22° -E	1.71	0.82	0.82	0.92	1.08	—	0	—	深さを有する炉穴。火床の被熱面は硬化するが、赤化せず。
FP154	G8-24	—	(西～東)	—	—	—	—	0.48	48×43	11	—	火床のみ確認。
FP155	G8-04	—	—	—	—	—	—	0.50	73×41	11	(0°)	火床のみ確認。足場の掘り込みは不明瞭。
FP156	G8-05	—	—	—	—	—	—	0.36	89×66	21	—	攪乱のため、火床は被熱面のみ残存。
FP157	G7-94	長楕円	N-12° -E	2.02	(1.06)	0.80	0.51	0.57	91×75	11	8°	火床部分の赤化範囲は煙道部まで達する。
FP158	G8-33	楕円	N-143° -E	1.26	(0.82)	0.94	0.42	0.43	—	0	0°	火床部分に不明瞭な赤化範囲は認められないが、煙道部に残存。
FP159	G8-43	—	—	—	—	—	—	0.35	(46×26)	0	—	火床のみ確認。FP171と重複し、全容は不明。
FP160	G8-33	—	—	—	—	—	—	0.44	66×50	0	—	煙道部まで赤化範囲が達し、硬化する。
FP161	G7-92	隅丸長方形	N-163° -W	1.48	1.18	1.22	0.27	0.34	75×57	10	4°	貝塊出土。礫の出土も多い。
FP162	G7-81	楕円	N-21° -W	2.39	1.17	1.05	0.58	0.66	67×64	8	6°	貝層あり。火床の赤化範囲は煙道部まで達する。
FP163	G7-83	隅丸長方形	N-36° -E	1.82	1.03	0.88	0.64	0.73	58×50	10	10°	貝塊出土。火床の赤化範囲は煙道部まで達する。
FP164	G7-93	—	(南東～北西)	—	—	0.93	—	0.46	59×53	6	—	火床は硬化する。
FP165	G8-00	(長楕円)	N-126° -W	2.44	—	0.92	—	0.51	61×55	12	(1°)	FP107と重複のため、足場側の形状が不明瞭。
FP166	G7-90	—	—	—	—	—	—	0.34	37×34	0	—	火床のみ確認。
FP167	G7-90	—	—	(1.48)	—	—	—	0.22	34×31	0	—	攪乱の影響で、形状は不明瞭。
FP168	G7-81	(隅丸長方形)	N-142° -W	(1.40)	(1.12)	(1.15)	0.32	0.37	60×52	13	3°	火床は硬化する。
FP169	G8-12	—	(南西～北東)	—	—	—	—	0.49	(58×30)	3	—	火床のみ確認。南西側でSK019と連結。
FP170	G8-11	—	(南東～北西)	—	—	1.08	—	0.85	70×73	9	—	火床のみ確認。南東側でSK019と連結。
FP171	G8-42	—	(北西～南東)	—	—	0.93	—	0.45	62×57	7	—	火床のみ確認。残存わずか。
FP172	G7-81	—	N-134° -W	(1.05)	—	(1.15)	—	0.38	66×65	8	—	火床のみ確認。
FP173	G8-53	—	N-134° -W	1.72	0.86	0.90	0.81	0.83	65×65	8	4°	火床部分にFP112の足場が覆う。
FP174	G8-63	—	—	—	—	—	—	0.43	(75×29)	0	—	火床のみ確認。残存わずか。
FP319	G7-93	—	—	—	—	—	—	0.41	33×33	0	—	火床のみ確認。
FP320	G7-82	(長楕円)	N-94° -E	(1.22)	0.91	(0.69)	0.54	0.42	46×41	6	—	火床は硬化していない。
FP321	G7-92	—	—	—	—	—	—	0.36	41×26	0	—	火床のみ確認。
FP322	G8-01	長楕円	N-116° -E	2.01	0.60	0.68	0.50	0.52	67×51	0	8°	足場側に段を有する。
FP323	G8-02	—	(南東～北西)	—	—	—	—	0.39	97×70	9	—	火床のみ確認。赤化範囲は不整形な広がりが方。
FP324	G8-02	(長楕円)	N-13° -W	(1.04)	0.76	(0.72)	0.33	0.33	53×48	4	—	火床は硬化する。火床と足場の主軸が若干ずれる。
FP325	G8-03	—	—	—	—	—	—	0.38	45×44	7	—	火床のみ確認。
FP326	G8-12	—	—	—	—	—	—	0.42	(56×33)	0	—	火床側部分の確認。FP125と重複。
FP327	G8-23	—	—	—	—	—	—	0.35	(32×25)	0	—	火床のみ確認。
FP328	G8-23	(楕円)	N-8° -E	(0.95)	—	(0.73)	—	0.48	58×47	7	—	火床のみ確認。FP123と重複。
FP329	G8-32	—	—	—	—	—	—	0.37	42×39	0	—	火床のみ確認。
FP330	G8-32	—	—	—	—	—	—	0.48	31×41	7	—	火床のみ確認。
FP331	G8-44	(長楕円)	N-150° -W	(0.89)	0.71	0.82	0.34	0.35	51×48	5	0°	FP104と重複。足場側一部確認できず。
第7炉穴群												
FP176	E7-69	長楕円	N-23° -W	(1.40)	0.74	0.61	0.28	0.49	—	0	10°	火床は被熱するも赤化なし。煙道部側はオーバーハング。
FP177	E7-77	(楕円)	N-91° -E	2.05	1.52	0.91	0.32	0.36	49×44	8	2°	足場はFP178と共用されたか。
FP178	E7-86	(楕円)	N-136° -E	(1.77)	1.52	0.72	—	0.38	57×36	0	—	足場はFP177と共用されたか。
FP179	E7-87	—	(南～北)	—	—	(0.90)	—	0.43	64×60	4	—	火床側のみ確認。
FP180	E7-99	—	(北～南)	—	—	—	—	0.44	65×47	0	—	足場はFP181と共用されたか。
FP181	E7-89	—	(西～東)	—	—	—	—	0.47	57×45	3	—	足場はFP180と共用されたか。
FP182	E7-89	—	(南西～北東)	—	—	—	—	0.20	(48×13)	0	—	火床のみ確認。

遺構名	グリッド	形態	主軸方向	規模(m)					火床 (cm)		傾斜度	備考
				長軸	短軸(足)	短軸(火)	深さ(足)	深さ(火)	規模	焼土厚		
第7炉穴群												
FP186	E7-88	—	—	—	—	—	—	0.51	71×61	0	—	火床のみ確認。窪み深め。
FP183	E7-79	不整形	N-124° -W	1.69	0.96	(0.55)	0.32	0.38	66×54	12	7°	足場は方形状。火床上面は消失。
FP184	E7-79	—	—	—	—	—	—	0.20	49×45	11	—	火床のみ確認。
FP185	E7-78	隅丸長方形	N-52° -W	1.53	0.91	1.02	0.47	0.48	74×70	13	3°	—
FP187	E7-96	長楕円	N-86° -W	(1.58)	0.62	(0.56)	0.67	0.71	38×35	3	6°	煙道部は直立し、赤化する。足場は火床側がスロープ状になる。
FP188	E8-07	—	—	—	—	—	—	0.24	45×33	2	—	火床のみ確認。攪乱で一部消失。
FP189	E8-07	—	—	—	—	—	—	0.14	37×30	4	—	火床のみ確認。攪乱で一部消失。
FP190	E8-07	(楕円)	N-129° -W	1.62	(0.94)	(0.54)	0.20	0.24	(38×35)	0	4°	火床のみ確認。攪乱で一部消失。
FP191	E8-08	(楕円)	N-136° -W	(1.21)	(1.10)	(0.76)	0.24	0.33	61×46	0	7°	火床は赤化が薄く、硬化せず。
FP192	E8-08	楕円	N-143° -E	(1.04)	0.78	0.81	0.32	0.43	47×45	7	17°	煙道部は攪乱により消失。
FP193	E7-98	(楕円)	N-178° -E	(1.15)	1.11	1.00	0.38	0.47	44×41	6	10°	火床は硬化する。
FP194	E8-08	(楕円)	N-161° -E	(0.84)	(0.71)	1.06	0.46	0.54	48×35	3	32°	煙道部は攪乱により消失。
FP195	E7-98	楕円	N-102° -W	1.72	0.99	1.00	0.60	0.69	61×48	4	11°	火床は硬化する。
FP196	E7-88	楕円	N-118° -W	1.51	0.94	0.85	0.52	0.54	65×55	0	0°	火床は硬化する。
FP197	E7-60	長楕円	N-56° -E	(2.20)	(0.68)	1.04	0.42	0.53	73×56	4	0°	火床の南側は攪乱により消失。焼土の堆積厚い。
FP198	E7-97	—	—	—	—	—	—	0.46	53×42	0	—	火床のみ確認。
FP199	E7-97	(楕円)	N-172° -W	(1.26)	—	0.85	0.31	0.34	67×58	0	0°	火床側の確認。火床は窪み内でわずかに赤化する。
第8炉穴群												
FP205	E7-40	(楕円)	N-88° -E	(0.98)	0.84	0.72	0.44	0.46	40×28	8	-1°	FP205～207全体で堅穴状の掘り込み。底部の段差で規模を計測。
FP206	E7-40	—	—	—	—	—	—	0.34	43×36	0	—	FP205～207全体で堅穴状の掘り込み。底部の段差で規模を計測。
FP207	E7-40	(楕円)	N-52° -E	1.37	(0.88)	(0.85)	0.50	0.43	55×41	0	-7°	FP205～207全体で堅穴状の掘り込み。底部の段差で規模を計測。
FP208	E7-50	隅丸長方形	N-121° -W	1.32	0.77	0.79	0.26	0.30	39×36	0	5°	火床はあまり硬化していない。
第9炉穴群												
FP212	E6-74	楕円	N-30° -W	1.49	0.98	0.82	0.79	0.78	60×42	17	7°	かなりの深さを有し、煙道部は直立する。足場側は攪乱で消失
FP223	E6-95	(長楕円)	N-63° -W	1.73	1.11	(0.70)	0.64	0.67	43×35	3	5°	煙道部側は攪乱で消失。
FP224	E7-07	長楕円	N-116° -E	2.08	1.32	0.90	0.52	0.54	68×60	10	2°	足場は平坦で、長めの構造。
FP225	E6-97	長楕円	N-35° -E	2.15	1.40	1.36	0.54	0.63	43×30	26	10°	足場がややスロープ状になる。
FP236	E7-17	楕円	N-146° -E	(1.63)	(1.08)	(0.84)	0.82	0.79	45×37	7	6°	赤化範囲が煙道部にまで達する。
FP237	E7-07	—	(西～東)	—	—	—	—	0.54	78×48	6	—	火床のみ確認。
FP238	E7-06	(楕円)	N-71° -W	(1.39)	1.17	1.12	0.58	0.56	53×52	9	2°	火床は硬化する。
FP239	E7-07	—	—	—	—	—	—	0.46	43×30	2	—	火床のみ確認。
FP262	E6-98	(長楕円)	N-135° -E	2.39	1.67	1.30	0.39	0.42	85×80	6	4°	大型。
FP268	E7-25	(長楕円)	N-170° -W	(1.52)	(1.03)	(0.73)	0.38	0.32	57×55	5	-5°	足場の長い構造で、北側寄りがスロープ状になる。
FP269	E7-15	—	—	—	—	—	—	0.23	(49×39)	7	—	火床のみ確認。赤化薄く、硬化せず。SK016に切られる。
FP270	E7-15	(長楕円)	N-1° -W	(0.90)	(1.02)	(0.87)	0.41	0.38	(48×42)	11	5°	火床のみ確認。赤化薄く、硬化せず。
FP271	E7-24	楕円	N-91° -E	(1.06)	1.02	(0.52)	0.21	0.27	(47×45)	4	0°	火床のみ確認。赤化薄く、硬化せず。
FP272	E7-14	楕円	N-37° -W	1.53	(0.91)	0.90	0.29	0.32	(43×42)	4	1°	火床のみ確認。赤化薄く、硬化せず。
FP273	E6-94	—	(南～北)	—	—	—	—	0.58	(41×22)	19	—	火床のみ確認。
FP303	E6-94	(楕円)	N-29° -E	(0.84)	0.95	(0.62)	—	0.61	(42×35)	3	—	火床のみ確認。
FP311	E6-95	(楕円)	N-143° -E	(1.29)	(0.67)	(0.86)	—	0.50	(71×32)	9	—	火床のみ確認。
FP312	E6-97	(楕円)	N-1° -W	(1.43)	(0.45)	(1.01)	0.44	0.55	35×29	5	10°	FP223に切られ、火床の一部が消失する。
FP314	E7-14	(楕円)	N-9° -E	—	—	(0.32)	—	0.39	(46×36)	9	—	火床のみ確認。赤化薄く、硬化せず。
FP315	E7-14	—	—	—	—	—	—	0.17	(43×32)	0	—	火床のみ確認。赤化薄く、硬化せず。
FP316	E6-94	—	(東～西)	—	—	—	—	0.66	(50×21)	7	—	火床のみ確認。
FP317	E6-94	—	—	—	—	—	0.65	0.70	(37×27)	10	8°	火床のみ確認。
第10炉穴群												
FP213	D6-99	瓢箪	N-28° -W	1.94	1.04	(0.83)	0.54	0.70	60×45	2	8°	火床は硬化する。
FP214	D6-99	—	(東～西)	—	—	—	—	0.29	67×56	5	—	火床のみ確認。
FP215	E6-90	—	(南～北)	—	—	—	—	0.34	59×47	3	—	火床のみ確認。
FP216	D7-09	長楕円	N-119° -W	1.89	0.95	0.86	0.45	0.63	54×56	3	9°	足場はスロープ状。
FP217	E7-00	—	(北～南)	—	—	—	—	0.12	(63×55)	5	—	火床のみ確認。
FP218	E7-00	(楕円)	N-135° -E	(1.01)	(0.78)	0.64	0.21	0.23	(53×50)	0	0°	小型。
FP219	E6-91	長楕円	N-83° -E	(2.57)	1.01	0.87	0.86	0.84	55×51	4	3°	煙道部まで赤化範囲が達する。足場は段を有し、FP220と共用か。
FP220	E6-91	楕円	N-6° -E	1.13	(1.02)	0.87	0.86	0.99	46×43	3	7°	足場は段を有し、FP220と共用されたか。
FP221	E6-92	瓢箪	N-88° -E	1.59	1.06	1.12	0.40	0.40	48×38	0	0°	火床の赤化は薄く、硬化しない。
第11炉穴群												
FP226	E6-78	—	—	—	—	—	—	0.29	37×32	16	—	火床のみ確認。FP227足場精査時に確認する。
FP227	E6-78	隅丸長方形	N-80° -W	2.09	(0.90)	(0.69)	0.31	0.28	31×30	3	0°	火床の規模は小さめで、赤化も薄い。
FP228	E6-68	隅丸長方形	N-15° -E	2.57	1.98	1.97	0.60	0.64	66×45	27	1°	大型。
FP229	E6-78	長楕円	N-124° -E	1.76	(0.82)	(0.68)	0.45	0.53	65×50	11	11°	火床は硬化。
第12炉穴群												
FP242	F7-35	長楕円	N-6° -W	(2.16)	1.39	1.37	0.46	0.44	68×58	4	0°	FP243と足場が連結。
FP243	F7-45	長楕円	N-175° -E	(1.67)	1.36	1.22	0.44	0.31	74×63	8	0°	FP242と足場が連結。
FP244	F7-45	(長楕円)	N-67° -E	1.91	1.26	1.31	0.53	0.54	46×44	9	1°	赤化範囲は煙道部まで達する。火床の焼土は厚く堆積。
FP245	F7-45	(楕円)	N-132° -E	(1.01)	—	0.90	—	0.26	48×43	6	—	火床側の確認する。
FP246	F7-46	(楕円)	N-169° -E	(1.33)	(1.00)	0.94	0.27	0.29	62×49	6	0°	火床は硬化する。
FP247	F7-46	(長楕円)	N-37° -E	(1.71)	0.80	0.90	0.46	0.51	47×43	21	12°	赤化範囲が煙道部まで達する。
FP248	F7-37	(楕円)	N-27° -W	(1.00)	—	0.86	—	0.52	62×51	0	—	火床側の確認する。
FP249	F7-37	(楕円)	(南～北)	—	—	1.02	—	0.43	62×59	9	—	赤化範囲が煙道部まで達する。足場はFP255と共用されたか。
FP250	F7-28	(楕円)	N-64° -W	(1.10)	—	0.94	—	0.28	47×40	4	—	火床は硬化する。
FP251	F7-28	(楕円)	N-20° -E	(0.95)	—	0.69	—	0.24	55×37	4	—	火床は硬化する。
FP252	F7-38	(長楕円)	N-79° -E	(1.55)	0.83	0.79	0.39	0.40	58×68	5	0°	火床は硬化する。
FP253	F7-39	(楕円)	N-102° -E	(1.44)	(0.55)	0.72	0.15	0.17	48×47	4	2°	火床は硬化する。
FP254	F7-38	—	(西～東)	—	—	—	—	0.21	58×54	6	—	火床のみ確認。
FP255	F7-38	—	(南西～北東)	—	—	—	—	0.34	69×63	0	—	赤化範囲が煙道部まで達する。足場はFP249と共用されたか。
FP256	F7-48	(長楕円)	N-137° -E	(1.22)	0.81	0.82	0.24	0.23	39×38	4	-4°	火床は硬化し、赤化範囲は煙道部まで広がる。
FP257	F7-48	(隅丸長方形)	N-130° -E	(0.90)	0.69	0.68	—	0.26	56×45	1	—	FP256足場精査時に火床のみ確認する。
FP258	F7-38	楕円	N-99° -E	1.53	0.61	0.68	0.41	0.38	57×47	9	-1°	火床は硬化する。
FP259	F7-47	(長楕円)	N-123° -E	(1.50)	0.91	0.90	0.36	0.33	47×42	12	0°	火床は硬化する。
FP260	F7-47	(長楕円)	N-150° -E	(1.30)	(0.70)	(0.85)	0.33	0.34	60×51	8	0°	火床は硬化する。
FP261	F7-37	隅丸長方形	N-48° -E	1.93	1.01	0.91	0.54	0.51	64×63	4	0°	火床は硬化する。
FP304	F7-28	—	—	—	—	—	—	0.29	53×42	5	—	火床のみ確認。FP250足場精査時に確認。赤化薄く、硬化せず。
FP305	F7-38	—	—	—	—	—	—	0.31	54×48	15	—	火床のみ確認。
FP310	F7-39	—	(南～北)	—	—	—	—	0.10	39×29	0	—	火床のみ確認。FP253北側壁寄りで火床のみ確認。
FP334	F7-47	—	—	—	—	—	—	0.28	45×44	14	—	火床のみ確認。
第13炉穴群												
FP263	F6-73	(長楕円)	N-176° -W	(1.77)	1.15	1.15	0.48	0.59	48×45	10	0°	足場はスロープ状になる。
FP264	F6-63	(楕円)	N-55° -W	(0.79)	—	1.11	—	0.63	40×29	0	—	火床側のみ確認する。
FP274	F6-53	(楕円)	N-111° -E	(1.44)	—	1.34	—	0.54	100×53	32	—	赤化範囲は足場側まで広がる。
FP275	F6-52	(楕円)	N-44° -W	(1.36)	—	(1.05)	—	0.62	32×30	16	—	煙道部まで赤化範囲が達し、硬化する。

遺構名	グリッド	形態	主軸方向	規模(m)				火床 (cm)		傾斜度	備考	
				長軸	短軸(足)	短軸(火)	深さ(足)	深さ(火)	規模			焼土厚
第13炉穴群												
FP276	F6-62	(楕円)	N-122° -W	(1.72)	—	(0.86)	—	0.57	102×54	14	—	赤化範囲は足場側まで広がる。
FP277	F6-42	(長楕円)	N-65° -W	(2.43)	(1.00)	1.10	0.36	0.50	44×38	2	9°	火床は硬化する。足場はスロープ状になる。
FP309	F6-63	—	—	—	—	—	—	0.52	63×45	6	—	火床のみ確認。
第14炉穴群												
FP241	F6-90	不整形	N-62° -W	(1.34)	0.58	0.79	0.35	0.43	49×35	10	4°	足場はスロープ状になる。足場側上面に貝層あり。
FP278	F6-90	楕円	N-42° -W	1.96	1.10	0.96	0.62	0.60	73×56	11	6°	赤化範囲が煙道部まで達する。煙道部は急な立ち上がり。
FP279	F7-01	—	—	—	—	—	—	0.43	37×25	9	—	火床はわずかに残存。火床と足場の主軸がずれる。
FP280	F7-10	瓢箪	N-162° -W	1.67	0.86	0.59	0.59	0.60	(72×46)	0	—	火床は硬化する。
FP281	E7-19	—	(北東～南西)	—	—	—	—	0.38	(52×42)	0	—	火床のみ確認。
FP282	E7-19	—	(北東～南西)	—	1.13	—	—	0.49	(58×55)	8	—	火床のみ確認。硬化する。
FP283	F7-10	(楕円)	N-152° -E	(1.34)	0.95	0.99	0.49	0.50	(55×52)	6	9°	火床は硬化する。
FP284	F7-10	—	(北西～南東)	—	—	—	—	0.36	(40×33)	3	—	火床のみ確認。
FP285	F7-00	—	—	—	—	—	—	0.49	(62×28)	0	—	火床のみ確認。
FP286	F6-92	長楕円	N-76° -E	1.94	0.93	0.77	0.66	0.60	45×45	0	-1°	足場まで赤化範囲が広がる。足場側硬質ロームブロック多量含む。
FP287	F6-91	(長楕円)	N-18° -W	1.56	1.09	0.98	0.70	0.77	52×47	13	3°	煙道部はほぼ直立した立ち上がり。
FP288	F7-01	—	—	—	—	—	—	0.10	56×46	14	—	火床のみ確認。
FP289	F7-02	楕円	N-115° -E	1.75	0.90	0.89	—	0.50	85×52	17	—	赤化範囲が足場まで広がる。
FP290	F7-02	—	(北～南)	—	—	0.89	—	0.33	(64×49)	2	—	火床のみ確認。
FP291	F6-92	—	(西～東)	—	—	0.92	—	0.20	40×36	0	—	火床のみ確認。
FP292	F6-93	—	(西～東)	—	—	0.79	—	0.15	64×47	7	—	火床のみ確認。
FP293	F6-92	(瓢箪)	N-44° -E	(1.64)	0.92	0.82	0.47	0.50	53×40	7	0°	火床は硬化する。
第15炉穴群												
FP294	F6-78	隅丸長方形	N-61° -E	1.87	0.86	(1.12)	0.78	0.75	70×58	5	0°	火床は硬化する。
FP295	F6-88	—	—	—	—	0.86	—	0.71	(58×54)	0	—	火床部分は被熱したローム面が確認できるが、赤化は認められず。
FP296	F6-77	(隅丸長方形)	N-50° -E	(1.25)	1.43	—	0.40	0.50	63×50	6	5°	火床は硬化する。
FP297	F6-86	(長楕円)	N-135° -W	(1.88)	1.34	0.97	0.15	0.23	68×60	0	-1°	火床部分は被熱したローム面が確認できるが、赤化は認められず。
FP298	F6-77	(楕円)	N-69° -W	(0.99)	1.37	1.32	0.40	0.38	38×37	4	-2°	炉穴の規模に対して火床の赤化部分は小さめである。
FP299	F6-77	(楕円)	N-111° -E	0.74	1.37	—	0.40	0.48	50×41	12	—	火床のみ確認。FP298足場精査時に確認した。
FP300	F6-77	(楕円)	N-9° -E	(0.98)	—	(0.84)	—	0.36	44×44	2	—	火床側の確認
FP301	F6-78	—	(南西～北東)	—	—	(0.91)	—	0.41	(40×38)	3	—	火床のみ確認。硬化する。
重複炉穴・単独炉穴												
FP001	F9-00	楕円	N-69° -W	1.83	1.05	1.02	0.75	0.78	—	3	1°	足場側でSK004と重複。火床側の壁面強く被熱し、硬化する。
FP002	F9-11	楕円	N-38° -E	1.22	0.79	(0.54)	—	0.15	37×37	8	—	火床側のみ確認。火床の赤化弱い。
FP003	F9-15	楕円	N-119° -W	1.79	1.23	0.94	0.47	0.61	56×50	4	7°	FP004と重複。
FP004	F9-05	(瓢箪)	N-14° -W	(1.60)	0.73	0.88	0.58	0.62	63×38	4	4°	FP003と重複。火床側の西壁は木根が入り込み崩れている。
FP007	F8-10	楕円	N-31° -W	1.88	1.22	0.98	0.43	0.47	72×53	4	3°	火床は硬化する。
FP010	F8-68	(楕円)	N-91° -E	—	—	0.86	—	—	—	0	—	火床部分は攪乱で壊される。赤化範囲が煙道部まで達する。
FP011	F8-68	(楕円)	N-155° -E	—	—	0.58	—	0.26	27×15	0	—	火床部分の赤化範囲はわずかで、赤化は薄く硬化していない。
FP012	F8-87	楕円	N-85° -W	(1.37)	1.70	1.36	0.46	0.55	86×65	4	5°	FP013と重複。火床上面で土器が一括投棄されていた。
FP013	F8-97	楕円	N-173° -W	2.94	1.52	1.41	0.59	0.65	76×68	16	8°	FP012と重複。火床上面で土器が一括投棄されていた。
FP014	F8-51	楕円	(南～北)	1.22	0.62	—	0.18	0.28	51×—	4	(17°)	小型で足場はスロープ状。火床の赤化範囲は薄く、硬化しない。
FP016	E8-29	(楕円)	N-16° -W	1.67	(0.80)	(0.54)	0.26	0.29	53×39	10	0°	火床は攪乱の間に残存。炉穴自体不整形なのは攪乱の影響か。
FP034	E8-67	—	—	—	—	—	—	—	33×21	3	—	火床のみ確認。赤化が薄く、硬化しない。
FP035	E8-77	—	—	—	—	—	—	—	90×84	0	—	火床のみ確認。赤化が薄く、硬化しない。
FP036	F8-69	瓢箪	N-20° -W	2.39	1.45	0.86	0.58	0.52	63×54	5	7°	火床は硬化する。足場の中央でわずかに段差を有する。
FP037	E7-39	楕円	N-8° -E	(1.90)	1.31	1.26	0.47	0.46	50×44	6	1°	FP039・040と重複。火床は硬化する。
FP039	E7-39	隅丸長方形	N-113° -W	1.27	0.77	0.87	0.41	0.44	47×40	0	6°	小型。FP037・040と重複。火床は硬化する。
FP040	E7-39	瓢箪	N-10° -E	(1.20)	0.73	—	0.17	0.30	33×27	4	3°	FP037・039と重複。火床は小規模で、赤化は薄く硬化していない。
FP042	F8-38	隅丸長方形	N-48° -E	1.78	1.22	0.96	0.41	0.60	72×70	11	5°	火床は被熱が強いいため凹凸が著しい。
FP065	F7-70	(楕円)	N-10° -W	(1.41)	0.77	0.66	0.39	0.45	59×41	5	7°	FP066・067と重複。火床は硬化する。
FP066	F7-80	(不整形)	N-32° -W	1.54	1.14	(0.40)	0.31	0.25	(51×33)	0	0°	FP065・068と重複。火床と足場の主軸が少しずれる。
FP067	F7-90	(楕円)	N-166° -W	1.15	0.91	0.84	0.29	0.27	(44×22)	0	—	FP066・067と重複。小型。火床の赤化は薄く硬化していない。
FP068	F8-11	楕円	N-70° -E	(1.52)	1.33	0.97	0.25	0.44	52×47	7	4°	FP069と重複。上面で石皿が残置される。
FP069	F8-01	楕円	N-13° -E	2.36	1.28	(0.96)	0.28	0.39	87×54	7	6°	FP068と重複。焼土は厚めの堆積。
FP175	E7-66	楕円	N-99° -E	(1.36)	1.02	0.90	0.15	0.25	48×45	0	0°	火床は硬化していない。
FP200	D5-87	楕円	N-107° -W	(1.12)	1.18	1.09	0.48	0.41	41×37	5	0°	FP313と重複。火床は硬化していない。
FP201	D5-89	(楕円)	N-150° -E	(1.56)	(0.71)	1.07	0.08	0.12	60×44	10	0°	火床は赤化が薄く硬化していない。
FP202	D5-97	—	—	—	—	—	—	0.14	(87×42)	0	—	火床は赤化が薄く硬化していない。
FP203	E6-20	楕円	N-2° -W	1.89	1.14	1.08	0.17	0.22	27×27	0	0°	火床は規模が小さい。赤化が薄く硬化していない。
FP204	E6-02	(楕円)	N-1° -E	2.14	0.94	0.98	0.44	0.46	75×55	4	0°	煙道に赤化範囲が達している。足場はわずかにスロープ状となる。
FP209	E7-59	瓢箪	N-73° -E	1.78	1.03	0.68	0.17	0.41	40×37	6	18°	足場側が途中で広がり、傾斜度も変化する。
FP210	E6-82	(楕円)	N-66° -W	(0.94)	0.96	1.00	0.31	0.33	50×46	3	4°	FP211と重複する。火床は硬化する。
FP211	E6-82	楕円	N-15° -E	2.00	(1.05)	0.82	0.32	0.40	53×49	3	3°	FP211と重複する。火床は硬化する。
FP222	E6-93	—	—	—	—	—	—	0.03	(43×23)	2	—	火床のみ確認。
FP230	E7-29	楕円	N-49° -E	2.39	1.00	0.80	0.48	0.57	42×36	6	13°	火床は硬化する。足場はスロープ状で段を有する。
FP231	F6-60	隅丸長方形	N-119° -W	2.21	1.43	1.41	0.42	0.59	70×48	2	8°	やや大型。FP232と重複する。火床は硬化し、足場はスロープ状。
FP232	F6-70	(隅丸長方形)	N-28° -W	(1.13)	0.86	0.71	0.13	0.25	42×33	4	6°	FP231・233と重複する。火床は赤化が薄く硬化していない。
FP233	E6-69	隅丸長方形	N-116° -W	2.28	1.01	1.03	0.39	0.45	68×58	5	9°	FP232と重複する。火床は硬化し、足場はスロープ状になる。
FP234	F6-40	隅丸長方形	N-86° -E	1.39	0.60	0.74	0.13	0.15	50×40	6	3°	小型。火床は硬化する。
FP235	E6-49	—	—	—	—	—	—	0.50	75×59	4	—	FP332・333と重複する。火床のみ確認し、硬化している。
FP240	E6-37	不整形	N-150° -E	1.22	0.72	0.97	0.19	0.23	37×28	1	2°	FP332・333と重複する。火床のみ確認し、硬化している。
FP265	F6-85	長楕円	N-10° -W	(2.50)	(0.98)	1.01	0.28	0.50	39×35	5	13°	FP266・306と重複する。小型。火床は硬化する。
FP266	F6-84	楕円	N-118° -W	(1.55)	(0.48)	0.78	0.18	0.22	55×44	9	1°	FP265・306と重複する。赤化範囲は煙道部まで達する。
FP267	F7-23	隅丸長方形	N-52° -E	2.68	(1.01)	(0.92)	0.60	0.65	65×58	7	5°	FP307を切る。火床の規模大きめ。煙道部まで赤化範囲が達する。
FP302	F7-26	楕円	N-58° -E	1.14	—	0.77	—	0.20	68×38	6	—	小型。窪み全体に焼土が堆積。
FP306	F6-95	—	—	—	—	—	—	0.28	(60×34)	9	—	FP265・266と重複する。火床のみ確認。FP265に切られ約1/2残存。
FP307	F7-23	長楕円	N-15° -E	2.21	—	0.73	—	0.35	36×25	3	—	FP267に切られる。火床は硬化する。
FP308	F6-36	不整形	N-26° -E	1.24	0.96	0.89	0.10	0.11	(42×31)	4	—	小型。火床は硬化していない。
FP313	D5-87	(楕円)	N-76° -E	(1.60)	0.84	0.93	0.47	0.47	55×37	2	0°	FP200と重複。上部は竹根が密生し確認不能。火床は硬化しない。
FP318	F7-16	—	—	—	—	—	—	—	44×40	12	—	火床の底面のみが残存する。
FP332	E6-49	—	—	—	—	—	—	0.39	(68×59)	1	—	FP235・333と重複する。火床のみ確認し、硬化している。
FP333	E6-48	(長楕円)	N-72° -E	(1.23)	1.12	1.09	0.33	0.48	70×65	2	8°	FP235・332と重複する。火床は硬化し、足場はスロープ状になる。

表7 寒沢遺跡(8)遺構一覧表2(土坑)

遺構名	グリッド	形態	主軸方向	規模(m)			備考
				長軸	短軸	深さ	
SK001	F9-29	長楕円	N-6° -W	2.17	0.84	1.28	陥穴。北側で第2炉穴群と重複。本跡が新しい。底面の短軸は0.12mで、開口部から先細りの形状になる。
SK002	F9-33	長楕円	N-52° -W	2.32	1.46	2.77	陥穴。かなり深く、開口部付近の壁面が遺構内に崩落していた。崩落前の層から縄文時代前期の遺物が出土。
SK003	F9-44	円形	N-38° -W	0.87	0.80	0.43	小型の土坑。
SK004	F9-01	円形	N-23° -E	1.65	1.74	0.58	円筒形でFP001とは足場側で重複し、一体化した状態であることから、炉穴に関連した施設の可能性がある。
SK005	E8-61	楕円	N-2° -W	1.54	1.33	0.70	第3炉穴群とは西側で接するが、切り合いはない。壁はオーバーハングし、袋状の形態となる。
SK006	G9-00	長楕円	N-5° -W	1.84	0.61	1.00	陥穴。南側で第2炉穴群と重複。本跡が新しい。底面の短軸は0.08mで、開口部から先細りの形状になる。
SK007	E8-59	隅丸方形	N-65° -E	1.48	1.22	1.09	第1炉穴群中にあり、FP005・006・038・043に囲まれた中央部に掘り込まれている。内部には焼土ブロックと被熱したとみられる硬質のロームブロックが多量に流れ込んだ層が堆積していた。
SK008	F7-83	長方形	N-20° -W	1.60	1.02	0.96	第5炉穴群中のほぼ中央にあり、FP093とした火床に接していることから、同炉穴の足場である可能性が高い。
SK009	F8-74	長楕円	N-27° -E	2.21	0.61	0.94	陥穴。底面の短軸は0.11mで、開口部から先細りの形状になる。長軸側端部の壁面が抉れている。
SK010	F9-13	長楕円	N-36° -W	2.6	1.36	1.76	陥穴。底面の短軸は0.28mで、他の陥穴に比べて幅が広くなる。
SK011	G7-82	(円形)	—	—	—	0.35	第6炉穴群北端にあり、炉穴の掘り込みよりは浅い。複数の炉穴と重複し、全容は把握できない。
SK012	E6-52	楕円	N-88° -E	(2.57)	2.21	0.24	平面規模は大型であるが、浅めの土坑。土器は小片ながら多めに出土している。
SK013	E6-38	楕円	N-38° -W	0.85	0.75	0.16	小型で浅めの土坑。
SK014	E6-58	—	—	—	—	—	確認当初、土坑としていたが、後に攪乱であると判明したため除外した。
SK015	E6-42	不整形	—	—	—	—	風倒木痕と判断し、土坑から除外した。
SK016	E7-15	長楕円	N-27° -W	1.88	0.50	1.54	陥穴。第9炉穴群中で重複。本跡が新しい。底面の短軸は0.11mで、開口部から先細りの形状になる。
SK017	F6-72	円形	N-36° -W	1.41	1.32	0.27	ほぼ円筒形に近い土坑。
SK018	F6-52	楕円	N-42° -W	1.26	0.85	0.29	楕円状の土坑。
SK019	G8-13	楕円	N-42° -E	1.42	0.79	0.60	第6炉穴群のほぼ中央部にあり形状は炉穴に近いが、火床らしきものが確認できなかったため土坑とした。
SK020	G8-22	円形	—	—	—	0.55	第6炉穴群のやや南寄りにあり、FP106・126～128・147に囲まれた空間を土坑とした。
SK021	F8-36	不整形	—	1.87	1.42	0.40	第4炉穴群中のほぼ中央にあり、FP052・053の足場側にある空間を土坑とした。
SK022	F7-01	不整形	—	—	—	0.25	第14炉穴群と北側半分が重複し、SK023とも接する。
SK023	F7-01	(楕円)	—	—	—	0.40	第14炉穴群中にあり、SK022とも接する。FP278・286の足場側に隣接し、双方炉穴に関連する施設の可能性。
SK024	F7-94	不整形	—	—	—	0.64	第4炉穴群中のほぼ中央にあり、FP082・085の足場側にある空間を土坑とした。

表8 寒沢遺跡(8)出土土器内訳表1(炉穴)

群	遺構	穂系文系		沈線文系						条痕文系						条痕文系				底部				前期								
		稲荷台		沈線文		田戸下層		田戸上層		無繊維無文		条痕文		轆々島台		茅山下層				繊維無文		尖底		平底		平行沈線 浮線文		爪形文				
		片	重量(g)	片	重量(g)	片	重量(g)	片	重量(g)	片	重量(g)	片	重量(g)	片	重量(g)	片	重量(g)	片	重量(g)	片	重量(g)	片	重量(g)	片	重量(g)	片	重量(g)	片	重量(g)	片	重量(g)	
第1炉穴群																																
1	FP005			2	32.8					4	91.2	13	145.0			3	21.3					10	76.6			1	47.9					
1	FP006									2	26.9	10	230.8							1	47.5											
1	FP008			3	457.5					3	24.9	10	40.1							3	43.7	6	49.9									
1	FP009									1	26.4	2	48.8									2	20.9									
1	FP015											1	7.7	2	25.2											1	17.3					
1	FP038			2	50.1					3	43.7	6	98.8			2	30.5															
合 計	0	0.0	7	540.4	0	0.0	0	0.0	13	213.1	42	571.2	2	25.2	5	51.8	0	0.0	4	91.2	18	147.4	0	0.0	2	65.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0
第2炉穴群																																
2	FP017	3	90.6	4	70.4					2	32.1	8	159.9									2	49.5									
2	FP018											7	124.8																			
2	FP019	1	26.5							1	7.8	2	45.0																			
2	FP041	3	68.3	2	63.8							3	67.2																2	40.5		
合 計	7	185.4	6	134.2	0	0.0	0	0.0	3	39.9	20	396.9	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	49.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	40.5		
第3炉穴群																																
3	FP020			2	27.2					1	16.0	6	112.0													1	15.7					
3	FP022	1	7.5	9	196.2					3	30.5	13	1911.4									2	14.0			1	17.9					
3	FP023	1	8.7			2	23.1															1	13.6									
3	FP025			1	16.8							6	71.7	2	57.2																	
3	FP026	4	45.4	11	204.1					16	149.3	45	565.1			1	36.5	1	12.1			20	228.7					1	7.7			
3	FP028			3	81.5					3	31.2	1	19.9					1	10.4													
3	FP029			1	33.2							2	11.9									1	9.3									
3	FP030									1	31.2																					
3	FP031	1	8.8	9	186.6					8	70.8	24	356.7					1	12.3			11	137.6	1	43.6							
3	FP032											8	117.4									1	5.3									
3	FP033											3	20.6					1	10.5													
合 計	7	70.4	36	745.6	2	23.1	0	0.0	32	329.0	108	3186.7	2	57.2	1	36.5	4	45.3	0	0.0	36	408.5	1	43.6	2	33.6	1	7.7	0	0.0		
第4炉穴群																																
4	FP044	1	20.8	6	109.7					5	94.4	10	211.3	4	70.8							2	24.7			1	30.9					
4	FP045			2	24.5							4	46.4									1	8.3									
4	FP046									7	34.1	3	31.2	1	50.0					2	41.2	7	76.8									
4	FP047			1	11.5					2	15.1	1	26.0																			
4	FP048	2	25.9	1	19.4					3	29.5	33	632.5			3	21.4					4	62.6			1	25.7					
4	FP049			6	120.5					3	57.1	16	261.6	1	24.3					1	13.6	13	111.7									
4	FP050											4	169.7	1	32.4			1	3.1	1	5.8											
4	FP051			2	65.8					1	4.1																					
4	FP052	1	25.4							2	13.8	7	117.3			1	7.2			1	36.0	10	87.9			1	42.2					
4	FP053									1	18.0	7	51.1																			
4	FP054	1	15.8	4	58.0					6	47.6	25	307.6	1	20.3							5	48.3			1	7.3					
4	FP055			2	33.6					4	29.6	13	282.5	1	39.2	1	10.4					5	51.1			2	184.4					
4	FP056	2	15.7	10	385.6					2	22.6	51	786.5	5	143.5	2	50.1	1	46.1			10	129.5			2	50.9					
4	FP062											5	74.2			5	55.3					3	32.6									
4	FP063			2	36.8					1	10.1	12	145.7	1	23.5							4	33.2									
合 計	7	103.6	36	865.4	0	0.0	0	0.0	37	376.0	191	3143.6	15	404.0	12	144.4	2	49.2	5	96.6	64	666.7	0	0.0	8	341.4	0	0.0	0	0.0		
第5炉穴群																																
5	FP070																					1	10.1									
5	FP071	1	16.7	2	30.4					3	24.4	64	1096.9	1	14.8	3	79.7			1	45.8	5	72.3			1	17.0					
5	FP072	1	24.3	3	97.5							36	827.7			1	5.4			1	28.4	5	48.3									
5	FP073	1	16.6	2	37.7					4	32.0	13	107.3									1	10.9									
5	FP074			1	66.8					4	68.2	20	299.7									1	19.7									
5	FP075	1	5.5							1	13.2	9	120.7							1	7.3	10	91.4									
5	FP076			3	61.8					6	72.1	106	2376.0	4	97.0	5	73.0					20	232.4			3	59.1					
5	FP077									1	2.8	16	497.2							1	29.8					1	48.6					
5	FP078																															
5	FP079			2	64.1					1	5.6	1	8.6									1	14.4									
5	FP080	3	44.4	3	43.6					2	18.2	25	608.3			2	22.7			1	68.3	9	91.0						1	16.0		

群	遺構	撚糸文系		沈線文系						条痕文系								底部		前期											
		稻荷台	沈線文	田戸下層	田戸上層	無織維無文	条痕文	鵜ヶ島台	茅山下層			纖維無文	尖底	平底	平行沈線 浮線文	爪形文															
			片						重量(g)	刺突文	押引文						屈曲部	片	重量(g)	片	重量(g)										
第5炉穴群																															
5	FP081		2	63.8				1	5.1	36	574.6			2	19.2			2	28.0												
5	FP082	2	49.1	1	28.1				1	8.8	8	96.7						2	64.0			4	47.4								
5	FP083	1	18.6	5	131.1				8	143.8	96	1539.9	3	40.3	2	34.6		3	94.3	5	101.0		1	13.2							
5	FP084	1	6.1						1	21.3	8	85.9																			
5	FP085		1	18.6					1	11.0	16	265.7			2	92.2			1	9.2											
5	FP088	2	25.4	1	36.0						16	349.6							2	28.9											
5	FP089		1	56.0							17	450.1	3	259.7	1	14.5		1	51.2	9	138.1		1	17.1							
5	FP090		1	7.3							6	127.3			1	13.3			1	17.7											
5	FP091	4	16.0								16	383.9																			
5	FP092	1	10.7								5	87.9																			
5	FP094		4	96.4					2	18.1	1	21.5							3	35.0											
5	FP095										2	30.6																			
5	FP096								2	29.4	5	52.1							1	2.9											
5	FP097				1	17.3			1	23.1																	1	8.9			
5	FP098		1	36.1					1	18.3	1	11.4			1	5.1			4	20.9											
5	FP099																		2	8.6											
5	FP100										9	195.4	1	12.3					4	63.6											
合 計		18	233.4	33	875.3	1	17.3	0	0.0	40	515.4	532	10215.0	12	424.1	20	359.7	0	0.0	9	325.1	90	1114.4	0	0.0	11	202.4	0	0.0	2	25.5
第6炉穴群																															
6	FP101			1	19.6				1	11.8	23	403.6					3	89.7	4	80.4											
6	FP102			1	12.4						30	698.7	1	28.8					1	10.5											
6	FP103	1	21.0																												
6	FP104	1	7.6	1	29.3				2	16.5	22	321.8	5	104.0		1	36.8		7	96.8											
6	FP105																														
6	FP106	1	14.4								5	48.6	1	17.5								1	24.7								
6	FP107																														
6	FP108	2	19.7	3	87.9						4	121.5	4	149.3					3	17.1											
6	FP109										7	123.7	2	41.7																	
6	FP110	1	20.4																												
6	FP111										7	134.5																			
6	FP112										1	1141.4	1	29.9																	
6	FP113			1	18.2						9	240.9					3	76.1		3	32.3										
6	FP114	1	26.2	1	10.3						16	182.1						1	21.4	1	10.6										
6	FP115	1	9.4						1	10.1	9	132.2								1	14.7										
6	FP116								1	17.0	11	188.0	1	21.3	2	61.2				4	37.2										
6	FP117										52	608.8	8	163.2			1	11.8		9	138.8							1	5.4		
6	FP118										8	96.3																			
6	FP119										3	1790.7																			
6	FP118・	1	9.9								18	263.4	1	9.9																	
6	FP120	2	19.5								17	208.4	2	33.9			1	7.4	3	98.9	2	26.7									
6	FP121										1	16.6																			
6	FP122	2	35.8	1	32.3						3	43.4	1	18.7																	
6	FP123	5	41.3	3	54.0				1	6.9	18	346.2	3	71.3				1	22.7	9	62.0				2	92.8					
6	FP124										5	78.6								3	22.0					2	48.5				
6	FP125	3	100.8	4	127.3				2	85.6	44	731.1	2	13.1				5	115.4	10	115.3					5	45.5				
6	FP126										4	51.5						1	13.6							2	48.5				
6	FP127	1	8.7						4	58.1	6	104.0	5	116.0												1	22.0				
6	FP128										3	64.4																			
6	FP129	2	34.3						1	8.0	16	369.4								1	18.7					1	45.9				
6	FP130								1	14.6	43	637.9	1	74.1				3	114.2												
6	FP131	3	21.8	1	12.2				1	13.6	10	119.9			1	4.9			2	19.0						1	12.6				
6	FP130・	1	16.5								3	74.8							2	16.5								1	11.0		
6	FP132	1	6.1								17	252.4							1	17.0											
6	FP133										8	73.2																			
6	FP134										1	9.4																			
6	FP134・	1	10.7								12	253.4	1	14.1				4	153.3	2	42.9										
6	FP136	4	35.3								3	40.9	5	104.0					6	54.6						1	40.6				
6	FP137																	1	11.6												
6	FP138										30	596.8																			
6	FP139										6	60.2																			
6	FP140	2	18.8						1	6.7	10	148.8	5	65.8													1	68.7			
6	FP141	1	11.0								2	23.2							4	26.0											
6	FP142	1	7.1						1	7.9	6	98.9	2	109.1				1	121.2	2	46.7										
6	FP143	1	28.3						1	21.5	21	302.9						4	115.6	2	35.4										
6	FP145	1	22.3								7	80.8			1	45.8				2	22.1										
6	FP146			1	29.1																										
6	FP147																														

群	遺構	捺糸文系		沈線文系						条痕文系						底部			前期						
		稻荷台	沈線文	田戸下層		田戸上層		無織維無文	条痕文	鴨ノ島台	茅山下層			織維無文	尖底	平底	平行沈線 浮線文	爪形文							
				片	重量(g)	片	重量(g)				片	重量(g)	片						重量(g)	片	重量(g)	片	重量(g)		
第7炉穴群																									
7	FP185		4	83.6					6	89.9					7	105.1									
7	FP187		1	9.7							1	37.9			4	78.8	1	51.1							
7	FP189		1	11.0					7	88.7	2	8.6													
7	FP190		1	36.3					4	147.3	2	61.3			1	15.2									
7	FP191							2	25.8	7	90.3				3	31.8									
7	FP193		1	31.3					7	138.9	1	19.1													
7	FP194		1	90.9																					
7	FP195		1	39.8					20	330.5	2	27.9			4	60.6		3	230.6						
7	FP197		2	20.0					2	55.2															
合 計		0	0.0	7	229.3	0	0.0	0	0.0	2	25.8	47	850.9	7	116.9	0	0.0	0	0.0	0	0.0				
第8炉穴群																									
8	FP205	4	59.4		1	13.1	1	7.4	13	197.9	14	180.3			34	414.0									
8	FP208	1	20.6						3	39.4					23	173.2									
合 計		5	80.0	0	0.0	1	13.1	1	7.4	16	237.3	14	180.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0				
第9炉穴群																									
9	FP212						3	55.3		1	7.4	3	36.6			2	15.4								
9	FP223									16	879.2	2	29.6												
9	FP224									13	223.8			1	38.7	1	5.4								
9	FP225		3	58.0				3	42.9	10	212.8			1	33.9	6	92.3								
9	FP236		2	21.8				6	55.3	40	670.9					4	64.3								
9	FP237									3	31.1														
9	FP238	1	4.4							10	238.7		1	20.4		2	17.9		2	93.2					
9	FP262		1	10.4						2	31.2		1	19.3		2	54.3								
9	FP269	1	9.8		1	40.9				3	57.8					5	101.7								
9	FP270		2	29.1				3	67.6	2	159.4		2	15.9		1	7.4								
9	FP271					2	29.4			2	38.2														
9	FP272							1	14.2	14	130.3														
9	FP273		5	70.3				2	38.3	53	1464.7			3	29.3	1	26.5	14	228.6	1	7.5				
9	FP303				2	26.1				4	51.2					1	8.4								
合 計		2	14.2	13	189.6	3	67.0	5	84.7	15	218.3	173	4196.7	5	66.2	4	55.6	3	29.3	3	99.1				
第10炉穴群																									
10	FP212	2	17.9	4	59.9				5	126.3	14	253.6				5	51.7								
10	FP215			1	20.8																				
10	FP216			1	5.8					6	48.8					6	61.9								
10	FP219					2	36.0	1	12.4	19	663.6					4	30.0	2	28.4						
10	FP220	3	32.7	1	39.6		1	59.8	1	6.8	33	354.8			1	20.9	9	127.9	2	141.5					
10	FP221			1	13.0					2	24.6					1	20.4								
合 計		5	50.6	8	139.1	0	0.0	3	95.8	7	145.5	74	1345.4	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	20.9				
第11炉穴群																									
11	FP228			1	9.6				5	53.4	24	903.3	1	59.4			7	150.4							
11	FP229	1	6.4	1	32.3					18	205.8	5	82.5		1	26.0	1	16.4	4	46.8					
合 計		1	6.4	2	41.9	0	0.0	0	0.0	5	53.4	42	1109.1	6	141.9	0	0.0	1	26.0	1	16.4				
第12炉穴群																									
12	FP242	5	46.7						3	38.5	23	361.2				8	1599.2	7	93.7						
12	FP243									3	36.9			1	16.4		1	14.6							
12	FP244	2	18.8	1	39.7					5	82.9							1	39.6						
12	FP246									5	80.8														
12	FP247	2	10.0							3	25.0														
12	FP248	2	45.4					1	27.1	10	104.1				2	60.8									
12	FP251							1	4.2	3	24.6														
12	FP253	1	21.3							1	23.5														
12	FP256									1	14.2				1	26.3									
12	FP260									4	32.2														
12	FP261									1	8.7														
合 計		12	142.2	1	39.7	0	0.0	0	0.0	5	69.8	59	794.1	0	0.0	0	0.0	1	16.4	11	1686.3				
第13炉穴群																									
13	FP263									84	727.7														
13	FP264							3	33.5	64	522.1					3	101.9								
13	FP274									1	89.7														
13	FP275							1	8.2	9	240.0					5	67.9								
13	FP276							4	84.6				2	23.1		2	47.7								
13	FP277			2	56.9					2	17.8					2	39.8								
合 計		0	0.0	2	56.9	0	0.0	0	0.0	8	126.3	160	1597.3	0	0.0	2	23.1	0	0.0	0	0.0				
第14炉穴群																									
14	FP241	3	33.3	2	7.6					28	952.1	2	71.7	9	209.5			21	207.3		2	25.9	1	36.6	
14	FP278							1	4.9	5	71.1					1	27.0								
14	FP279	6	102.7	1	8.9		1	10.7		11	138.7														
14	FP280									4	122.7														
14	FP284						1	21.5	1	8.8	12	167.5													
14	FP286									1	6.0														
14	FP287					1	17.4	1	6.8	5	60.9				1	29.5									
14	FP288									7	84.2		1	13.9											
14	FP289	1	6.5					1	14.0	16	252.0														
14	FP290							1	26.9	3	44.2				2	30.3									
14	FP292			1	14.0			3	25.0	7	57.8						2	42.2							
14	FP293			1	43.0												1	15.4							
14	FP304									12	249.6														
合 計		10	142.5	5	73.5	0	0.0	3	49.6	8	86.4	111	2206.8	2	71.7	10	223.4	0	0.0	3	59.8				
第15炉穴群																									
15	FP294									1	27.1				1	219.7									
15	FP295	1	15.3												1	49.1	3	32.5							
15	FP296	3	41.9	1	7.3				3	39.2	5	66.5					4	36.8							
15	FP298									2	19.8														
15	FP300									3	27.1														
合 計		4	57.2	1	7.3	0	0.0	0	0.0	3	39.2	11	140.5	0	0.0	0	0.0	2	268.8	7	69.3	0	0.0	0	0.0

群	遺構	撚糸文系		沈線文系					条痕文系								底部		前期												
		稻荷台	沈線文	田戸下層	田戸上層	無織維無文	条痕文	鶴ヶ島台	茅山下層				織維無文	尖底	平底	平行沈線 浮線文	爪形文														
									刺突文		押引文							屈曲部													
									片	重量(g)	片	重量(g)							片	重量(g)	片	重量(g)									
重複炉穴・単独炉穴																															
	FP001		2	28.1				10	144.5	14	643.7	1	11.2						4	24.6											
	FP002	1	4.4	3	59.0			1	11.6	1	2.4																				
	FP003	2	46.1	3	112.5			1	5.0	7	65.7								3	49.7											
	FP004									1	31.0								1	7.4											
	FP007			3	43.3			5	86.6	2	62.4	1	51.3																		
	FP010	3	24.3	6	102.7			11	229.8	4	49.7			1	20.1				8	90.4					1	16.3					
	FP012							22	684.8	25	1668.3																				
	FP013	2	11.8	2	44.1			4	52.0	46	2073.4	10	1087.9	1	5.9	1	16.2	1	33.6	2	26.1	1	118.9								
	FP014	1	19.8							1	32.5																				
	FP016			1	6.3					34	398.7								4	20.4											
	FP036	2	14.0	3	31.0			1	25.0	12	121.3	68	1419.3	4	82.4		1	6.9	2	58.4	17	175.5	1	28.0	2	70.3					
	FP037			1	46.1											1	19.7														
	FP042	1	5.6	8	127.5			2	26.7	12	177.4	6	104.2	1	18.0					14	174.1										
	FP065			2	32.6														2	37.2											
	FP066			2	68.9			4	54.0	5	60.8	6	93.5																		
	FP067									7	56.1	7	70.2																		
	FP068			3	48.5					19	423.9								3	30.3											
	FP175									4	35.1																				
	FP201									2	9.0																				
	FP203									12	239.9																				
	FP204							1	20.8											1	18.2										
	FP209									8	329.3									1	8.2										
	FP230							3	23.9	4	50.2								2	28.8											
	FP231	3	42.0							2	31.0								2	47.1											
	FP232									2	49.9									1	19.3										
	FP233	2	24.0	1	20.4					54	967.4	6	149.0	7	80.4			1	14.4	12	111.9			3	91.4						
	FP235							1	10.1	9	590.3								2	21.4											
	FP265							5	53.4	10	108.8								3	57.6			1	163.8							
	FP266									8	46.4								1	5.3											
	FP267	1	8.0							12	154.2									1	19.5										
	FP313																														
	合 計	18	200.0	40	771.0	0	0.0	2	85.4	60	839.7	370	8793.3	66	3318.0	10	124.4	3	42.8	4	106.4	84	973.0	3	205.0	6	325.5	1	16.3	0	0.0

表 9 寒沢遺跡 (8) 出土土器内訳表 2

遺構	撚糸文系	沈線文系					条痕文系								底部		前期													
	稻荷台	沈線文		田戸下層	田戸上層	無織維無文	条痕文	鶴ヶ島台	茅山下層				織維無文	尖底	平底	平行沈線 隆帯文	爪形文													
		片	重量(g)	片	重量(g)	片	重量(g)	片	重量(g)	片	重量(g)	片						重量(g)	片	重量(g)										
SK001	3	40.2	5	163.5			2	25.0	1	29.6					1	32.5		1	10.7											
SK002	4	63.9	10	284.8		10	73.2	7	113.0	1	85.3	1	7.5		5	32.3		1	10.9	8	138.8	4	73.8							
SK004			3	29.4			7	119.4					2	28.8																
SK005			5	137.7			7	67.6	11	134.2						4	35.7													
SK007			1	24.6			3	41.5																						
SK008			3	100.2			3	36.2	16	239.5	1	17.0	1	6.8																
SK009	1	4.7	1	26.9				1	9.0																					
SK010			4	72.9				5	86.3						1	52.1	1	13.7		1	9.0			1	8.6					
SK012							3	25.6	4	69.8						10	118.5													
SK014	1	11.0	1	20.7			2	39.5	10	159.1					1	32.5	3	61.1												
SK015							1	16.9	9	95.4							7	75.5												
SK016	1	19.0	1	22.6			2	38.1	6	116.8							1	16.1												
合 計	10	138.8	34	883.3	0	0.0	0	0.0	38	458.0	71	1048.1	3	131.9	4	43.1	0	0.0	2	84.6	31	352.9	0	0.0	3	52.4	8	138.8	6	93.1

表 10 寒沢遺跡 (8) 出土石器内訳表

図	No.	出土位置	種別	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
		FP043-1	剥片	黒曜石	58.06	22.99	9.93	13.0	
図66	11	FP068-0001	石皿・多孔石	石英片岩	360.0	328.0	71.0	7000	完形
		FP071	剥片	チャート	25.02	15.29	3.26	1.2	
		FP072-2	磨石	デイサイト	100.98	90.74	42.11	590.1	完形
図66	2	FP074-1	石鏃	チャート	22.5	15.5	6.5	1.8	完形
		FP076	剥片	黒曜石	19.03	16.83	5.14	1.5	
		FP076	剥片	黒曜石	18.17	11.85	3.71	0.7	
		FP076	磨石	安山岩	84.49	58.95	23.64	78.9	
図66	3	FP076-0020	石鏃	チャート	19.5	13.0	5.0	0.7	完形
		FP077-1	剥片	黒曜石	18.38	11.59	3.39	0.5	
図66	12	FP078-0001	石皿	石英片岩	269.0	241.0	65.0	6000	完形
		FP083-3	剥片	黒曜石	25.55	18.46	3.50	1.3	
		FP084-1	剥片	黒曜石	52.94	33.08	10.21	16.1	
		FP105-1	磨石	砂岩	45.68	46.29	27.18	72.0	
		FP129-1	剥片	チャート	26.56	20.98	5.04	2.5	
		FP133-1	磨石	砂岩	98.63	86.91	53.75	642.2	完形
		FP137-1	砥石	ホルンフェルス	68.25	62.12	41.25	244.6	
		FP162	剥片	黒曜石	27.12	24.76	8.54	4.0	焼土内出土
		FP162-26	剥片	黒曜石	24.62	12.48	7.29	1.8	
		FP176	磨石	安山岩	97.15	51.03	25.11	155.4	
		FP185-1	磨石	石英斑岩	86.7	52.88	33.90	229.7	完形
		FP201-1	剥片	黒曜石	25.55	11.72	6.49	1.6	
		FP212-214-1	剥片	黒曜石	25.92	13.73	6.30	1.6	
		FP212-214-1	剥片	黒曜石	16.77	13.01	3.33	0.6	
		FP216-218-1	剥片	黒曜石	24.61	10.40	7.14	1.8	
		FP216-218-1	剥片	黒曜石	30.86	12.73	4.15	0.8	
		FP216-218-1	磨石	砂岩	73.06	58.25	36.05	205.5	
		FP219-1	剥片	黒曜石	24.56	21.32	10.95	4.9	
		FP219-1	剥片	黒曜石	11.25	7.56	5.06	0.4	
図66	4	FP219-2	石鏃	チャート	28.0	19.0	5.0	1.6	完形

図	No.	出土位置	種別	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
		FP220-1	剥片	黒曜石	28.96	14.98	9.22	3.1	
		FP220-1	剥片	黒曜石	25.55	13.26	6.71	1.3	
		FP220-1	剥片	黒曜石	11.46	9.85	2.77	0.3	
		FP221-1	剥片	黒曜石	19.25	8.74	4.44	0.6	
		FP229-1	剥片	黒曜石	24.01	13.29	5.15	0.9	
		FP229-1	剥片	黒曜石	18.54	18.02	7.98	1.2	
図66	13	FP232-0001	石皿	石英片岩	330.0	290.4	91.0	14000	完形
		FP233-1	石皿	砂岩	109.23	69.06	59.91	630.5	
		FP237-1	剥片	黒曜石	20.69	14.53	5.94	1.4	
図66	1	FP265-1	石鏃	黒曜石	17.5	14.5	3.5	0.5	完形
		FP270-1	剥片	黒曜石	52.5	20.48	9.15	5.8	
		D5-88	剥片	黒曜石	50.51	39.68	17.73	24.2	
		D5-99	剥片	黒曜石	16.12	7.96	4.99	0.5	
		D5-99	剥片	黒曜石	11.37	10.49	2.72	0.3	
		D6-39	剥片	黒曜石	26.75	20.44	4.16	2.3	
		E6-00	剥片	黒曜石	58.22	21.78	12.71	13.0	
		E6-08	磨石	砂岩	91.75	31.16	46.80	156.8	
		E6-09	剥片	黒曜石	11.08	8.44	2.02	0.2	
		E6-13	磨石	閃緑岩	107.34	76.62	40.31	531.9	完形
		E6-20	磨石	石英斑岩	81.19	61.90	41.00	290.4	赤化強・ほぼ完形
		E6-20	磨石	安山岩	48.10	45.91	46.91	140.5	黒色鉱物他
		E6-23	剥片	チャート	28.28	23.35	6.99	5.1	
		E6-35	磨石	石英斑岩	70.38	59.69	33.12	199.6	完形
		E6-35	磨石	閃緑岩	64.08	57.96	42.32	200.9	
		E6-45	剥片	黒曜石	22.20	18.85	4.08	1.5	
図66	6	E6-51	石鏃	黒曜石	20.0	18.5	5.0	1.2	完形
		E6-55	磨石	安山岩	50.79	51.03	24.03	89.7	
図66	5	E6-58	石鏃	黒曜石	18.5	18.0	3.5	0.9	先端部欠損
図66	9	E6-60	打製石斧	ホルンフェルス	62.00	43.00	23.00	79.4	
		E6-83	磨石	砂岩	46.55	58.84	40.90	99.0	
		E6-91	剥片	黒曜石	19.77	10.66	5.16	0.7	
		E6-97	磨石	砂岩	102.39	57.07	50.62	423.9	完形
		E7-12	剥片	黒曜石	15.39	7.26	3.24	0.2	
		E7-88	磨石	石英斑岩？	80.66	62.57	49.85	270.1	接合・ほぼ完形
図66	15	E7-92	石皿	玄武岩カ	(125.0)	(51.0)	(55.0)	165.0	
		F6-21	剥片	黒曜石	22.52	14.21	4.73	0.9	
		F6-32	磨石・蔽石	安山岩	116.22	55.60	30.68	248.1	打痕あり。
図66	14	F6-32	石皿	安山岩	(54.09)	(69.0)	(33.0)	147.8	
		F6-42	剥片	黒曜石	19.70	10.72	5.30	0.9	
		F6-58	磨石	砂岩	82.29	64.32	50.78	349.6	赤化
図66	8	F6-58	打製石斧	珪質頁岩	108.0	57.0	23.0	182.8	完形
		F6-62	磨石	石英斑岩	110.76	59.74	43.86	416.5	赤化
		F6-70	剥片	黒曜石	17.26	13.57	4.03	0.6	
		F6-83	剥片	黒曜石	21.68	16.92	5.35	2.1	
		F7-28	磨石・蔽石	砂岩	88.34	75.98	49.32	433.4	完形。打痕あり。
		F7-46	磨石	安山岩	89.82	62.67	38.92	313.8	
		F7-63	磨石	安山岩	93.60	52.03	31.16	188.0	煤こげ
		F7-63	磨石	砂岩	69.30	26.19	20.92	60.5	
		F7-84	剥片	黒曜石	23.75	19.06	6.33	2.6	
		F7-85-8	磨石	石英斑岩	97.60	58.88	41.15	272.9	
図66	7	F7-98	石鏃	頁岩	27.00	17.50	0.06	2.6	風化著
		F8-63	磨石	石英斑岩	76.82	56.95	34.38	211.7	ほぼ完形
図66	10	G8-13	磨石	石英斑岩	98.0	75.0	47.0	453.6	完形。被熱強
		SK012-1	磨石	安山岩	72.28	61.42	47.52	225.8	赤化
		SK014-1	磨石	安山岩	80.30	46.14	30.65	179.6	
		表採	磨石	安山岩	255.0	165.0	60.0	2500	
図66	16	表採	石皿	安山岩	255.0	340.0	70.0	8950	

表凡例

1. 位置がグリッドをまたぐ場合、基本的に面積割合が多いほうを優先するが、炉穴の場合は火床部のある位置を優先した。
2. () 付は、形態・主軸方向では推定値を、遺構の規模・傾斜度、遺物の計測では現存値を表す。
3. 主軸方向は、炉穴では足場を基点に火床部を見た方向、土坑は長軸の方向を示す。